

益將西歸。鉢形城主北條氏郡使告氏直而出陣。金窪與一益戰不利。一益兵乘勝而進。氏直先鋒設伏而伴走。一益陷伏。我兵前後擊之。斬首二千級。時甲斐・信濃大亂。德川氏・上杉氏爭之。氏政又令氏直率兵數萬會戰。不決。乃與共和。定西上野而還。

訓讀 織田信長、既に畿内を定め、來つて勝頼を夾み攻めんと約す。氏政、之を許す。七年九月、勝頼と三島に相持す。八年、浮島原に戦ふ。十年三月、信長、子信忠と、勝頼を撃つて、甲斐に入る。氏政、氏直、兵三萬に將として、境上に臨む。勝頼、困蹙し、死せんと欲し、夫人をして小田原に走らしむ。夫人聽かず。與に俱に自殺す。信長、既に甲斐、信濃を定めて、我が徳川公をして駿河に居らしめ、其の將瀧川一益をして西上野を守り、厩橋城に居らしむ。十年六月、信長、其の下の弑する所と爲る。一益、將に西に歸らんとす。鉢形城主北條氏郡、氏直に告げしめ、出でて金窪に陣し、一益と戦つて、利あらず。一益の兵、勝に乘じて進む。氏直の先鋒伏を設けて伴り走る。一益、伏に陥る。我が兵、前後より之を撃つて、斬首二千級。時に甲斐、信濃、大に亂る。徳川氏、上杉氏、之を争ふ。氏政、又氏直をして、兵數萬を率ゐて會戦せしむ。決せず。乃ち與に共に和し、西上野を定めて還る。

通釋 織田信長は既に畿内を平定して終つてから、使者を以て勝頼を夾み討にしよと約束した。氏政は之を承諾した。七年九月、勝頼と三島に對陣した。八年、浮島ヶ原で戦つた。十年三月、信長は其の子信忠と一緒に

勝頼を撃つて甲斐に攻め込んだ。氏政、氏直、兵三萬を引きつれて國境まで進出した。勝頼は苦しみぢめられ遂に死なうと思ひ、夫人(氏政の妹)を小田原に逃げさせようとした。併し夫人は聽き入れなかつた。勝頼と一益に自殺した。信長は既に甲斐・信濃を平定し、わが徳川公家康をして、駿河に居らせて、その將瀧川一益をして西上野を守つて、厩橋城に居らしめた。十年六月、信長は、その家臣明智のために弑せられた。一益は將に西に歸らうとした。鉢形城主の北條氏は使をやつて、氏直に告げしめ、出で、金窪に陣取り、一益と戦つて見たがうまく行かなかつた。一益の兵は勝につけ込んで進んだ。氏直の先鋒は伏兵を設けて置いて、わざと逃げ出した。一益はうっかりその伏兵に陥つて終つた。我が兵は前後から之を撃ち、斬首二千級もあつた。當時甲斐・信濃の二國が大層亂れてゐた。徳川氏・上杉氏は之を取らうと争つてゐた。氏政は又氏直をして、兵數萬を率ゐて之と會戦せしめた。併し勝負は決まらなかつた。そこで徳川氏と共に和睦をして、西上野を平定して還つて來た。

語釋 夫人(氏政の妹、前年) ○徳川公(外史著者の時代は徳川時代であつたので家康と呼びすてないで公字を用ひたのである) ○鉢形(縣) ○金窪(野)

當是時、伊勢氏盡、定八州、沃野千里、鑄山、煮海、小田原、繁華、爲關東都會第一。然氏政漸驕、侈用人、不別忠佞。初、氏政之爲世子、從氏康、略上野、與武田晴信合兵。軍松山。時方仲夏、有刈麥、馱過軍前者。氏政見之、指問左右何物。左右曰、麥也。氏政曰、盡炊以供賓。晴信哂曰、吾今而後知北條氏大國也。郎君大國公子、故爲是言耳。夫麥

者、撃之、簸之、蕪之、啼而春之者、再然後浸之、而炊之。今郎君乃欲直炊之。左右竊笑之。氏政不通下情如此。以故國政日弊。老臣松田憲秀弄權柄、士民多被冤枉者。嘗有一僧過觀城門、榜令曰「北條氏將亡矣。或走告之市尹。市尹召僧問曰「聞汝謂北條氏將亡、信乎」。曰「信。曰「何以謂之」。曰「吾三十年前過觀榜令、令四五條而已。今則三倍焉。夫德薄則政滯、政滯則令煩。令煩則衆離、衆離則君孤立矣。君已孤立、不亡而何待」。市尹以告氏政。氏政不爲意。獨委任憲秀。

訓讀 是の時に當り、伊勢氏、盡く八州を定め、沃野千里、山を鑄、海を煮て、小田原の繁華、關東の都會第一たり。然れども氏政、漸く驕侈にして、人を用ふるに忠佞を別たす。初め氏政の世子たりしとき、氏康に従つて上野を略し、武田晴信と兵を合せて、松山に軍す。時方に仲夏、麥を刈り歇して軍前を過ぐる者あり。氏政、之を見、指して左右に何物ぞと問ふ。左右曰く「麥なり」と。氏政曰く「盍ぞ炊いで以て賓に供せざる」と。晴信晒つて曰く「吾れ今にして後、北條氏の大國なるを知る。郎君は大國の公子、故に是の言を爲すのみ。夫れ麥は、之を撃ち、之を簸し、之を蕪し、啼し之を春づくもの再び、然る後、之を浸し、而して之を炊ぐ。今、郎君は乃ち直に之を炊がんと欲す」と。左右、竊に之を笑ふ。氏政、下情に通ぜざること此くの如し。故を以て、國政、日に弊る。老臣松田憲秀、權柄を弄して、士民、冤枉を被るもの多し。嘗て一僧あり、過つて城門の榜令を

觀て曰く「北條氏將に亡びんとす」と。或人走つて之を市尹に告ぐ。市尹、僧を召し、問うて曰く「聞く、汝、北條氏將に亡びんと謂ふと。信乎」と。曰く「信なり」と。曰く、「何を以て之を謂ふ」と。曰く、「一吾れ三十年前、過つて榜令を觀しに、令四五條のみ。今は則ち三倍す。夫れ德薄ければ則ち政滯る。政滯れば則ち令煩し。令煩しければ則ち衆離る。衆離るれば則ち君孤立す。君已に孤立す。亡びずして何をか待たん」と。市尹以て氏政に告ぐ。氏政、意と爲さず。獨り憲秀に委任す。

通釋 この當時伊勢氏は皆關八州を平定し、肥えた土地が千里も打ちつき、鑛山を開いて銅鐵を鑄たり、又海水を煮て鹽を取り、小田原の繁華なことは關東の都會中第一であつた。併し氏政はだんく心驕つて贅澤になり、人を用ふるのにも忠義なものと佞人との區別をしなかつた。初め氏政がまだ繼嗣の頃、氏康に従つて、上野を攻め、武田晴信と兵を合せて松山に陣取つたことがあつた。その時は夏の中頃であつたが、折しも麥を刈つて馬に積んで軍隊の前を通つたものがあつた。氏政は之を見て指して、左右の臣に「あれは何かといつて尋ねた。左右の者は「麥で御座います」と曰つた。氏政が曰ふのに「それなら、なぜ飯にたいて客人に食べさせないんだ」と。晴信は笑ひ乍ら曰ふには「余は今日初めて北條氏が大國であるといふことが分つた。若殿は、その大國の公達だから、そんな事をいはれるのである。一體麥は、から竿で打つて、箕でよくふるひ、もみ摺りをしてのみを取り、日に乾かして臼で二度も春き、それから水に浸けて、飯にたくのである。それを今若殿は刈つたばかりのもの直ぐ飯にたかうと申される」と。左右の者はこつそり氏政の愚なことを笑つた。氏政が下々の人情に通じてゐないことはこんな風であつた。だから國の政治は日にくすたれた。家老の松田憲秀は權柄を勝手に振り舞はし、それがために士民で無實の罪を受けたものが随分多かつた。嘗て、一人の僧侶が通りすがつて、城門の前

に立て、あつた制札を見て曰ふのに「北條氏はもう亡びることだらう」と。或る人が走つて之を町奉行に訴へた。町奉行はその僧を呼んで尋ねて曰ふのに「聞けば其の方は北條氏が近く亡びるといつたさうだ。本當か」と。答へて曰ふに「たしかに申しました」と。町奉行は「何故そのやうな事を申しました」と。すると答へて曰ふのに「拙僧は三十年前此處を通つて、制札を見たことがあります、其の時は四五ヶ條だけしかありません。しかるに、今は、之に三倍してあります。一體君主の徳が薄いと、政治は滯滞します。政治が滯滞すれば、法令は煩はしくなります。法令が煩はしくなれば士民は君主から離れるようになる。士民が離れると君主たるものは一本立になつて終ひます。今北條殿は既に孤立して居られる。亡びるのを待たないで何を待ちませうぞ」と。町奉行は、この言葉を氏政に告げた。氏政は別に氣にも留めなかつた。そして獨り憲秀に萬事を委せ切りにしてゐた。

仲夏(舊曆五月) ○豐(糧を白で磨) ○睡(天日に乾か)

十一年七月、氏直娶德川氏。信長既遇害、而其將豐臣秀吉代爲政於畿内、挾天子以令海内。德川氏上杉氏皆附之。秀吉屢使使來說曰、盍來朝京師。十四年八月、氏政遣弟氏規赴京師、不肯親往。如是者再三。氏政曰、秀吉欲以口舌取八州、盍以弓箭取焉。秀吉怒、使請戰。於是、氏政乃修城壘、蓄糧仗。八州將士皆留其部下。守城砦、而聚于小田原。憲秀陰送款於秀吉。

十一年七月、氏直、德川氏に娶る。信長既に害に遇ひ、而して其の將豐臣秀吉代り、政を畿内に爲し、天子を挾んで以て海内に令す。德川氏・上杉氏、皆之に附く。秀吉、屢使をして來り説かして曰く、「盍ぞ來つて京師に朝せざる」と。十四年八月、氏政、弟氏規を遣はして、京師に赴かしめ、肯て親ら往かず。是の如きこと再三。氏政曰く、「秀吉、口舌を以て八州を取らんと欲す。盍ぞ弓箭を以て取らざる」と。秀吉怒つて、使をして、戰を請はしむ。是に於て、氏政乃ち城壘を修め、糧仗を蓄ふ。八州の將士をして、皆其の部下を留め、城砦を守らしめ、而して小田原に聚らしむ。憲秀、陰に款を秀吉に送る。

通釋 十一年七月、氏直は、德川氏から娶つた。信長は既に臣下に弑せられ、その將豐臣秀吉が代つて畿内で政治をなし、天子を擁して天下に號令を出してゐた。德川氏・上杉氏は皆之に附いてゐた。秀吉は度々使を出して説かして曰ふのに「何故京都に來て天子様に御機嫌を奉伺しないのか」と。十四年八月、氏政は弟の氏規を遣はして、京都に行かせ、自分は、どうしても往かうとしなかつた。そんな事が再三續いた。氏政は曰ふのに「秀吉は、口先で關八州を取らうと思つてゐる。なぜ弓箭で取らないのだ」と。秀吉は怒つて使をして、戰爭を申し込ませた。そこで氏政は、城壘を修繕し、兵糧武器を蓄へて準備をした。八州の將士は皆その手下の者を留めて、めい／＼の城や砦を守らせて置いて、自分等は小田原に聚まるやうにさせた。家老の松田憲秀はこつそり秀吉に内通してゐた。

初、憲秀子新六、守戸倉城、與武田勝頼戰、數不利。氏直聞之、罵曰、「新六怯夫、多亡我士。」新六聞之、慚、遂叛降勝頼。及勝頼亡、新六來歸。當誅。憲秀爲乞哀、乃宥死一等。屏

去其邑。至是、新六又勸憲秀、因敵將堀秀政、通款焉。秀吉略之以伊豆相摸、令爲內應。氏政、氏直不之知也。與憲秀議、遣親族諸將、分守要害。美濃守氏規、守葦山、陸奥守氏輝、守竹浦、左衛門大夫氏勝、守山中。氏勝、綱成孫也。間宮康俊、朝倉重高爲副。與舊守松田秀植、俱守焉。氏政賜刀於康俊、重高曰、勉之。康俊曰、臣以死從事。重高退、謂同僚曰、北條氏之滅、在於是役也。山中之城、版築不備、而命守焉。是棄我輩於敵也。吾視十餘年來、政多失道者、事可知矣。諸君、謹之。

訓讀 初め憲秀の子新六、戸倉城を守り、武田勝頼と戦つて、數利あらず。氏直、之を開き、罵つて曰く、「新六は怯夫、多く我が士を亡ふ」と。新六、之を聞き慙懣し、叛いて勝頼に降る。勝頼亡ぶに及んで、新六、來歸す。誅に當る。憲秀、爲めに哀を乞ひ、乃ち死一等を宥して、其の邑に屏居せしむ。是に至り、新六、又憲秀に勸め、敵將堀秀政に因つて款を通ず。秀吉、之に唱すに伊豆、相摸を以てして、内應を爲さしむ。氏政、氏直、之を知らざるなり。憲秀と議し、親族の諸將を遣はし、分つて要害を守らしむ。美濃守氏規は葦山を守り、陸奥守氏輝は竹浦を守り、左衛門大夫氏勝は山中を守る。氏勝は、綱成の孫なり。間宮康俊、朝倉重高副となり、舊守松田秀植と俱に守る。氏政、刀を康俊、重高に賜つて曰く、「之を勉めよ」と。康俊曰く、「臣、死を以て事に從はん」と。重高退き同僚に謂つて曰く、「北條氏の滅ぶる、是の役に在り。山中の城、版築備らずして、守を命ず。

是れ我が輩を敵に棄つるなり。吾れ十餘年來の政を視るに、道を失ふ者多し。事知るべし。諸君、之を謹めよ」と。

通釋 初め、憲秀の子の新六は戸倉城を守り、武田勝頼と戦つて度々敗れた。氏直は之を聞いて罵つて曰ふのに「新六は臆病者で多く我が士卒を失つて終つた」と。新六、之を聞いて、慙懣憤り、叛いて勝頼に降参した。勝頼が滅んでからは、又小田原に歸つて來た。當然誅せらるべき筈であつた。憲秀が命乞をしたので死一等を赦されて、其の領内に蟄居を命ぜられた。愈々秀吉と葛藤を生ずるに至つて、新六は又憲秀に勸めて、敵將堀秀政を間に入れて内通した。秀吉は、伊豆・相摸を與へることにして、合戦の時に裏切らせることにした。所が氏政、氏直は一向之を知らなかつた。憲秀と相談し、親族の諸將を遣はし、手分けをして、要害の場所を守らせることにした。美濃守氏規は葦山を守り、陸奥守氏輝は竹浦を守り、左衛門大夫氏勝は山中を守つた。氏勝は綱成の孫である。間宮康俊、朝倉重高は氏勝の副將となり、もと其處を守つて居た大將の松田秀植と一緒に守ることになつた。氏政は刀を康俊、重高に賜はつて曰ふには「しつかりやれよ」と。康俊が曰ふのに「私は生命を捨て、従事致します」と。重高は退いて同役に向つて曰ふのに「北條氏の滅亡するのはこの戦争である。山中の城は普請が十分出來てゐないのに、其處を守るやうに命ぜられた。これは我等を敵中へ棄てられたことになる。余は十餘年來の政治を見ると、随分政治の仕方を誤つたものが多かつた。萬事は如何なるか分つてゐる。諸君よく、氣をつけられよ」と。

戸倉(信) ○竹浦(相) ○山中(伊豆) ○版築(版は壁を築くと、きに用ふる板)

十八年三月、秀吉發兵二十五萬、自將來攻。德川氏爲其先鋒。二十九日、圍山中城。城兵力戰、斬敵將一柳直末。而敵衆已凌城齊登。康俊、秀植死之。氏勝、重高遁走。德川氏軍至酒勾。四月、竹浦及湯本守兵皆潰。西軍來圍小田原。氏直聞諸城失守、議曰、「秀吉兵雖衆、而以威力相持、其心必不一。我兵雖寡、而五世君臣也。我欲要秀吉于險、一戰決雌雄。」憲秀沮之曰、「彼遠來、糧饟不繼。我堅壁淨野、不戰而屈之。是先公已試之策也。何必行危僥倖。」氏直乃止。憲秀潛使人告秀吉曰、「城西北有石垣山、以爲牙營、則城內情狀、無所遁隱。」秀吉從之。一城大驚。

十八年三月、秀吉、兵二十五萬を發し、自ら將として來り攻む。德川氏、其の先鋒たり。二十九日、山中の城を圍む。城兵力め戰つて、敵將一柳直末を斬る。而して敵衆、己に城を凌ぎて齊しく登る。康俊・秀植、之に死す。氏勝、重高遁れ走る。德川氏の軍、酒勾に至る。四月、竹浦及び湯本の守兵皆潰ゆ。西軍來つて小田原を圍む。氏直、諸城、守を失ふと聞いて、議して曰く、「秀吉の兵衆しと雖も、而も威力を以て相持す。其の心必ず一ならず。我が兵寡しと雖も、而も五世の君臣なり。我れ秀吉を險に要して、一戰に雌雄を決せんと欲す」と。憲秀、之を沮んで曰く、「彼れ遠くより來り、糧饟繼がず。我れ壁を堅くし野を淨め、戰はずして之を屈せん。是れ先公已に試むるの策なり。何ぞ必ずしも危きを行つて僥倖せん」と。氏直乃ち止む。憲秀、潛に人をして秀

吉に告げしめて曰く、「城の西北に石垣山あり。以て牙營と爲さば、則ち城内の情狀、遁れ隠るゝ所なからん」と。秀吉、之に従ふ。一城、大に驚く。

十八年三月、秀吉は、兵二十五萬を練り出し、自身大將となつて攻めて來た。德川氏はその先鋒となつてゐた。二十九日、山中城を取り圍んだ。城兵は懸命に戰つて敵將一柳直末を斬つた。併し敵の軍勢は既に城壁に乗りかゝり皆一齊に登り出した。康俊・秀植は討死をした。氏勝・重高は逃げ去つた。その内に德川氏の軍勢が酒勾に着いた。四月、竹浦及び湯本を守つてゐた兵も皆崩れた。西軍は進んで小田原城を取り圍んだ。氏直は諸城がその守備を失くじつて陥落したと聞いて、相談して曰ふには「秀吉の兵は多いけれども威力で以て維持されてゐるのである。その心はきつと一致してゐない。わが兵は少いけれども五代もつゞいて君臣關係を結んでゐるのだ。(だから)一致してゐる。我は秀吉を險阻な處に待受けて、一戰して勝敗を決めたいと思ふ」と。憲秀は之に反對して曰ふには「彼は遠方から來てゐるので兵糧が續きません。だから此方で城壁を固くし、田地の作物を刈り取つて終へば戰はないで之を屈することが出来ます。これは、先君(氏康)が既に輝虎の攻めて來た時にお試めしになつた策略であります。一番安全であります。何もそんな危い事をやつて僥倖的な勝利を得る事をしなくとも宜しいです」と。そこで氏直は思ひ止まつた。憲秀はこつそり人をして秀吉に告げしめて曰ふには「城の西北に石垣山といふ山があります。其處を本陣となされば、小田原城内の様子は皆手に取るやうに分つて終ひます」と。秀吉は之に従つた。小田原城中の者は非常に驚いた。

酒勾・湯本(横) ○五世(長氏、氏綱、氏直) ○險(箱根を)

已而上杉景勝、與前田利家、以北陸兵來攻上野松枝。城主大導寺政繁、出拒于坂本、不戰而走。遂降爲其先導。下廐橋松山・沼田・蓑輪・河越諸城、進圍鉢形城。城主氏郡在小田原。留守將士堅拒不下。西軍別將二人、以秀吉命、徇下野・上總・下總。下之。氏勝逃在其邑甘繩。氏政直召之。氏勝答曰、「臣何顏見君乎。當死於此。」或謂其有貳心。氏政怒、會德川氏招降氏勝。氏勝遂降之。五月、氏政弟氏房、出襲蒲生氏營。不利。西軍別將陷氏房邑岩槻。留守妹尾兼延死之。秀吉更遣別將三人、攻館林城。城帶大澤。敵造浮梁濟之。城兵死守不降。秀吉取氏勝書諭之。乃降。

已にして上杉景勝と前田利家と、北陸の兵を以て來つて、上野の松枝を攻む。城守大導寺政繁、出でて坂本に拒ぎ、戰はずして走り、遂に降つて、其の先導と爲る。廐橋・松山・沼田・蓑輪・河越の諸城を下し、進んで鉢形城を圍む。城主氏郡、小田原に在り。留守の將士、堅く拒いで下らず。西軍の別將二人、秀吉の命を以て、下野・上總・下總を徇へて之を下す。氏勝逃れて其の邑甘繩に在り。氏政直、之を召す。氏勝答へて曰く、「臣、何の顔あつて君を見んや。當に此に死すべし」と。或る人、其の貳心あるを諷す。氏政怒る。德川氏、氏勝を招降するに會つて、氏勝遂に之に降る。五月、氏政の弟氏房、出でて蒲生氏の營を襲つて利あらず。西軍の別將、氏房の邑岩槻を陥れ、留守妹尾兼延、之に死す。秀吉、更に別將三人を遣はして、館林城を攻めしむ。城

大澤を帶ぶ。敵浮梁を造つて之を濟る。城兵、死守して降らず。秀吉、氏勝の書を取つて之を諭す。乃ち降る。

其の内に上杉景勝は前田利家と北陸道の兵を引きつれて來り、上野の松枝を攻めた。城將大導寺政繁は出で、坂本に拒ぎ、戰はないで逃げ出し、遂に降參して路案内となつた。廐橋・松山・沼田・蓑輪・河越の諸城を攻め落し、進んで鉢形城を取り圍んだ。城主氏郡は小田原に居た。留守の將士等は堅く拒いで降參しなかつた。西軍の別將二人は秀吉の命令で下野・上總・下總を觸れ諭して降參させた。氏勝は逃げて其の領内の甘繩に居た。氏政・氏直は之を呼び寄せた。氏勝は答へて曰ふに「私は敗けたので君に會はせる顔がありません。此處で討死すべきであります」と。或る人が彼の二心あることを諭言した。氏政は非常に怒つた。丁度そのとき德川公家康が氏勝を降參するやうに招いたので、氏勝はとうとう降參した。五月、氏政の弟氏房は出かけて蒲生氏の陣營を襲うたが負けた。其のとき西軍の別將は氏房の領地岩槻を陥れたが、その留守をしてゐた妹尾兼延は討死した。秀吉は更に別將三人を遣はして館林城を攻めさせた。この城は周圍に大きな澤をめぐらして居た。敵は舟橋を造つて渡つて來た。城兵は死物狂ひで守つて降參しなかつた。秀吉は氏勝の書面をやつて之を諭させた。そこで降參することになつた。

語釋 阪本・沼田・蓑輪(上野) ○廐橋・松山(越後) ○別將二人(淺野長政・木村重茲) ○別將三人(石田三成・大谷)

六月、西軍合兵攻忍城。謂城可灌也。募土人起堤防。城主成田長康在小田原留守。知其不可灌也。陰出其人應募以收錢。既就引水。城不漸一版。而敵沮水不得近。數

日隄潰。西軍死者數百人。景勝利家下鉢形圍八王子城。城屬氏輝。其留守橫地監物遁之。狩野一庵・中山家範・金子家重・近藤助實相謂曰：「吾約奧州以死守。其可食言乎？」與數百人殊死戰。利家在高處望見壯之。問降將知其姓名。使往降之。至則自殺矣。及事平。德川氏收用家範、二子昭守、信吉。信吉稱備前守、爲水戸傳者也。

訓讀 六月、西軍、兵を合せて、忍城を攻む。謂へらく、城灌ぐべしと。土人を募つて、堤防を起す。城主成田長康、小田原に在り。留守、其の灌ぐ可からざるを知るや、陰に其の人を出し、募に應じて錢を收む。既に就つて水を引く。城、一版を漸さず。而して敵、水に阻てられて近づくを得ず。數日にして、隄潰ゆ。西軍死するもの數百人。景勝、利家、鉢形を下し、八王子城を圍む。城は氏輝に屬す。其の留守横地監物、之を遁る。狩野一庵・中山家範・金子家重・近藤助實、相謂つて曰く、「吾れ奥州に約するに死守を以てす。其れ言を食む可けんや」と。數百人と殊死して戰ふ。利家、高處に在り、望み見て之を壯とし、降將に問ひ、其の姓名を知り、往いて之を降らしむ。至れば則ち自殺す。事平ぐに及んで、徳川氏、家範の二子昭守、信吉を收用す。信吉は備前守と稱し、水戸の傳となりし者なり。

通釋 六月、西軍は兵を合せて忍城を攻めた。この城は水攻めにする事が出来ると思つた。土地の者を募つて堤防を築いた。城主の成田長康は小田原に居たが、自分の留守の城は到底水攻めには出来ないと思つて居たから、こつそり城中の人を出してその堤防造案の募集に應じさせて、賃銀を取り込ませた。その内に堤防が出来て

水を引いた。けれども城は二尺も漸されなかつた。その水の爲めに却つて敵は城に近づくことが出来なかつた。五六日たつて堤が壊れた。それがため西軍の死者は數百人にも及んだ。その間に景勝・利家は鉢形城を陥れ、八王子城を取り圍んだ。城は、氏輝に屬して居た。その留守の大將横地監物は逃げ去つた。狩野一庵・中山家範・金子家重・近藤助實等が互に謂つて曰ふには「吾々は陸奥守(氏輝)に死守することを約束した。今更ら其の言葉を變へる譯には行かぬ」と。數百人の者とともに死を定めて戰つた。利家は高い處から遙に望み見て、敵乍ら立派なことだと思ひ、降参した大將に尋ねてその姓名を知り、往つて降参させようとした。けれども往つて見ると、も皆自殺して終つて居た。小田原の事件が落着いてから、徳川氏は家範の二子、昭守・信吉を取り立てた。信吉は備前守と稱し、水戸藩のお附け人となつた。

註釋 一版(一版は高さ二尺、版は版築の版) ○水戸傳(家康の子頼房、水戸に封ぜられ、信吉その保備となる。)

當是時、里見佐竹氏及陸奥出羽豪傑皆降秀吉。秀吉舉天下兵圍小田原。氏政氏直勵衆堅守。出令曰：「諸將士各守其所。毋妄相救。更番休止。休者遊息任意。又分麾下士六百人晝夜巡警。秀吉合圍百餘日。終不能得一首級。氏規守韮山。秀吉以七將騎卒五萬攻之。氏規謂其衆曰：「此地我高祖所由而起。而吾受命守之。失一障壁。吾之恥也。」衆皆奮激。其將朝比奈泰能等數出力戰。西軍四面攻擊。死傷無算。乃築

長圍不敢迫。德川氏將小笠原某以手兵傅壁皆死。秀吉更將疾攻陷其外城。氏規親督戰即日復之。八州城壘皆陷。獨小田原、葦山不下。

訓讀 是の時に當り、里見、佐竹氏、及び奥陸・出羽の豪傑、皆秀吉に降る。秀吉、天下の兵を擧げて小田原を圍む。氏政・氏直、衆を勵して堅く守り、令を出して曰く、「諸將士各其所を守つて、妄に相救ふ勿れ。更番に休止し、休む者は遊息意に任す」と。又麾下の士六百人を分つて、晝夜巡警せしむ。秀吉、合圍すること百餘日、終に一首級をだに得ること能はず。氏規、葦山を守る。秀吉、七將、騎卒五萬を以て之を攻む。氏規其の衆に謂つて曰く、「此の地、我が高祖の由つて起りし所にして、吾れ命を受けて之を守る。一障壁をも失ふは、吾の恥なり」と。衆皆奮激す。其の將朝比奈泰能等、數出でて力戦す。西軍、四面より攻撃し、死傷、算なし。乃ち長圍を築いて、敢て迫らず。德川氏の將小笠原某、手兵を以て壁に傅き、皆死す。秀吉、將を更へ疾く攻めて、其の外城を陥る。氏規親ら督戦して、即日、之を復す。八州の城壘、皆陥る。獨り小田原、葦山下らず。

通釋 この當時、里見、佐竹の二氏及び陸奥、出羽の豪傑は皆秀吉に降参した。秀吉は天下の兵を全部擧げて小田原を取り圍んだ。氏政・氏直は衆を勵まして、堅く守り、命令を出して曰ふには「諸將士は各自分等の持場を守つて、滅多に救ひ合ふやうなことをしてはならぬ。かはりばんこに休み、休む者は思ひのまゝに休憩し遊んで宜い」と。又旗下の兵士六百人を分けて、晝夜、城中を巡つて警戒した。秀吉は、小田原を合圍すること百餘日にもなつたが、結局一つも得ることは出来なかつた。氏規は葦山を守つて居た。秀吉は、七人の大將と騎兵歩卒五萬を率ゐて之を攻めた。氏規は部下の軍勢に向つて曰ふには「この土地はわが高祖、早雲公の由つて起られた

ところで、吾は命を受けて、之を守つて居る。一重でも失つたら吾が耻辱であるぞ」と。衆は皆奮激した。その將朝比奈泰能等は度々城から出て、力戦した。西軍は、四面から攻撃し、その死傷は數知れぬ程であつた。そこで長陣を築いて、決して迫つて来なかつた。德川氏の將小笠原某は、手勢をつれて城壁の近くに押し寄せ、皆討死した。秀吉は、大將を取り代へて急ぎ攻め立て、その外城を陥れた。氏規は自身で士卒を指圖して戦ひ、その日のうちに取られた外城を取り戻した。關八州の城壘は皆陥つた。たゞ小田原と葦山とは降参しなかつた。

七將 織田信雄・蜂須賀至鎮・福島正則・細川忠興・蒲生氏郷・生駒親正、他の一人不明。

氏房在小田原。與敵將浮田秀家對壘。秀家以秀吉旨遺酒於氏房。曰「聊以慰城守之勞」。氏房又遺物謝之。曰「聊以慰攻戰之勞」。秀家遂使言於氏房。曰「豐臣氏與北條氏、非有宿怨。偶爾構兵。半歲不決。徒使天下人膏鋒鏑。今誠議和。弭兵。則封以伊豆。相摸」。氏房以告氏政。弗答。時堀秀政既死。子秀治、以秀吉密書投憲秀。憲秀欲導敵兵入城。少子英春、爲氏直所寵。常侍左右。憲秀召而告之。英春號泣固諫。憲秀弗聽。而止英春。不使復入。遂與秀治約。約既定。英春夜以鎧櫛自盛。入見氏直。曰「君苟宥一人之死。則臣請告大事」。誓而後告。氏直大愕。召憲秀。詰而囚之。英春請宥。其死。

弗聽。秀治踐約，至松田氏壘下，待報三日。望見其旗幟，皆變。乃去。

訓讀 氏房、小田原に在り。敵將浮田秀家と壘を對す。秀家、秀吉の旨を以て、酒を氏房に遣つて曰く、「聊か以て城守の勞を慰む」と。氏房、又物を遣つて之を謝して曰く、「聊か以て攻戰の勞を慰む」と。秀家遂に氏房に言はしめて曰く、「豐臣氏、北條氏と宿怨あるに非ず。偶爾、兵を構へて、半歳まで決せず。徒に天下の人をして鋒鏑に膏らしむ。今、誠に和を議して兵を弭めば、則ち封するに伊豆・相模を以てせん」と。氏房以て氏政に告ぐ。答へず。時に堀秀政、既に死す。子秀治、秀吉の密書を以て憲秀に投ず。憲秀、敵兵を導いて城に入れんと欲す。少子英春、氏直の寵する所と爲つて、常に左右に侍す。憲秀、召して之を告ぐ。英春、號泣して固く諫む。憲秀聽かずして、英春を止めて復入らしめず。遂に秀治と約す。約既に定る。英春、夜、鎧櫃を以て自ら盛り、入り氏直に見えて曰く、「君、苟も一人の死を宥さば、則ち臣請ふ、大事を告げん」と。誓つて後告ぐ。氏直大に愕き、憲秀を召し、詰つて之を囚ふ。英春、其の死を宥さんことを請ふ。聽かず。秀治、約を踐み、松田氏の壘下に至つて報を待つこと三日。其の旗幟を朝見するに皆變ず。乃ち去る。

通釋 氏房は小田原城に居た。敵將浮田秀家と對陣して居た。秀家は、秀吉の内旨で酒を氏房に送つて曰ふには「聊か御籠城の御骨折をお慰め申し度い」と。氏房は又物を送つて、禮を述べて曰ふには「聊か城攻めの御苦勞を慰め申し度い」と。秀家は遂に人を遣はして、氏房に言はせて曰ふには「豐臣氏は北條氏と古い怨がある譯ではありません。ひよつとした事から戰爭をして、半年にもなるが未だ勝負が付きません。徒に天下の人をして討死せしめてゐます。今ほんとうに和睦をして戰爭を罷められるならば、伊豆・相模の二國を以て、北條氏を封す

るやうに計らひませう」と。氏房は其のことを氏政に告げた。氏政は返事をしなかつた。時に堀秀政はすでに死んでゐた。其の子の秀治は秀吉の密書を憲秀へ送り届けた。憲秀は敵兵を案内して城内に入れようと思つた。憲秀の少子英春は、氏直に可愛がられ、常にその左右に侍して居た。憲秀は英春を召んでその話をした。英春は泣き叫んで固く諫めた。憲秀は聞き入れないで英春を其のまゝ止めて置き、もう氏直の御殿には入らしめなかつた。憲秀は遂に秀治と約束した。約束は既に決まつた。英春は夜、鎧櫃の中に自分の身を入れて御殿へ往き、氏直に會つて曰ふには「君がもし一人の人の死を赦して下さるならば、私は大事件を申し上げます」と。誓つてから後、事の由を告げた。氏直は非常に愕いて、憲秀を召して詰問した後、之を拘留した。英春は誓つた通りに父の死を赦されんことを請うた。併し許されなかつた。秀治は約束通り、松田氏の壘の下に来て三日も返事を待たつた。その旗や幟を望見するとすっかり變つてゐた。様子の變つたことを知つて、そこで秀治は去つて終つた。

語釋 膏鋒鏑（刀や、矢の先きに、あ） ○待報（松田の内應の報告） ○皆變（松田氏の旗記しが皆變つて）

秀吉百方誘降。使黒田孝高、羽柴勝雅、因氏房說曰、「方今北條氏勢、如魚在釜中、而烈火烹之。蓋及今納降、取二國以存先祀。氏房妻子、囚于岩槻。亦以書乞哀。氏房心折、勸氏政降。氏政曰、「吾承父祖業、主於八州。爭武而失之、吾不必憾也。納降計存。死且不能已。而成田長康等、亦送款於西軍。親臣宿將、互相疑阻、交勸和議。七月、秀

吉使メテ德川公ラシテサ諭ク氏規曰ク子之武已多矣。今和議將成。子猶何守。宜來贊其議。答曰ク氏規習於戰。不習於和。未能應命。德川公請ク氏直書諭之。氏規不得已。撤守備。約封土事。自リ小田原西門入。則氏直已自南門出。蓋秀吉以陰謀間疏其父子。故氏直惶惑。不シテ俟約而出也。

訓讀 秀吉、百方誘ひ降さんとす。黒田孝高、羽柴勝雅をして、氏房に因り説かして曰く、「方今、北條氏の勢、魚の釜中に在つて、烈火、之を烹るが如し。蓋今に及んで降を納れ、二國を取り以て先祖を存せざるべし。氏房の妻子岩槻に囚へらる。亦書を以て哀を乞ふ。氏房、心折けて、氏政に降を勸む。氏政曰く、「吾れ父祖の業を承けて、八州に主たり。武を争つて之を失ふは、吾れ必ず憾まざるなり。降を納れて存を計るは、死するも且つ能はず」と。已にして成田長康等も、亦款を西軍に送る。親臣、宿將、互に相疑阻して、交和議を勸む。七月、秀吉、徳川公をして、氏規を諭さしめて曰く、「子の武已に多し。今、和議將に成らんとす。子、猶ほ何をか守る。宜しく來つて其の議を贊すべし」と。答へて曰く、「氏規、戦に習ひて、和に習はざれば、未だ命に應ずる能はず」と。徳川公、氏直の書を請うて之を諭す。氏規、已むを得ず、守備を撤して、封土の事を約し、小田原の西門より入れば、則ち氏直已に南門より出づ。蓋し秀吉、陰謀を以て、其の父子を間疏す。故に氏直、惶惑し、約を俟たずして出でしなり。

方今、北條氏の勢は魚が釜の中に在つて下から烈しい火で煮るやうなものである。なぜ今の内に降参を申し入れ、伊豆・相模二國を貰つて先祖の祀を絶やさぬやうにしないのか」と。氏房の妻子は、岩槻に囚へられて居た。これも亦書面で「和睦して早く助け出して貰ひ度い」と願うた。氏房は、強い心も折けて氏政に降参を勧めた。氏政がいふのに「吾は、父祖の遺業を受けついで關八州に主となつたのである。武力を争うて、それに負けて之を失ふのなら、心残りはない。併し降参を申し入れて生存を計るといふことは死んでも自分には出来ない」と。其の内に成田長康等も、亦西軍に内通した。親信してゐる家來や、老將などが互に疑ひ合ひ、心に隔りが出来て打ち解けぬやうになり、かはるゝ和睦を勧めるやうになつた。七日秀吉は徳川公家康をして氏規を諭させて曰ふのに「貴公の叢山を守つて屈しない武勇はもう十分である。今和睦の相談が出来ようとして居る。貴公は何をそんなに頑張つて居るのか。それよりもやつて来て、和睦の相談を助けたら宜いだらう」と。氏規は答へて曰ふのに「私は戦争には慣れて居るが和睦にはまだ慣れてゐないから、どうもこの御命令には應じ兼ねる」と。徳川公家康は氏直の書面を貰ひ受けて、氏規を諭した。氏規は止むを得ず城の守備を取り捨て、後ち北條を必ず伊豆・相模の二國に封するといふことを固く約束して小田原城の西門から入つて行つたが、氏直は其の時には已に南門から城外に出て終つてゐた。思ふにこれは、秀吉が陰謀を以て、氏政・氏直の親子の仲を隔てたから氏直は恐れ迷つて領土の約束が決定するのを待たないで出て終つたのである。

於是氏直就徳川氏陣、請曰願宥氏政以下。則亟致城矣。徳川氏以有姻戚之嫌、教之因羽柴勝雅以告秀吉。秀吉曰吾當依其所請。獨其封土以二總代伊豆相模二氏

規聞之、恚曰、「吾悔爲老賊所誑。將歸葦山、復修守備。氏直弗許、乃誅憲秀、致城於德川氏。出城內士民、限以三日。氏政與弟氏輝、出在醫師安棲宅。秀吉憚氏政、剛武又變約、遣使者五輩、就其舍、令自殺。使者至、難言之。氏政、氏輝察其色、請問沐浴、作絕命辭、自裁。氏規將殉之。監吏奪刀、不得死。秀吉宥氏直、令率氏規、氏房、氏郡、英春等數十人、入高野山、給以萬石。明年、氏直病卒。年二十一。英春去仕前田氏。自長氏國于相摸、至是五世九十餘年乃滅。

訓 是に於て、氏直、德川氏の陣に就き請うて曰く、「願はくば氏政以下を宥せ。則ち亟に城を致さんと。德川氏、姻戚の嫌あるを以て、之をして羽柴勝雅に因つて、以て秀吉に告げしむ。秀吉曰く、「吾れ當に其の請ふ所と依るべし。獨其の封土は二總を以て、伊豆・相模に代へん」と。氏規、之を聞き恚つて曰く、「吾れ老賊の誑く所になるを悔ゆ」と。將に葦山に歸つて、復守備を修めんとす。氏直許さず。乃ち憲秀を誅し、城を德川氏に致す。城内の士民を出すに、限るに三日を以てす。氏政、弟氏輝と出でて醫師安棲の宅に在り。秀吉、氏政の剛武を憚つて、又約を變じ、使者五輩を遣はし、其の舍に就いて、自殺せしむ。使者至つて之を言ふを難る。氏政、氏輝、其の色を察し、間を請ひ沐浴し、絶命の辭を作つて自殺す。氏規將に之に殉せんとす。監吏、刀を奪つて、死するを得ず。秀吉、氏直を宥し、氏規、氏房、氏郡、英春等數十人を率ゐて、高野山に入らしめ、給する

に萬石を以てす。明年、氏直病んで卒す。年二十一なり。英春は去つて、前田氏に仕ふ。長氏の相模に國せしより、是に至るまで、五世、九十餘年にして、乃ち滅ぶ。

通 そこで、氏直は德川氏の陣屋へ往つて請うて曰ふのに「どうか、氏政以下の命を赦して貰ひ度い。さすれば城を明け渡しませう」と。德川氏は、姻戚關係であるから工合が悪いといふので、氏直をして羽柴勝雅を通して、秀吉に告げしめた。秀吉がいふのに「余は其の願を聞き届けよう。併し、領土のことであるが、上總・下總をば前にやると約束した所の伊豆・相模に代へることにする」と。氏規は之を聞いて怒つて曰ふには「老惡黨にたまされたのが残念だ」と。葦山に歸つて再び備を修めようとした。氏直が許さなかつた。そこで憲秀を殺して、城を德川氏に明け渡した。城内の士民は三日を限つて城外へ出すこととした。氏政は弟氏輝と一緒に城から出で安棲といふ醫者の家に居つた。秀吉は氏政の剛毅で勇氣のあるのを恐れ憚つて、又約束を變へ、使者五人をやつた。其の家に往つて氏政に自殺をさせるやうにした。使者が行つて言ひ出し難くて困つて居た。氏政、氏輝は其の顔色を見て、それと察し、暫時の暇を請うて頭や身體を洗ひ、辭世の歌を作つて、自殺した。氏規も殉死しようとした。目附人が刀を取り上げたので死ぬことが出来なかつた。秀吉は氏直を赦し、氏規、氏房、氏郡、英春等數十人を引きつれて高野山に入らしめ、扶持として一萬石を支給した。明年、氏直は病氣で死んだ。年は二十一であつた。英春は去つて、前田氏に仕へた。長氏が相模に主となつてからこゝに至るまで、五代九十餘年で北條氏は亡んだのである。

話 姻戚之嫌(氏直の妻は德川氏の女、故に肩を持つ嫌疑がかかる) ○老賊(秀吉を罵つた語) ○安棲(田村) ○絶命辭(辭世の歌。ふくとふく、風ならむこそ) ○九十餘年(應明四年より天正十八年に至る九十六年)

後秀吉思氏規忠勇、以爲狹山城主、食萬石。其後、氏盛、氏信、氏宗、氏治、氏朝、父子相襲、歷事豐臣氏、德川氏。氏勝降德川氏、爲岩留城主、食萬石。關原之役、守岡崎。慶長中、卒。養保科正直子氏重。大坂之役、氏重在先鋒。後數徙封、終爲掛川城主、病卒。無嗣、國除。

訓讀 後、秀吉、氏規の忠勇を思ひ、以て狹山城主と爲して、萬石を食ましむ。其の後、氏盛、氏信、氏宗、氏治、氏朝、父子相襲ぎ、豐臣氏、德川氏に歷事す。氏勝、德川氏に降つて、岩留城主と爲り、萬石を食む。關原の役に、岡崎を守る。慶長中卒す。保科正直の子氏重を養ふ。大坂の役に、氏重、先鋒に在り。後數封を徙され、終に掛川城主と爲り、病んで卒す。嗣無く、國除かる。

通釋 その後、秀吉は、氏規の忠勇であつたことを思ひ起して、狹山の城主となし、一萬石を與へた。その子孫の氏盛、氏信、氏宗、氏治、氏朝は父子相繼いで豐臣氏、德川氏に順次に事へた。氏勝は德川氏に降つて、岩留の城主となり、一萬石を貰つてゐた。關ヶ原の戰爭の時には、岡崎を守つて居た。慶長年中に死んだ。氏勝は保科正直の子の氏重を養つて子とした。大坂の役に氏重は先鋒に立つて働いた。その後、度々領地を移され、終に掛川の城主となつて病死した。跡取りがなかつたので領地を取り上げられ家は斷絶した。

語釋 關ヶ原之役(德川家康と石田) ○岡崎(三) ○慶長(後場成天皇) ○大坂之役(家康が豊臣秀頼) ○掛川(江)

叙論 本論は、北條早雲が關八州を取つたのは、英雄の心を收攬したからである。後、其の心を失つても猶ほ容易に滅びなかつたのは、早雲が人心を收攬したことによるのであると論ぜられてある。

外史氏曰、余聞、早雲嘗召儒士、說黃石公三略。其首有言曰、主將之法、務攬英雄之心。早雲聽之曰、止矣。吾既得之矣。不復使說。嗚呼、有以夫。其以流寓漂泊之人、據有八州、以開五世之基也。

訓讀 外史氏曰く、余聞く、早雲、嘗て儒士を召し、黃石公の三略を説かしむ。其の首に言へるあり、曰く「主將の法は、務めて英雄の心を攬る」と。早雲、之を聽いて曰く「止めよ。吾れ既に之を得たり」と。復説かしめずと。嗚呼、以あるかな。其の流寓漂泊の人を以て、八州に據有し、以て五世の基を開くや。

通釋 外史氏が曰ふのに余は斯ういふことを聞いてゐる。それは早雲が或る時儒者を呼んで黃石公の三略といふ兵書を講義せしめた。その書の初めに次のやうなことが言つてある「總大將たる者の法は、出来るだけ、英雄の心を取り入れるようにすべきことだ」と。早雲は之を聽いて曰ふのに「もうやめよ。此の書の極意が分つた」と。さういつてもう講義をやらせなかつたさうだ。嗚呼、早雲がさまよひ歩いて定住の家のなかつた身分の人間で、以て關八州に根を置いて五代の基を開いたのは、まことに道理のある事である。

語釋 黃石公(秦代の) ○三略(兵書の名、太公望著す。黃石公、) 以上第一段、本論の主意を掲ぐ、これ序論、早雲の人心收攬を論ず。

夫足利氏墮其綱維、權臣内鬪、海内戰爭。所以然者、無他故焉。天下英雄、各以其心爲心、而主將不能收攬之焉耳。早雲蓋早有見於此、以爲天下之事可知已。故仗一劍之任、周流天下、以求用武之地。一得其地、雲蒸龍變、莫之或拒。夫以兩上杉氏百年故家、財賦之富、兵馬之雄、而早雲以赤手圖之、奚異錐鑿山哉。乃能戰勝攻取、制其死命者、果何所恃而然歟。亦以其結納英雄、得其驩心、兵寡而志一、地狹而力合。如同舟濟江、不期而救、以此臨敵、雖橫行天下、無難而況於兩上杉氏乎。

訓讀 夫れ足利氏、其の綱維を墮り、權臣、内に鬪ぎ、海内戰爭す。然る所以の者は、他の故なし。天下の英雄、各其の心を以て心と爲し、而して主將、之を收攬する能はざるのみ。早雲は蓋し早く此に見るあり。以爲へらく、天下の事知るべきのみと。故に一劍の任に仗り、天下を周流し、以て武を用ふるの地を求む。一たび其の地を得れば、雲蒸龍變。之を或は拒ぐなし。夫れ兩上杉氏百年の故家、財賦の富、兵馬の雄を以て、而して、早雲、赤手を以て之を圖る。爰ぞ錐の山を鑿つに異らんや。乃ち能く戰へば勝ち、攻むれば取り、其の死命を制するは、果して何の恃む所あつて然るか。亦其の英雄に結納し、其の驩心を得るを以てなり。兵寡きも而も志一、地狹きも而も力合す。舟を同じくして、江を濟り、期せずして救ふが如し。此を以て敵に臨む、天下を橫行すと雖も、難きなし。而るを況や兩上杉氏に於てをや。

通釋 一體足利氏は、その政治上の規律を破り、權臣は國內で相争ひ、それが爲めに天下中に戰爭が起るやうになつた。そのやうになつたのは、外に譯があるのではない。天下の英雄が各々自分の心を心として（自分の思ふまゝを行ふ）總大將は之を取りまとめ取り入れることが出来なかつたからである。早雲は思ふに、この點を早く看破した。彼は天下の事は知り易いものだ（雜作のないことだ）と思つた。だから劍一本といふ荷物をたよりにして、天下を廻り歩いて武を用ふべき場所をさがしたのである。一旦その土地を得るや、雲が蒸し起つて龍が上天する程の勢であつたから誰も彼も拒ぐものとはなかつた。かの兩上杉氏は百年も續いた舊い家で領内から取り立てる収入も十分豊富で、兵馬も強かつたのであつたが、それだけのものを以てしても早雲は素手で之を圖つたのである。これは錐で山を鑿つと同様であつた。併しそれ程貧弱なる早雲が、戰へば勝ち、攻むれば取つて、生かすも殺すも、その命を自由に制御してゐたのは、何か恃みとするものがあつて、そのやうに出来たのだらうか。それは無論彼が英雄に取り込んで英雄の驩心を得てゐたからである。兵は少くとも心は一致して居り、地は狹いが力は合してゐた。それは丁度同じ舟で川を渡るとき、風浪の危急の場合等に赤の他人同志が約束をしなくとも救ひ合ふ様なものである。こゝにいふ仕方では對するとなれば、何だつて出来ないことはないもので、天下を橫行しても決してむづかしい業ではない。まして兩上杉氏などをやつつけるに於ては易々たるものであつた。

語釋 以其心爲心（我が心を心とする、つま） ○其地（伊豆） ○制其死命（死生の命を自由） ○橫行（思ふ存分に振舞ふ）

餘論 此の一節は、足利が民心を收攬しないで失敗したことから説き起し、早雲が其處に眼を着け、英雄の驩心を結んだことに説き到り、遂に八州を取ることに容易なりしことに論及してある。

氏綱・氏康所以續緒業致強大者亦由此道也。至於氏政・氏直已代兩上杉以擅八州之富強。意滿志侈不復用心於此。上下漸遠君民不親。欲特區區之法令以制馭其下而不知其下之心既已去之矣。將何恃以抗天下勁敵邪。

訓讀 氏綱、氏康緒業を續ぎ、強大を致す所以の者も、亦此の道に由ればなり。氏政、氏直に至つては、已に兩上杉に代り、以て八州の富強を擅にす。意滿ち志侈り、復心を此に用ひず。上下漸く遠く、君民親まず。區區の法令を恃み、以て其の下を制馭せんと欲す。而して其の下の心、既已に之を去るを知らず。將た何を恃んで以て天下の勁敵に抗せんや。

通釋 氏綱・氏康が父祖の遺した事業を承け繼いで國を強大にしたのも、矢張りこの英雄收攬といふやりに因つたからである。氏政・氏直になるとすでに兩上杉氏に代つて、八州の富強を自由にしてゐた。それがため民とが親しまなくなつて來た。それを下らぬ些細な法令を拵へて、それで以て其の下臣民を引き廻して行かうとしたのである。そしてその臣民の心はもう北條氏を去つてゐたといふことには御存知なかつたのである。そんなことを何を待みにして天下の強敵に向ふことが出来ようぞ。(出来ようはない。)

餘論 以上第二段、本論に當る所で序論を發揮敷衍されてゐる。子孫も此の法によつて榮え、此の法を失つて衰微したことを通論す。

然豐臣太閤以不世出之略加之以我東照公左提右挈率天下猛將精兵往問其罪其勢力足以震撼天地而合圍半歲纔能舉之者非以其父祖之收攬人心有固結不可解也哉

訓讀 然れども豐臣太閤、不世出の略を以て、之に加ふるに我が東照公を以てして、左提右挈、天下の猛將精兵を率ゐ、往いて其の罪を問ふ。其の勢力以て天地を震撼するに足る。而して合圍半歲、纔に能く之を擧ぐる者は、其の父祖の人心を收攬し、固く結んで解く可からざる有るを以てにあらずや。

通釋 併し乍ら豐臣太閤程の世に滅多に出ない武略を以てして而かもその上に我が東照公徳川家康を以て互に助け合ひ手を引き合つて連合し、天下の猛將精兵を率ゐて小田原に出かけ、北條の罪を問ひ正した。その勢力は天地を震ひ動かすに足る位のすさまじいものであつた。それで、小田原城を半年も圍んでやつと之を取るこゝとが出来たのは、矢張り北條氏の父祖が人心を取り込んで固く結び、容易に解くことの出来ないやうにしてゐたからではないか。(團結が強かつたからである。)

以上第三段、結論。早雲の人心收攬の餘澤を述べ。

日本外史解義 卷十終

日本外史解義 卷十一

足利氏後記

武田氏
上杉氏

武田氏源義光裔也。義光子義清稱武田冠者。從父受射傳伯父義家之旗及無楯之甲。世居甲斐。義清孫信義及子信光等從源賴朝起。數有戰功。與逸見小笠原氏分領甲斐。賴朝移小笠原氏於信濃。以加藤氏代之。以及足利氏之時。信光後十餘世。曰信滿。上杉禪秀之亂。信滿以與之連婚。為逸見所讒。自殺。二子信重信長。信重與族父信元。逃為僧。信長依加藤氏。與逸見鬪。足利持氏伐而降之。欲以其邑盡附。

卷十一 足利氏後記 武田氏 上杉氏

逸見將軍義持不肯賜之於信元。信元死、子幼。其將跡部專國招信重爲假主。結城之役、信重有功、新充守護。乃誅跡部。逸見、加藤皆臣屬焉。

訓 武田氏は、源義光の裔なり。義光の子義清、武田の冠者と稱す。父に従つて射を受け、伯父義家の旗及び無楯の甲を傳へ、世甲斐に居る。義清の孫信義、及び子信光等、源頼朝に従つて起り、數戰功あり。逸見、小笠原氏と甲斐を分領す。頼朝、小笠原氏を信濃に移し、加藤氏を以て之に代へ、以て足利氏の時に及ぶ。義光の後十餘世を、信滿と曰ふ。上杉禪秀の亂に、信滿、之と婚を連ぬるを以て、逸見の讒する所と爲り、自殺す。二子信重・信長あり。信重は族父信元と、逃れて僧と爲る。信長は加藤氏に依り、逸見と闘ふ。足利持氏伐つて之を降し、其の邑を以て盡く逸見に附せんと欲す。將軍義持肯んぜずして、之を信元に賜ふ。信元死し、子幼なり。其の將跡部、國を專にし、信重を招いて假主と爲す。結城の役に、信重、功ありて、新に守護に充てらる。乃ち跡部を誅す。逸見、加藤、皆臣屬す。

通 武田氏は、源義光の子孫である。義光の子の義清は、武田の冠者と稱してゐた。父義光に従つて、射術を學び傳へ、又伯父義家の旗と無楯の鎧とを受け傳へて、代々甲斐に居た。義清の孫信義及びその子の信光等は、源頼朝に従つて起り、度々戰功があつた。逸見、小笠原の二氏と甲斐の國を分けて、領有して居た。頼朝はこの小笠原氏を信濃に移し、加藤氏を以て之に代へ、そのまゝ、足利氏の時代になつた。信光の十餘代後に信滿といふものがあつた。その信滿は上杉禪秀の亂の時に禪秀と姻戚の關係であるといふので、逸見の爲めに讒言せられて自殺して終つた。二子の子信重・信長といふのがあつた。信重は一族の年長信元と一緒に逃げて坊主になつた。信

長は加藤氏にたより、逸見と闘つた。足利持氏は伐つて之を降参させ、その領地を全部逸見にやらうと思つた。將軍義持は承知しないで、信元に賜はつた。その内に信元は死んで、其の子はまだ幼年であつた。従つてその大將の跡部が國政を專らにしてゐたが信重を招いて假の主君とした。結城を攻めた時に、信重は戰功があつたので新たに守護職となつた。そこで權臣の跡部を殺して終つた。逸見、加藤なども家來になつた。

結城之役 上杉氏は禪秀とつ。○結城之役(永享中、結城晴朝が持氏の) 禪秀之亂(應永二十三年亂を作す)

信重後五世曰信虎。與駿河豪傑久島某戰而勝之。以是日生男、因名勝千代。長曰晴信。沈毅多權變。信虎愛少子信繁。欲廢晴信。晴信故爲癡騃狀。以自晦。與信繁角材技。輒出其下。或伴墮馬、爲人扶起。諸將皆侮晴信。晴信獨與駿河國主今川義元相結託。義元其女兄夫也。天文五年、義元爲奏請、以晴信爲嫡嗣。加首服。任大膳大夫。兼信濃守。

訓 信重の後五世を、信虎と曰ふ。駿河の豪傑久島某と戰つて之に勝つ。是の日を以て男を生み、因つて勝千代と名づけ、長じて晴信と曰ふ。沈毅にして權變多し。信虎、少子信繁を愛して、晴信を廢せんと欲す。晴信故に癡騃の狀を爲し、以て自ら晦まし、信繁と材技を角し、輒ち其の下に出づ。或は伴つて馬より墮ち、人に扶け起さる。諸將皆晴信を侮る。晴信獨り駿河の國主今川義元と相結託す。義元は其の女兄の夫なり。天文五年、義元、爲めに奏請し、晴信を以て、嫡嗣と爲し、首服を加へ、大膳大夫に任じ、信濃守を兼ぬ。

通釋 信重の後五代目を信虎といつた。信虎は駿河の豪傑久島某と戦つて之に勝つた。その日に男の子を生んだので勝千代と名づけ、それが大きくなつてから晴信といつた。彼は沈着で根づよく、謀に富んでゐた。所が信虎は少子の信繁を愛して、晴信を廢しようと思つた。晴信は、わざと馬鹿者の様子をして自ら才能をかくし、信繁と林藝技能をくらべるやうなことがある時は、いつも其の下に出てゐた。或はわざと馬から落ちて人に扶け起して貰つたりした。諸將は皆晴信を侮つた。併し晴信はひとり駿河の國主今川義元と互に結び合つてゐた。義元は晴信の姉の婿である。天文五年義元は晴信の爲めに朝廷にお願ひして、晴信をば繼嗣となし、元服して大膳大夫に任じ、信濃守を兼ねさせて戴いた。

十一月、信虎出兵、信濃攻海口城。城主平賀源心善戰。信虎以兵八千攻之、躡月不能拔。會大雪、諸將議曰、「時已窮臘、請班師。敵亦必不尾也。」信虎從之。晴信請自殿。信虎笑曰、「敵必不尾而請殿。如二郎、必不然也。」晴信固請以兵三百殿。後大軍數里止。舍親警其兵曰、「勿釋甲。勿卸鞍。食於馬而後食。五更即發。唯吾所嚮是視。」兵皆竊嗤之曰、「風雪如此、何警爲。」五更、晴信即發、還向海口、與三百騎冒雪馳、味爽抵城。源心已散遣其兵、獨與百人留守。晴信分兵爲三、自以一隊入城、二隊揚幟城外、應之。城兵不測其衆寡、不戰而潰。乃斬源心、以其首歸獻。一軍大驚。信虎不賞、曰、「舍城而歸、

怯也。諸將心服。晴信而不敢稱其功。晴信仍有愚色。

訓讀 十一月、信虎、兵を信濃に出し、海口城を攻む。城主平賀源心善く戦ふ。信虎、兵八千を以て之を攻め、月を躡へ抜く能はず。會々大雪に雪ふる。諸將、議して曰く「時已に窮臘なり。請ふ師を班さん。敵も亦必ず尾せざるなり」と。信虎、之に従ふ。晴信自ら殿せんト請ふ。信虎笑つて曰く「敵必ず尾せずして殿せんことを請ふ。二郎の如きは、必ず然らざるなり」と。晴信固く請ひ、兵三百を以て殿し、大軍に後る、數里にして止り舍し、親ら其の兵を警めて曰く「甲を釋く勿れ。鞍を卸す勿れ。馬に食うて後に食へ。五更即ち發せん。唯吾が嚮ふ所を是れ觀よ」と。兵皆竊に之を嗤つて曰く「風雪此くの如し。何ぞ警むるを爲さん」と。五更晴信即ち發し、還りて海口に向ひ、三百騎と雪を冒して馳せ、味爽城に抵る。源心、已に其の兵を散遣し、獨り百人と留守す。晴信、兵を分ち三と爲し、自ら一隊を以て城に入り、二隊は幟を城外に掲げ、之に應ぜしむ。城兵、其の衆寡を測らず、戦はずして潰ゆ。乃ち源心を斬り、其の首を以て歸り獻す。一軍、大に驚く。信虎、賞せずして曰く「城を舍てて歸るは、怯なり」と。諸將、晴信に心服す。而れども敢て其の功を稱せず。晴信仍ほ愚色あり。

通釋 十一月、信虎は兵を信濃に出して海口城を攻めた。城主平賀源心はよく戦つた。信虎は兵八千を率ゐて之を攻め、一月以上になつても落すことが出来なかつた。丁度大雪が降つた。諸將は相談してゐるには「今は十二月も押し詰まりました。軍勢を引きかへしませう。これでは、敵もきつと後を追つかかはしますまい」と。信虎も之に従つた。晴信は自ら殿をしたいと請うた。信虎は笑つてゐるには「敵がきつと追撃しないと決まつて、殿をしたいと申出る。二郎だと、さやうな事は申さない」と。晴信は是非にと願つて、兵三百をつれて殿し、本隊に後れること數里の所に止まり陣し、自分で其の兵士を警戒してゐるには「鎧をぬいではならぬ。鞍を

下ろしてはならぬ。馬に食物を與へてから飯を食へ。夜中に出發しよう。皆の者はたゞ余が向ふところを見て行動せよ」と。その兵士は皆ひそかに之を笑つていふには「こんな吹雪である。何を警戒する要があらうぞ」と。夜半になつて、晴信は出發し、引きかへして海口に向ひ、三百騎と雪の中を馳せて、夜明け頃城に着いた。源心はその兵を解散して立ち去らせ、ひとり、百人と留り、守つて居た。晴信は兵を分けて、三隊となし、自ら一隊を率ゐて城に入り、他の二隊は旗を城外に掲げて、之に應じさせた。城兵は敵の数が多いか少いか分らず慌て、戦はないで潰れた。そこで、源心を討ち取り、その首を以て歸つて獻上した。一軍の者は非常に驚いた。信虎は褒めないでいふには「攻め取つた城を棄て、置いて歸つたのは卑怯である」と。諸將は心から晴信に服した。併し信虎を憚つてその功を褒めた、へるものはなかつた。晴信は依然として馬鹿げた態をしてゐた。

〔二〕 二郎(繁) ○五更(午前四時)

信虎狂暴賞罰無常。國人苦之。晴信陰與老臣飯富兵部板垣信形謀、益結今川義元。義元素病、信虎強亢、欲助晴信而擅其國。信虎不覺也。七年五月、信虎欲逐晴信於駿河。因託之於飯富氏、而自適駿河。計之義元。義元留信虎不返。而晴信自立於甲斐。諸宿將莫不類首聽命。而隣國聞變、欲乘其隙。信濃士民多去、附村上義清。六月、諏訪城主諏訪賴茂、深志城主小笠原長時、合兵一萬來攻。晴信令騎將原加賀留守、而自以六千人出拒。荏崎。加賀聚府中農商、得五千人。人執一紙旗、鼓譟而出。敵乃退走。

信虎、狂暴にして、賞罰常なし。國人、之を苦しむ。晴信、陰に老臣飯富兵部・板垣信形と謀り、益々今川義元と結ぶ。義元素より信虎の強亢を病み、晴信を助けて其の國を擅にせんと欲す。信虎覺らざるなり。七年五月、信虎、晴信を駿河に逐はんと欲す。因つて之を飯富氏に託して、自ら駿河に適き、之を義元に計る。義元、信虎を留め返さず。而して晴信、甲斐に自立す。諸宿將、首を類し命を聽かざるは莫し。而して隣國、變を聞き、其の隙に乗せんと欲す。信濃の士民、多く去り、村上義清に附く。六月、諏訪城主諏訪賴茂、深志城主小笠原長時、兵一萬を合せ來り攻む。晴信、騎將加賀をして留守せしめ、而して自ら六千人を以て出でて荏崎に拒ぐ。加賀、府中の農商を聚め、五千人を得、人ごとに一紙旗を執り、鼓譟して出でしむ。敵乃ち退き走る。

〔通〕 信虎は氣荒々しくて賞罰も確實でない。國人は皆それに苦しんだ。晴信は家老の飯富兵部・板垣信形と相談し、益々今川義元と結んだ。義元も平素から信虎の強くて思ふ様にならぬのを心配してゐたので、晴信を助けて、甲斐の國を勝手にしたいと考へて居た。信虎は一向それを覺らなかつた。七年五月、信虎は晴信を駿河に逐はうと思つた。そこで之を飯富氏に預けて置いて、自分は駿河に出かけて義元にその相談をした。義元は信虎を留めて置いて還さなかつた。その間に晴信は甲斐で自立した。諸々の老将は頭を垂れてその命を聽かないものはなかつた。一方隣國の者どもは、この事變を聞き込んで、その隙に付け込まうと思つた。信濃の士民は多く去つて、村上義清に附いた。六月、諏訪の城主諏訪賴茂・深志の城主小笠原長時は兵一萬を合して攻めて來たの

で、晴信は騎兵の隊將原加賀をして留守をさせて置き、そして自分は六千人をつれて打つて出で、韭崎で拒いだ。加賀は府内の農民商人を狩り集めて五千人を手に入れ、鎧々一本づの紙旗を持たせて太鼓と喊の聲とで撃つて出させた。そこで敵軍はかなはず退き去つた。

晴信寢驕、耽宴樂、喜詩賦、不視國政。群臣莫敢諫。板垣信稱病、潛延一僧、善詩者於家、學詩數旬、乃出侍宴、請賦詩。晴信不信、強請而可立。就五題、晴信大喜曰、「汝何遽能如」此。信形因大諫曰、「先君唯無道、故爲君所逐。今君復如此、得不復有如君者乎。」晴信感悟、遂厲精爲政。

晴信寢く驕にして、宴樂に耽り、詩賦を喜み、國政を視ず。群臣敢て諫むる莫し。板垣信稱、病と稱し、潛に一僧の詩を善くする者を家に延き、詩を學ぶこと數旬、乃ち出でて宴に侍し、詩を賦せんと請ふ。晴信信ぜず。強請して可さる。立ちどころに五題を就す。晴信、大に喜び曰く、「汝何遽ぞ能く此くの如くなる」と。信形、因つて大に諫めて曰く、「先君唯だ無道、故に君の逐ふ所と爲る。今、君復此くの如し。復君の如き者有らざるを得んや」と。晴信感悟し、遂に精を厲して政を爲す。

その内に晴信は追々心が驕り氣儘になつて酒宴の樂に耽り、好んで詩を作りなどして、國の政治を視ない。群臣に押し切つて諫めるものもなかつた。板垣信稱は病氣と言ひ立て、家に籠り、こつそり詩の上手な僧を呼び込んで數十日賦詩の稽古をし、出來上つた所へ出仕して宴會に侍し、詩を作り度いと申し出た。併し晴信は信用しなかつた。執拗く驅つて、やつと許された。即座に五題の詩を作り上げた。晴信は大層喜んで曰ふのに、「其の方はどうしてそんなに上手になつたか」と。そこで信形は大に諫めていふには「先殿様は唯だ無道でありましたから殿様の爲めに逐はれなすつたのであります。而るに今や殿様もまた國政をお執りなさらず、先殿様のやうな有様で御座います。これでは又殿様の様な人が現れて來ないとも申されません」と。晴信は感じ悟つて一生懸命に政治を勵んだ。

先君(信虎) ○如君者(君の如く、主君)を追い出す者)

十一年三月、義清・長時・賴茂與木曾義高、舉信濃兵來攻。諸將皆懼。晴信曰、「四人合從、議必不一。可一戰而破也。」乃伴浚溝、高壘。四人以爲怯、進入境内。晴信夜發、乘霧兩逼、擊大敗之。四人再舉至平澤。又擊破之。自是連年相攻、晴信每勝。

十一年三月、義清・長時・賴茂、木曾義高と、信濃の兵を擧げ來り攻む。諸將皆懼る。晴信曰く、「四人合從すれども、議必ずしも一ならず。一戰して破る可きなり」と。乃ち伴つて溝を浚ひ壘を高くす。四人以て怯と爲し、進んで境内に入る。晴信、夜發し、霧雨に乗じ、廻り撃ち大に之を敗る。四人、再舉し平澤に至る。又撃つて之を破る。是より連年、相攻むれども、晴信毎に勝つ。

十一年三月、義清・長時・賴茂は木曾義高と信濃の兵を擧げて來り攻めた。諸將は皆懼れた。晴信がいふのに「四人の者は兵を連合したけれども、意見が必ずしも一致しないであらう。だから一戰して破ることが出來

る」と。そこでわざと溝を浚ひ、壘を高くして、堅固にして居た。四人の者は晴信は卑怯者だと思ひ境内に進み込んだ。晴信は夜出發して霧雨につけ込んで敵に逼り撃ち大に之を敗つた。四人は再舉して、平澤に來た。又撃つて之を破つた。これからは年々つゞけて、互に攻め合つたがいつも晴信が勝つた。

平澤(信)

晴信舉山本勘助。勘助三河人、眇目痿躄、嘗學兵於尾形某、以于今川氏。駿河舊臣、皆侮易之、義元不奇也。勘助寄食數年、板垣信形聞其名、薦之晴信。晴信召見與語、大悅之、即日與二百貫邑、賜名晴行。十一月、晴信以晴行計、取信濃九城。十三年、以信形計、誘殺諏訪賴茂、而納其女爲妾。明年生男勝頼、稱四郎。晴信有長男義信、以爲嫡嗣、使勝頼承頼茂後。十四年五月、與小笠原長時及伊奈氏戰于鹽尻嶺、破之。

晴信、山本勘助を擧ぐ。勘助は、三河の人、眇目痿躄なり。嘗て兵を尾形某に學び、以て今川氏に干む。駿河の舊臣、皆之を侮易し、義元、奇とせず。勘助、寄食すること數年。板垣信形、其の名を聞き、之を晴信に薦む。晴信、召し見て與に語り、大に之を悦び、即日二百貫の邑を與へ、名を晴行と賜ふ。十一月、晴信、晴行の計を以て、信濃の九城を取る。十三年、信形の計を以て、諏訪賴茂を誘殺し、其の女を納れて妾と爲す。明年、男勝頼を生む。四郎と稱す。晴信、長男義信あり。以て嫡嗣と爲し、勝頼をして頼茂の後を承けしむ。十

四年五月、小笠原長時及び伊奈氏と、鹽尻嶺に戦ひ、之を破る。

晴信は山本勘助を擧げ用ひた。勘助は三河の人で目つかちでびつこであつた。以前兵法を尾形某に習つて、今川氏に奉公しようと思つた。併し今川の舊臣どもが皆馬鹿にして侮り、義元も亦格別すぐれた者とも思はなかつた。勘助は用ひられないで數年間も人の家に居候となつて居た。板垣信形は勘助の名を聞いて之を晴信に推薦した。晴信は呼びよせて話合つて見て大層氣に入り、その日直ぐ二百貫の領地を與へ、名を晴行と賜はつた。十一月、晴信は晴行の計略で信濃の九ヶ城を取つた。十三年、信形の計略で諏訪賴茂を誘ひ出して殺し、其の娘を入れて妾とした。翌年其の女は勝頼といふ男子を生んだ。四郎と稱した。晴信には長男の義信といふのがあつた。それを嫡嗣としたので勝頼は頼茂の跡目を相續させた。十四年五月、小笠原長時及び伊奈氏と鹽尻嶺で戦つて之を撃ち破つた。

二百貫(一貫は十石が普通である) ○納其女(山本勘助の策) ○鹽尻(信)

十五年三月、攻戸石城。村上義清將兵六千來援。我前鋒甘利備前、横田備中等皆敗死。我軍將潰。晴行説曰、「敵鋒不可遏。使之右顧、則克。」晴信曰、「我兵且不從令。曷能使敵如我意。」晴行請假後隊兵、左旋而出。義清軍右顧。晴信軍氣復振、進擊破之。晴行以功、食八百貫邑。乃往駿河謝。前嗤笑者、交口稱譽。義元悔之。上杉氏將士聞甲斐兵弊於戸石、以二萬騎踰碓氷嶺。晴信遣信形拒焉。而自繼之。九月、擊破上杉

氏軍、眞田幸隆及子昌幸、皆有功。晴信又用幸隆計、誘殺村上義清、精兵五百。十六年八月、晴信取志賀城。義清出軍上田原、板垣信形將前軍、戰勝不備。義清窺其怠、悉甲襲殺之。晴信赴援、義清率死士突入其麾下、與接刃、墮馬終大敗。十八年八月、晴信略地上野、又與小笠原長時戰于諏訪原、走之。十九年三月、復略上野、聞長時復出而還。

十五年三月、戸石城を攻む。村上義清兵六千に將として來り援く。我が先鋒甘利備前・横田備中等皆敗死し、我が軍將に潰えんとす。晴行説いて曰く「敵鋒過む可からず。之をして右顧せしめば則ち克たん」と。晴信曰く「我が兵すら且つ令に從はず。曷ぞ能く敵をして我が意の如くならしめん」と。晴行請うて後隊の兵を借り、左旋して出づ。義清の軍、右顧す。晴信の軍氣復振ひ、進み撃ち之を破る。晴行、功を以て八百貫の邑を食む。乃ち駿河に往いて謝す。前に嗤笑せし者、口を交へて稱譽す。義元、之を悔ゆ。上杉氏の將士、甲斐の兵、戸石に弊ると聞き、二萬騎を以て碓氷嶺を踰ゆ。晴信、信形を遣はして拒がしむ。而して自ら之に繼ぐ。九月、撃つて上杉氏の軍を破る。眞田幸隆及び子昌幸、皆功あり。晴信、又幸隆の計を用ひ、村上義清の精兵五百を誘殺す。十六年八月、晴信、志賀城を取る。義清、出でて上田原に軍す。板垣信形、前軍に將とし、戦ひ勝つて備へず。義清、其の怠るを窺ひ、甲を悉し、之を襲殺す。晴信、赴き援く。義清、死士を率ゐ、其の麾下に突入り、與に刃を接し、馬より墮ち、終に大に敗る。十八年八月、晴信、地上野に略し、又小笠原長時と、諏訪原

に戦ひ、之を走らす。十九年三月、復上野を略す。長時復出づと聞いて還る。

十五年三月、戸石城を攻めた。村上義清は六千の兵をつれて援けに來た。我が先鋒甘利備前・横田備中等などは皆敗けて討ち死し、我が軍は崩れようとした。晴行は晴信に説いて曰ふには「敵の鋒先は中々鋭くて、到底喰ひ止めることは出来ません。併し敵が右の方をふり向く様にさせれば、きつと勝てます」と。晴信が曰ふのに「一味方でさへも命令に從はない。それをどうして、敵を我が心のまゝにすることが出来ようか」と。そこで晴行はお願ひして後手の兵を借りて左の方から廻つて出た。義清の軍勢は果して右の方をふり向き、晴信の軍勢の意氣再び振つて、遂に進み撃つて敵を破つた。晴行はその功で八百貫の領地を貰つた。そこで駿河へ往つて、もと厄介になつた人々にお禮を言つた。前に晴行を嘲り笑つたものも口々に褒めた、へた。義元も彼を採用しなかつたことを後悔した。上杉氏の將士は甲斐の兵が戸石で敗られたと聞いて、二萬騎をつれて、碓氷嶺を踰えた。晴信は信形を遣つて之を拒がせ、そして、自分も繼いで進んだ。九月、上杉氏の軍を撃ち破つた。眞田幸隆及びその子の昌幸は皆此の戦で功があつた。晴信は又幸隆の計略を用ひて、村上義清の精兵五百人をだまし討にして殺した。十六年八月、晴信は志賀城を取つた。義清は出で、上田原に陣取つた。我が板垣信形は先手の大將となり戦ひには勝つたが、あとを用心しなかつた。義清はその油斷を見すまして軍勢残らずで不意に之を襲うて信形を殺した。晴信は助けに行つた。義清は決死の士をつれて、晴信の本陣に衝き込んで、晴信と太刀打ちしたが義清は馬から落ちてとうとう大に敗れた。十八年八月、晴信は地上野に取り、又小笠原長時と諏訪原で戦つて之を走らせた。十九年三月、また上野の地を取つた。長時がまた討つて出たと聞いて引き返した。

戸石・志賀(信)

時今川義元與相模國主北條氏康婚爲氏康來請晴信曰氏康與上杉氏戰將取上野願君勿先焉晴信乃與氏康義元連和是歲晴信削髮稱信玄信玄引鏡自視曰吾貌類不動佛乃使畫史爲己像執劍及索曰我死四隣襲入視吾像不敢加無禮也信玄連攻村上義清又攻高梨須田島津氏二十二年盡略河中島四郡地義清等不能支相共計以爲可敵信玄者唯上杉謙信乃往投之

訓讀 時に今川義元、相模の國主北條氏康と婚し、氏康の爲めに、來り晴信に請うて曰く「氏康、上杉氏と戦ひ、將に上野を取らんとす。願はくば君、先んずる勿れ」と。晴信乃ち氏康・義元と連和す。是の歲、晴信髮を削り信玄と稱す。信玄、鏡を引き自ら視て曰く「吾が貌、不動佛に類す」と。乃ち畫史をして己の像を爲り、劍及び索を執らしめて曰く「我れ死し、四隣襲ひ入るとも、吾が像を見て、敢て無禮を加へざる也」と。信玄、連に村上義清を攻む。又高梨・須田・島津氏を攻む。二十二年、盡く河中島四郡の地を略す。義清等支ふる能はず。相共に計り以爲へらく、信玄に敵す可き者は、唯上杉謙信のみと。乃ち往いて之に投ず。

通釋 當時今川義元は相模の國主北條氏康と婚姻を結び、氏康の爲めに來つて、晴信に請うていふには「氏康は上杉氏と戦つて、上野を取らうとして居る。何卒貴公、先きにお取りにならぬやうに」と。そこで晴信は氏康・義元と和睦連合した。この年、晴信は髮を剃つて信玄と號した。信玄は鏡を引き寄せ、自分の顔を見ていふには「余が顔はお不動様に似てゐるぞ」と。そこで畫家に言ひ付けて自分の肖像を畫かせ、劍と繩とを持つた形にし、ていには「乃公が死んで四方の隣國から攻め込んでも余が像を見て決して無禮を加へることはないだらう」と。(不動明王の形であるから無禮が加へられぬ譯)。信玄は續げ様に、村上義清を攻めた。又高梨・須田・島津をも攻めた。二十二年には、すつかり河中島四郡の土地を取つた。義清等は支へることが出来なかつた。互に相談して信玄に敵することの出来るものはたゞ上杉謙信だけだと思つた。そこで皆謙信の所へ出かけて、身を寄せることゝした。

語釋 勿先(先に上野を取る) ○劍及索(不動明王は右手に大智劍、左手に三昧繩を執る)

上杉氏本長尾氏平良文裔也良文後十世曰景政居鎌倉稱權五郎以勇著東國大庭氏梶原氏皆出於景政景政後五世曰景弘始稱長尾氏長尾氏嗣絶養上杉藤景爲嗣藤景本藤原氏藤原重房從皇子宗尊適東國食丹波上杉邑因氏焉子孫爲足利氏外戚管領東國藤景其庶曾孫也後臣屬於上杉氏散處越後上野伊豆諸國

訓讀 上杉氏は、本長尾氏、平良文の裔なり、良文の後十世を、景政と曰ふ。鎌倉に居り、權五郎と稱し、勇を以て東國に著る。大庭氏・梶原氏、皆景政より出づ。景政の後五世を、景弘と曰ひ、始めて長尾氏と稱す。長尾氏、嗣絶ゆ。上杉藤景を養ひ嗣と爲す。藤景は、本藤原氏なり。藤原重房、皇子宗尊に從ひ、東國に適き、丹

波の上杉邑を食む。因つて氏とす。子孫、足利氏の外戚となり、東國を管領す。藤景は、其の庶曾孫なり。後上杉氏に臣屬し、越後・上野・伊豆の諸國に散處す。

通釋 上杉氏はもと長尾氏、平良文の子孫である。良文の後十代目を景政といつた。鎌倉にゐて権五郎と稱し勇氣を以て關東に名高かつた。大庭氏・梶原氏は皆景政から出たのである。景政の後五代目を景弘といひ、はじめて長尾氏と稱した。長尾氏は其の後子孫が絶えた。そこで上杉藤景を養つて繼嗣とした。藤景はもと藤原氏である。藤原重房は皇子宗尊親王に從つて關東に行き、丹波の上杉村を領有して居た。それで上杉氏とつけたのである。その子孫は足利氏の外戚となり、東國を管領してゐた。藤景は重房の側腹の曾孫である。後にその子孫は上杉氏の家來となり、越後・上野・伊豆の諸國に散らばつて住まつて居た。

語釋 平良文(葛原親王) ○宗尊(後醍醐天皇の曾孫)

自藤景而後十二世、曰爲景、爲景輔上杉房能于越後。後以事相隙、舉兵鬪。房能終死于雨溝。時永正三年也。房能、兄顯定爲管領。六年、顯定與子憲總、率上野兵來討爲景。爲景敗、走越中西濱。顯定留徇越後。越後士民不服顯定。推高梨某爲將、去歸爲景。七年六月、爲景與高梨合兵、擊憲總于椎屋、破之。憲總走、保妻有莊、隨而圍之。顯定赴援、戰于長森、敗死。憲總走、歸上野。爲景乃立上杉氏、庶孽定實、妻以其女、置

之上條城、奉之而已。居越中府內、徇越後、盡下之。長尾氏始大。天文十一年、一向賊起、加賀、與州豪族椎名泰種、神保良衡、連兵叛爲景。爲景自往擊之、至梅檀野。賊將江波某伴降、設筭于路、迎爲景、陷而殺之。

訓 藤景より後十二世を爲景と曰ふ。爲景、上杉房能を越後に輔く。後、事を以て相隙し、兵を擧げて鬪ふ。房能、終に雨溝に死す。時に永正三年なり。房能の兄顯定、管領と爲る。六年、顯定、子憲總と、上野の兵を率ゐ、來つて爲景を討つ。爲景敗れ、越中の西濱に走る。顯定留り越後を徇ふ。越後の士民、顯定に服せず。高梨某を推して將となし、去つて爲景に歸す。七年六月、爲景、高梨と兵を合せ、憲總を椎屋に撃ちて、之を破る。憲總走り、妻有莊を保つ。隨つて之を圍む。顯定赴き援け、長森に戦ひ、敗死す。憲總走り、上野に歸る。爲景乃ち上杉氏の庶孽定實を立て、妻はすに其の女を以てし、之を上條城に置き、之を奉す。而して己は越中の府内に居り、越後を徇へ、盡く之を下す。長尾氏始めて大なり。天文十一年、一向の賊、加賀に起り、州の豪族椎名泰種、神保良衡と兵を連ね、爲景に叛く。爲景自ら往きて之を撃ち、梅檀野に至る。賊將江波某伴り降り、筭を路に設け、爲景を迎へ、陥れて之を殺す。

通釋 藤景から後十二代目を爲景といつた。爲景は上杉房能を越後に輔けてゐた。後にある事から互に仲違ひをし、兵を擧げて鬪つた。房能はとうとう雨溝で死んだ。時に永正三年であつた。房能の兄顯定は管領となつた。六年顯定は其の子の憲總と上野の兵をつれて來て、爲景を討つた。爲景は敗れ、越中の西濱に走つた。顯定は留まつて越後をふれ下した。然るに越後の士民は顯定に服従しなかつた。高梨某を推して大將となし、顯定に背い

て、爲景に従ひ附いた。七年六月、爲景は高梨と兵を合せて、憲總を椎屋に撃つて、之を打ち破つた。憲總は逃げて妻有の莊を固めた。爲景等はすぐあとから之を取り圍んだ。顯定は援けに行き、長森で戦つて敗れて死んだ。憲總は逃げて、上野に歸つた。そこで爲景は上杉氏の側腹の子孫の定實を立て、自分の娘を妻にやり、之を上條城に据ゑて主君として守り立てた。そして、自分は越中の府内に居て越後を觸れさとして全部降参させた。長尾氏はこれからはじめて強大となつた。天文十一年、一向宗の賊が加賀に起つて土地の豪族、椎名泰種・神保良衛等と兵を連合して爲景に叛いた。爲景は自分で出かけて、之を撃ち、梅檀野まで来た。賊將江波某伴り降り、落し穴を路に拵へ置き、爲景を迎へて穴の中に陥れて殺した。

【語釋】 雨溝・椎屋(後) ○永正(後柏原天) ○妻有・長森(野上) ○上條(濃信) ○梅檀野(中)

爲景有四男。長晴景、次景康、次景房、季曰景虎。景虎幼字虎千代、爲繼妻出。甫八歳、精悍有膽略。爲景不愛也。逐之椽尾、欲以爲僧。景虎不肯學僧事。及爲景死、諸將多屬意景虎。而大臣胎田常陸者、自爲景時、有權寵。利晴景庸暗、與二子黒田秀忠、金津某、及三條城主長尾俊景謀立晴景、殺景康等。景房出走、追殺之。貳城門中、景虎時年十三、亦走。門者爲匿之。簀床下、逮夜、發而出之。則熟眠矣。喚起潛出。入春日山寺。寺僧挈之逃。椽尾、匿乳母、夫本莊慶秀家。慶秀與宇佐美定行、盡心保護。定行者

上杉氏世將好讀書、通天文兵法。謂景虎可輔也、深相結託。

爲景四男あり。長を晴景、次を景康、次を景房、季を景虎と曰ふ。景虎、幼字は虎千代、繼妻の出たり。甫めて八歳、精悍にして膽略あり。爲景、愛せず。之を椽尾に逐ひ、以て僧と爲さんと欲す。景虎、肯て僧の事を學ばず。爲景死するに及び諸將多く意を景虎に屬す。而して大臣胎田常陸なる者、爲景の時より、權寵あり。晴景の庸暗を利とし、二子黒田秀忠・金津某、及び三條城主長尾俊景と謀り、晴景を立て、景康等を殺さんとす。景房出で走る。追うて之を貳城の門中に殺す。景虎、時に年十三、亦走る。門者、爲めに之を簀床の下に匿す。夜に逮び、發いて之を出だせば、則ち熟眠せり。喚び起し潛に出でしむ。春日山寺に入る。寺僧、之を挈げ椽尾に逃れ、乳母の夫本莊慶秀の家に匿す。慶秀、宇佐美定行と、心を盡して保護す。定行は、上杉氏の世將なり。好んで書を讀み、天文・兵法に通ず。景虎輔く可しと謂ふや、深く相結託す。

爲景には四人の男の子があつた。長男を晴景、次男を景康、三男を景房、季の子は景虎といつた。景虎は幼名虎千代といひ、後妻の生んだ子である。やつと八歳の頃から勇氣があつて、膽太く策略に富んでゐた。爲景は之を愛しなかつた。椽尾に逐つ拂つて僧にしようと思つた。景虎は僧のことを學ばうとはしなかつた。爲景が死んだからは諸將は多く景虎に心を寄せた。併し家老の胎田常陸なる者、爲景の時から氣に入つて權力もあつた。晴景が愚か者であるのをよい事にし、二人の倅黒田秀忠・金津某及び三條の城主長尾俊景と相談し、晴景を立ててそして景康等を殺さうとした。景房は逃げ出した。追つかけて、二の丸の門内で殺した。景虎はその時年十三であつたが亦逃げ出した。門番はこれを簀の床の下に匿した。夜になつて床を上げて出さうとすると、すやくと寐入つてゐた。そこで呼び起して、そつと出してやつた。春日山の寺に入った。寺の僧は之をつれて椽尾

に逃げ、乳母の夫なる本莊慶秀の家を匿した。慶秀は、宇佐美定行と心を盡して之を守り立てた。この定行は上杉家の代々の大将の家柄のものである。書を讀むことを好み、天文、兵法に通じてゐた。景虎は立派な人物で、輔佐して行くに甲斐ある人と思ひ込み、深く互に結び合つてゐた。

【語釋】 榎尾・三條(後) ○門者(山本六助) ○春日山(前)

既而景虎聞賊搜索已不置也、則出避之。同從士十四人、爲行脚僧狀、行膝穿鞋而出。上米山、瞰視府内、曰「吾他日、起兵復國、必陣于此。」遂至梅檀野、泣且拜曰「兒必夷滅仇敵、以慰冤魂。於是、經歷北陸、東山、諸國、周視山川、城池、形勢、圖寫齋歸。有告賊以、景虎所在。遣甲來捕景虎、與慶秀、定行謀、起兵修榎尾城、據之、聽命於上杉定實。」

【訓讀】 既にして景虎、賊の己を搜索して置かざるを聞くや、則ち出でて之を避く。從士十四人と同じく、行脚僧の狀を爲し、行膝し鞋を穿いて出づ。米山に上り、府内を瞰視して曰く「吾れ他日、兵を起し國を復するときは、必ず此に陣せん」と。遂に梅檀野に至り、泣き且つ拜して曰く「兒必ず仇敵を夷滅し、以て冤魂を慰めん」と。是に於て、北陸、東山の諸國を經歷し、山川城池の形勢を周視し、圖寫し齋し歸る。賊に告ぐるに景虎の所在を以てするものあり。甲を遣はし來り捕へんとす。景虎・慶秀・定行と謀り、兵を起し、榎尾城を修め之に據り、命を上杉定實に聽く。

【通釋】 その内に景虎は胎田等が自分を捜して止まないと聞いたので、出奔して之を避けることにした。十四人のお供と一緒に、行脚僧の服装をして、脚絆草鞋はきで出かけた。米山に登つて、越中の城内を見下して、いふには「吾れ後日、兵を起して國を回復した時には必ずここに陣取らう」と。それから進んで、爲景の殺された梅檀野に來て、泣き且つ拜して、いふには「私はきつと仇敵を平げ滅して、父上の御無念を霽らします」と。そこで、北陸・東山の諸國をめぐり、山川城池の様子を視察して、すつかり之を繪圖に寫し取り持ち歸つた。所が景虎の居場所を胎田等に告げたものがあつた。兵士を遣はして捕へに來ようとした。景虎は慶秀・定行と相談して兵を起し、榎尾の城を修繕して、そこに立籠り、上杉定實の指圖を受けることにした。

【語釋】 行膝(脚絆) ○米山(後)

十三年春、俊景秀忠將兵來攻。景虎防戰、大破之、斬俊景、走秀忠。十四年、遣神餘昌綱、赴京師、請討賊、詔旨。十五年、賊數來攻。景虎每戰輒勝。十六年、晴景遣族政、景大舉來攻。定行欲出戰。景虎上城望之、曰「敵遠來、無輜重、非久留者。俟其將引去、擊之可也。」夜半、政景果卻。景虎以三千騎、開門出戰。于下濱、走之。及米山、景虎按兵止。敵過、嶺鼓衆追擊、又大破之。定行謂諸將曰「諸君知主公按兵止故乎。曰「不知也。曰「敵迫險、急之則返擊。聽其過嶺、乘高下擊、敵不能支。主公年少、臨機制變、如此。」

豈我輩所企及哉於是政景降晴景窮蹙自殺

十三年春、俊景・秀忠、兵に將として來り攻む。景虎防ぎ戦ひ、大に之を破り、俊景を斬り、秀忠を走らす。十四年、神餘昌綱を遣はし、京師に赴き、賊を討するの詔旨を請はしむ。十五年、賊數來り攻む。景虎每戦凱ち勝つ。十六年、晴景、族政景を遣はし、大舉し來り攻めしむ。定行出で戦はんと欲す。景虎城に上り之を望み曰く「敵遠く來り輻重なし。久しく留る者に非ず。其の將に引き去らんとするを俟ち、之を撃つて可なり」と。夜半、政景果して卻く。景虎、三千騎を以て門を開き出で、下濱に戦ひ、之を走らせ、米山に及ぶころ、景虎兵を按じ止り、敵、嶺を過ぐるころ、衆を鼓し追撃し、又大に之を破る。定行、諸將に謂つて曰く「諸君、主公の兵を按じ止る故を知るか」と。曰く「知らず」と。曰く「敵、險に迫る。之を急にすれば則ち返り撃つ。其の嶺を過ぐるを聽し、高きに乗じ下り撃てば、敵支ふること能はず。主公、年少なれども、機に臨み變を制すること此くの如し。豈に我が輩の企て及ぶ所ならんや」と。是に於て、政景降り、晴景、窮蹙して自殺す。
十三年春、俊景・秀忠、兵を率ゐて攻め來つた。景虎は防ぎ戦つて大に之を打ち破つて、俊景を斬り、秀忠を追ひ散らした。十四年、神餘昌綱を遣つて京師に往かせ、賊を征伐する御詔を頂戴し度いとお願ひさせた。十五年賊兵が度々攻め來つた。景虎はどの戦争でも勝つた。十六年、晴景は一族の政景を遣はし、大舉して攻め來らした。定行は城から出て戦はうとした。景虎は城に上つて之を望んでいふのに「敵は遠方から來たのに荷物などが無い。これは長い間留まつて居る考へがないのだ。その内に引き歸すに決まつてゐるから、その時を待つて之を撃てば譯なしである。」と。夜半に政景は果して退いた。景虎は三千騎をつれて、城門を押し開いて打つて出で、下濱で戦つて之を走らせ、米山まで追つかけて來ると、景虎は兵を押へて之を止め、敵が米山の嶺

を越えた頃、急に衆を勵まして追撃し、又大に之を破つた。定行は諸將に向つていふのに「諸君は主公が兵を止められた譯を知つて居るか」と。皆は「知りません」といふ。そこで定行がいふのに「敵は險阻に近づいた。さういふ場合に急に之を撃つと、敵は進退谷まつて遂に引き返して撃つて來るものである。だから敵が峠を越すのを許してやつて、下り坂になつた時こちらは高い所から一目散に下り撃つと、敵は到底支へることは出来ない。主公はお年こそ若い、臨機應變の處置をお取りになることはこんな風である。どうして我等の及ぶことの出来るお方だらうか」と。そこで政景は降參し、晴景は行き詰つて弱り切り、自殺して終つた。

下濱(後越)

十八年、國人請景虎入府内。胎田等猶據三條不下。十九年、景虎攻三條拔之、誅胎田。賊以餘兵保新山、黑瀧二城。欲遂攻之。會上杉定實卒、不果。二十年、遣將高梨貞頼、攻拔新山、誅黑田秀忠。宇佐美定行拔黑瀧、誅金津。越後盡定。二十一年、諸將士共欲推景虎爲主。景虎曰「吾迫於上下之意、與兄抗兵、不料其自死。而吾主越後、世謂吾篡也。今國內略定、別擇主可也。吾逃爲僧、以明吾志。遂削髮、號曰謙信。將赴高野山。諸將士連署、請其止治。國謙信曰「置君、將用其令也。不用令、無君可也。自今吾所令、莫敢或違、則吾肯止耳。」乃與諸將誓而入。明日、出令、收專命大臣十六人、

賜^ニ死^ニ于^テ林泉寺^ニ。諸將股栗。五月、任^ニ彈正少弼^ニ。敍^ニ從五位下^ニ。謙信曰^ク、坐^ニ受^ニ官爵^ニ、非^ニ人臣^ニ、義^ニ也^ト。二十二年二月、假^リ路^ヲ諸國^ニ、率^ニ兵二千^ヲ、經^テ北陸^ヲ入^リ京師^ニ。先^ニ詣^リ闕^ニ、遂^ニ謁^シ將軍義輝^ニ。五月、歸^ル。

訓 十八年、國人、景虎の府内に入るを請ふ。胎田等、猶ほ三條に據り下らす。十九年、景虎、三條を攻め之を抜き、胎田を誅す。賊、餘兵を以て、新山・黒瀧の二城を保つ。遂に之を攻めんと欲す。會々上杉定實卒し、果さず。二十年、將高梨貞頼を遣はし、攻め新山を抜かしめ、黒田秀忠を誅す。宇佐美定行、黒瀧を抜き、金津を誅す。越後盡く定る。二十一年、諸將士、共に景虎を推し主と爲さんと欲す。景虎曰く「吾れ上下の意に迫られ、兄と兵を抗す。料らざりき。其の自ら死せんとは。而して吾れ越後に主たらば、世、吾を慕へりと謂はん。今國內略定る。別に主を擇んで可なり。吾れ逃れて僧と爲り、以て吾が志を明にせん」と。遂に髮を削り、號して謙信と曰ふ。將に高野山に赴かんとす。諸將士、連署し、其の止り國を治めんことを請ふ。謙信曰く「君を置くは、將に其の令を用ひんとするなり。令を用ひずば、君無くして可なり。今より吾が令する所、敢て違ふこと或る莫くば、則ち吾れ肯て止らんのみ」と。乃ち諸將と誓つて入る。明日、令を出し、命を專にする大臣十六人を收め、死を林泉寺に賜ふ。諸將、股栗す。五月、彈正少弼に任せられ、從五位下に叙せらる。謙信曰く「坐ながら官爵を受くるは、人臣の義に非ざるなり」と。二十二年二月、路を諸國に假り、兵二千を率ゐ、北陸を經京師に入り、先づ闕に詣り、遂に將軍義輝に謁し、五月歸る。

通釋

十八年、國人は景虎に請うて府内に入つて貰つた。併し胎田等はまだ三條に立て籠つて降参しなかつた。

十九年、景虎は三條を攻めて之を陥れ、胎田を殺した。賊は殘兵をつれて新山、黒瀧の二城に立て籠つた。景虎はついでに之も攻めようと思つた。丁度其の時上杉定實が死んだので果さなかつた。二十年、大將の高梨貞頼を遣はして新山を陥れ、黒田秀忠を誅した。宇佐美定行は黒瀧を攻め落し、金津某を誅した。これで越後は皆平定した。二十一年、諸將士は共に景虎を推して、國主にしようと思つた。景虎がいふのに「余は上下の人々の希望に迫られて是非なく兄と攻め合つた。併し兄が自殺しようとは夢にも思はなかつた。それを今余が越後に國主となつたら、世間では余を位を簞つたものといふだらう。今國內は略ぼ平定した。だから別に國王を擇んだら宜いだらう。余は世を逃れて僧となつて余が本心を證明したのである」と。遂に髮を剃つて謙信と號した。謙信は紀州の高野山に往かうとした。諸將士は連判狀を出して、是非とも思ひ止まつて國を治めて貰ひ度いと願ひ出した。謙信がいふのに「君を置くのはその命令を用ひるが爲めである。若し命令を用ひなかつたら、君などは要らない。今から余が命するところには少しも背かないといふなら、高野へ行くの思ひ止まらう」と。そこで諸將と背かぬといふ誓約を爲して奥に入つた。明日、命令を出して君命を專斷した家老十六人を捕へて、林泉寺境内で切腹させた。諸將は慄え上つた。五月、謙信は彈正少弼に任せられ、從五位下に叙せられた。謙信はいふのに「ぢつとしてゐて官爵を頂戴するといふは、人臣のなすべき道ではない」と。二十二年二月、諸國の道路を通行させて貰つて、兵二千を率ゐ、北陸道を経て京都に入り、先づ御所に参内し、それから將軍義輝に會面し、五月に歸國した。

註釋 兄(景)

村上義清、與高梨政頼、須田親滿、島津規久等、自信濃來、投請謁謙信、言曰、僕等爲武田信玄所侵掠、容身無地、側聞公威名、願賜一手下救援、謙信曰、諸君豈爲人下者、而來託於我、是知我也、我今略定内亂、念賀越吾父讐、常欲屠此二國、遂樹幟京畿、是吾素志耳、雖然、遇知我者、而不爲出力、非丈夫也、因問義清曰、信玄用兵如何、曰、信玄行軍不貪程頓、每戰要勝於後、謙信曰、彼要後勝、意在拓地也、吾則不然、遇敵輒戰、要不枉其鋒耳、於是下令國內、以十月十二日、治兵小田濱、將八千騎入信濃、放火武田氏屬城、十一月朔、進陣河、中島。

訓 村上義清、高梨政頼、須田親滿、島津規久等と、信濃より來り投じ、請うて謙信に謁し言つて曰く「僕等武田信玄の侵掠する所と爲り、身を容るるに地無し。側に公の威名を聞く。願はくば一たび手を下し救援するを賜へ」と。謙信曰く「諸君豈に人の下と爲る者ならんや。而るに來つて我に託す。是れ我を知れるなり。我れ今略ぼ内亂を定む。念ふに賀越は、吾が父の讐なり。常に此の二國を屠り、遂に幟を京畿に樹てんと欲す。是れ吾が素志のみ。然りと雖も、我を知る者に遇つて、爲めに力を出ださざるは丈夫にあらざるなり」と。因つて義清に問うて曰く「信玄、兵を用ふる如何」と。曰く「信玄軍を行る程頓を食らす。毎戦、勝を後に要す」と。謙信曰く「彼れ後勝を要するは、意、地を拓くに在り。吾は則ち然らず。敵に遇へば輒ち戦ひ、其の鋒を枉げざる

語釋 黄旗驪馬(黄色の驪馬) ○武田信繁(信玄の弟)

弘治元年四月、信玄攻降木曾義高、以女妻之。二年、信玄取伊奈郡。於是、盡定信濃、以高坂昌宣守貝津城、以備謙信。謙信爲武田氏強敵第一、諸將因榮昌宣也。

訓 弘治元年四月、信玄、木曾義高を攻め降し、女を以て之に妻はす。二年、信玄、伊奈郡を取。是に於て、盡く信濃を定め、高坂昌宣を以て貝津城を守らせ、以て謙信に備ふ。謙信は、武田氏の強敵第一たり。諸將因つて昌宣を榮とせり。

通釋 弘治元年四月、信玄は、木曾義高を攻めて降させ、自分の娘を妻に遣はした。二年、信玄は伊奈郡を取つた。そこで皆信濃を平定したので、高坂昌宣に貝津城を守らせ、謙信に備へることにした。謙信は武田氏の強敵の第一である。だから強敵に當るやうにして貰つた所の昌宣を皆は名譽あることとした。

語釋 弘治(後奈良天皇) ○伊奈(信)

三月、信玄謙信復對壘河中。信玄與山本晴行等謀曰、我分兵遠出、越後軍後、鼓譟逼之、而以本軍夾擊、必大得志。乃令信濃客將保科彈正等、以兵六千、夜度戸神山。時月黑、迷失道、不能達。謙信見甲斐軍夜襲、人馬有聲也、潛起、擐甲傳令、舉八千騎出、五鼓詣信玄牙營。會天大霧、謙信自霧中、直斫營而入。營驚潰、斬山本晴行等六

將^ヲ而^{シテ}天明^ク矣^ニ客將^ノ兵^ヲ達^ス上杉^氏營^ニ無^シ隻^騎顧^リ聞^ク河^中戰^聲如^ク雷^ノ則^チ還^リ渡^リ筑^摩河^ヲ出^ツ北^軍後^ニ甲^斐軍^ヲ望^見乃^チ返^リ夾^ミ擊^ス北^軍北^軍敗^走追^逼之^ニ犀^川北^軍輪^轉返^戦包^圍追^兵將^ヲ塵^ニ之^ヲ甲^斐後^軍橫^擊救^之北^軍乃^チ倒^隊而^退宇^佐美^定行^植幟^渡口^護之^盡濟^ス甲^斐兵^疲不^レ復^追擊^セ

訓讀 三月、信玄、謙信、復河中に對壘す。信玄、山本晴行等と謀つて曰く、「我れ兵を分ち、逸つて、越後の軍後に出で、鼓譟して之に逼り、而して本軍を以て夾み撃たば、必ず大に志を得ん」と。乃ち信濃の客將保科彈正等をして、兵六千を以て、夜、戸神山を度らしむ。時に月黒く、迷ひて道を失ひ、達すること能はず。謙信、甲斐の軍、夜覺ぎ、人馬聲あるを見るや、潜に起ち、甲を擧し、令を傳へ、八千騎を擧げて出で、五鼓、信玄の牙營に詣る。會天大に霧ふる。謙信、霧中より直に營を研つて入る。營驚き潰ゆ。山本晴行等の六將を斬る。而して天明く。客將の兵、上杉氏の營に達すれば、營に隻騎なし。顧みて河中の戰聲、雷の如きを聞いて、則ち還り、筑摩河を渡り、北軍の後に出づ。甲斐の軍望み見て、乃ち返り、北軍を夾撃す。北軍敗走す。追うて之に犀川に逼る。北軍、輪轉返戦し、追兵を包み、將に之を塵にせんとす。甲斐の後軍、橫撃して之を救ふ。北軍乃ち隊を倒にして退く。宇佐美定行、幟を渡口に植て、之を護り、盡く濟らしむ。甲斐の兵疲れて、復追撃せず。

通釋 弘治二年三月信玄と謙信とはまたく河中島で對陣すること、なつた。信玄は山本晴行等と相談して曰

ふのに「兵隊を分けて、別働隊を遣へ、グルリ越後の軍の背後へ出で、攻め太鼓、喊聲で譟き立て、敵に逼り、そして本隊は前方から進んで夾み撃ちにしたなら、必つと此方の思ふ處に箭るに違ひない」と。そこで信濃の客將の保科彈正等をして、兵六千人を引き連れ、夜、戸神山を渡らせた。丁度折悪しく曇天で月が雲に蔽はれ眞つ暗らだつた爲めに、道を迷うて目的地に行きつくことが出来ない。謙信は甲斐の軍で夜、飯を焚いたり、人馬の聲が騒がしく聞えて來るのを知つて、潜かに起きて鎧冑を身に纏ひ、命令を傳へ、八千騎全部を引き連れて出發し、夜明け方に信玄の本營に到つた。恰度此の朝は霧が大層下りて居つた。謙信は霧の中から、いきなり信玄の本營を斫り巻くり進み入つた。信玄の方では仰天してバタ／＼に潰えた。山本晴行等六人の隊將を斬り殺した。その内に夜が明けた。保科の兵は背部から上杉氏の兵營に到達したが兵營には一騎もあなかつた。振り向いて見て、河中島で合戦の聲が雷のやうに轟くの聞いたので、そこで引き返して筑摩河を渡り、越後の軍の後ろへ撃つて出た。甲斐の軍は遙かに此の有様を望み見てこれも引き返へし、越後勢を夾撃した。越後の軍は敗れ走つた。それを追つかけて犀川に押し詰めた。越後の軍は、グルリ其處から引き返へし戦ひ、敵の追兵を包圍して之を皆殺しにしようとした。甲斐の後詰めの軍隊が横さまに之を撃つて救ひ出した。そこで越後の軍は軍隊を逆に立て替へて退却した。宇佐美定行は幟を渡し口に押し立て、越後の軍勢が川を渡るのを保護し、皆無事に渡らしめた。甲斐の兵も疲勞して、もう追撃しようとしなかつた。

語釋 弘治(後奈良天皇)の年號。五鼓(五更。夜明けがた、午前四時。)(輪轉(車がへしの陣。車輪の廻轉するやうに廻ること。))倒隊(これまで後詰めであつたものを先陣となし、先陣だつたものを後詰すことに直すこと。)

八月、謙信復出河中、使村上義清等營舊戰處而自進過河、背水陣。信玄知其志在必死、不敢出戰。其候騎報曰、「北軍積薪如山。信玄令諸將曰、「敵中夜有火舉、慎勿進擊。」進擊者族及暮、候騎又報曰、「北軍掃營、荷擔將去。諸將爭請追擊。信玄曰、「謙信豈追暮掃營者。」擊之必敗。其夜北軍火起。甲斐軍不動。天明、望見北軍、疏行首嚴陣而待。諸將乃服信玄。信玄謀設伏兩山、閃挑戰、伴敗誘敵入山、閃射殲之。乃夜設伏、而明縱馬入北軍中、出輕卒追之。謙信不出。信玄慮兵老、有變、乘夜退入上野原。謙信舉軍追擊。信玄返戰、殺傷相當、交收兵歸。甲斐越後兵連不解、兩國士民患之、皆願講和。今川義元爲周旋之。謙信將有事於關東及越中。於是和成。

訓讀 八月、謙信、復河中に出で、村上義清等をして、舊の戦處に營せしめ、而して自ら進んで河を過ぎ、水を背にして陣す。信玄、其の志必死に在るを知り、敢て出で戦はず。其の候騎、報じて曰く「北軍、薪を積むこと山の如し」と。信玄、諸將に令して曰く「敵中、夜、火の擧るありとも、慎んで進撃すること勿れ。進撃する者は族せん」と。暮に及び、候騎、又報じて曰く「北軍、營を掃ひ、荷擔して將に去らんとす」と。諸將争ひて追撃せんと請ふ。信玄曰く「謙信、豈に暮に迫りて營を掃ふ者ならんや。之を撃たば必ず敗れん」と。其の夜

北軍火起る。甲斐の軍動かす。天明、北軍の行首を疏し、陣を嚴にして待つを望見す。諸將乃ち信玄に服す。信玄、伏を兩山の間に設け、戦を挑んで伴り敗れ、敵を誘うて山に入れ、閃射して之を殲さんと謀る。乃ち夜伏を設けて明に馬を縱つて北軍中に入れ、輕卒を出だして之を追ふ。謙信出でず。信玄、兵老れて變あるを慮り夜に乘じ、退いて上野原に入る。謙信、軍を擧げて追撃す。信玄返り戦ふ。殺傷相當る。交兵を收めて歸る。甲斐、越後の兵連りて解けず。兩國の士民、之を患へ、皆和を講せんことを願ふ。今川義元、爲めに之を周旋す。謙信、將に關東及び越中に事あらんとす。是に於て、和成る。

通釋 八月、謙信はまた河中島に出て来て、村上義清等をして、舊との戦場に陣取らせて、そして自分は進んで河を渡り、河を背にして陣取つた。(背水の陣である)信玄はこれを見て、上杉の志は必死の覺悟であることを知り、出で戦はうとしない。甲斐の斥候の騎兵が報告して曰ふのに「越後勢は薪を山のやうに積んで居ります」と。信玄は諸將に命じて曰ふのに「敵中で夜、火が擧がることがあつても、よく氣をつけて、迂つかり進撃してはならぬぞ。若しも言ふことを聽かず進撃する者があつたら、一族全部殺して終ふであらうぞ」と。暮れ方になつて、斥候の騎兵が又報告して曰ふのに「上杉の方では兵營を引き拂ひ、荷物を擔つて將に立ち去らうとしてあます」と。諸將は争つて追撃せんと願つた。信玄が曰ふのに「謙信ともあらう者が、どうして暮方になつて兵營を引き拂はうや。迂つかり之を撃たう者なら、必つと負かされるのであらう」と。果して其の晩上杉の方で火事が出た。所が甲斐の方ではピクとも動かぬ。夜が明けると、上杉の方で行手を取り拂ひ、陣を嚴重にして待つてゐるのを望見した。追撃しようものなら、ドエライ目に遇ふ所であつた。諸將は皆信玄の智慮に服した。そこで信玄は次のやうな計畫をした。それは伏兵を山と山との間に設けて置いて、戦争を仕掛けて負けた振りして

敵を山の中に誘ひき入れ、高い所から射ち降ろして敵を皆殺しにしよう。そこで夜伏兵を設けて、夜が明けると馬を放して、越後の軍中へ入らしめ、身軽の兵卒を出して此の馬を追驅けさせた。謙信もさる者、迂つかり其の手に乗らず、出て来なかつた。信玄は味方の兵が疲れて、何か變事でも起ると大變であると思ひ、夜の間に乗じ退いて上野原に入つた。謙信は軍を全部引き連れて追撃した。信玄は返り戦つた。殺傷の数は大體互角であつた。どちらも兵を収めて歸つて行つた。斯様に甲斐と越後の戦争は打ち續いて中々解けない。兩國の人民も之を患へ、何とかして和睦されたいものだと思つてゐた。今川義元は兩國の爲めに、間に入つて仲裁の勞を取つた。丁度謙信も關東と越中とに戦争事があらうとしてゐた。そこで折れ合つて、こゝに和議が成立した。

〔註〕行首（左傳成公十六年の字面。行は路の義。陣の前を）

永祿元年三月、謙信自將入越中。越中加賀將士交請降許之。先是、上杉憲政數與北條氏康戰、每戰輒敗。關東盡屬氏康。憲政欲請援於謙信。是歲秋、憲政走入越後、求見謙信。謂之曰、「吾管領八州、十二世於此。卒爲一氏康傾覆。求四鄰可報氏康者、獨有公與晴信。而晴信、氏康方親。吾是以捐怨以歸公。公能爲我復仇。謙信曰、「敢不竭力。當是時、謙信未得志於信濃。加賀越中亦未服。而許於憲政者、欲以掩爲景之惡也。乃築館北川以寘之。憲政與謙信約爲父子。謙信於是稱上杉氏。又授以

其職號。謙信辭曰、「事成受之、未晚也。於是會將士議使人諜北條氏。聞氏康每戰用奇、曰、「彼用奇、吾用正也。」十月、將兵入上野、陷厩橋沼田等五城。復平井據之。發使京師、告東伐事。且請攝家一人爲關東主、而已輔之。如北條氏故事。二年四月、再入京師、營于坂本。五月朔、詣闕。天子賜酒、侑以寶劍、名五虎。請前關白前嗣東下、見許。又謁將軍。命管領關東。比三管領許乘、茂、與、執、朱、柄、磨、賜己偏諱、改名輝虎。

〔訓〕永祿元年三月、謙信、自ら將として越中に入る。越中・加賀の將士、交降を請ふ。之を許す。是より先き、上杉憲政、數北條氏康と戦ひ、每戰輒ち敗れ、關東盡く氏康に屬す。憲政、援を謙信に請はんと欲す。是の歲秋、憲政走り、越後に入り、謙信を見ん事を求め、之に謂つて曰く、「吾れ八州を管領すること、此に十二世。卒に一の氏康に傾覆せらる。四鄰、氏康に報ず可き者を求むるに、獨り公と晴信と有るのみ。而れども晴信は、氏康方に親む。吾れ是を以て怨を捐て以て公に歸す。公能く我が爲めに仇を復せよ」と。謙信曰く、「敢て力を竭さざらんや」と。是の時に當り、謙信未だ志を信濃に得ず。加賀・越中も亦未だ服せず。而るに憲政に許すは、以て爲景の惡を掩はんと欲するなり。乃ち館を北川に築き以て之を寘く。憲政、謙信と約して父子と爲る。謙信是に於て上杉氏と稱す。又授くるに其の職號を以てす。謙信辭して曰く、「事成りて之を受くるも、未だ晚からざるなり」と。是に於て、將士を會して議し、人をして北條氏を諜せしむ。氏康、每戰奇を用ふると聞き、曰く「彼は奇を用ふ。吾は正を用ふるなり」と。十月、兵に將として上野に入り、厩橋・沼田等の五城を陥れ、平

井を復し之に據り、使を京師に發し、東伐の事を告げ、且つ攝家一人關東の主と爲し、而して己れ之を輔くる、北條氏の故事の如くせんと請はしむ。二年四月、再び京師に入り、坂本に營す。五月朔、關に詣る。天子酒を賜ひ侑むるに寶劍を以てし、五虎と名づく。前關白前嗣の東下を請ひ、許さる。又將軍に調す。命じて關東を管領せしめ、三管領に比し、蔑輿に乗じ朱柄の磨を執るを許し、己が偏諱を賜ひ、名を輝虎と改む。

永祿元年三月、謙信は自ら大將となつて、越中に入つた。越中・加賀の將士はかばるゝ降參を申し出た。一々之を許してやつた。これより前に、上杉憲政は度々北條氏康と戦ひ、いつも敗れて、關東は全部氏康に従つて終つた。憲政は援助を謙信に乞はうと思つた。そこで此の年の秋、憲政は走つて、越後に入り、謙信に面會を求めて、之に向つていふには「吾が家は關八州を管領すること、こゝに十二代の久しい間になる。とうとう一氏康の爲めに國を亡ぼされて終つた。四方隣國の諸侯で氏康に仕返しの出来る者を求めると、たゞ貴公と晴信(信玄)だけである。然るに晴信と氏康とは今親密な間柄である。吾はこれ迄の怨を打ちすて、貴公にお頼み申し度い。貴公何卒わが爲めに仇を返して下されよ」と。謙信は諾していふのに「力を竭さないで置きませうや、屹度力を盡します」と。この時、謙信は信濃ではどうも自分の思ふやうに行かなかつた。加賀・越中もまだ服従しなかつた。それなのに、憲政の頼みを請け合つたのは、上杉氏を助けて父、爲景の悪名を掩ひ匿さうが爲めであつた。そこで先づ北川に館を作つて、憲政を置いた。憲政は謙信と親子の約束をした。これから謙信は上杉氏を名乗ることとなつた。憲政は又關東管領の職號をも譲らうとした。謙信は辭していふのに「それは成功の後に頂戴しても遅くはありませぬ」と。そこで將士を集めて相談し、人を遣つて北條氏の様子をさぐらせた。氏康は戰爭には常に奇兵を用ふるといふことが分つて、謙信がいふのに「彼は奇兵を用ふる。されば余は反對に正を用ひよう」

と。十月、兵に將として上野に入り、厩橋・沼田等五城を陥れ、平井を取り戻し、之に立て籠り、使を京師に派遣して、東北條征伐のことを申し上げ、且つ攝政家の中の一人を關東へ迎へて、關東の主人となし、自分がそれを補佐すること、恰度北條氏の時の故例のやうにして戴きたいとお願ひ申させた。二年四月、再び京師に入り、坂本に陣取つた。五月朔日、御所に參内した。正親町天皇は、御酒を賜り、五虎と名づくる寶劍を引出物として賜つた。謙信は前の關白近衛前嗣の關東下向を乞ひ、之を關東の主と推戴し度いと願ひ出て許された。又將軍に拜謁した。關東を管領することを命ぜられ、室町の三管領と同じやうに並べられ(同様の待遇)網代の輿に乗り、朱ぬりの柄のついた采配を執ることを許され、又將軍自身の名(義輝)の一字を賜はり輝虎と改名した。

永祿(正親町天) 〇捐(怨) 〇爲景之惡(其の主房能を) 〇北川(後) 〇奇・正(奇は人の意表に皇の年號) 〇捐(怨) 〇爲景之惡(其の主房能を) 〇北川(後) 〇奇・正(奇は人の意表に皇の年號) 〇厩橋・沼田・平井(野上) 〇北條氏之故事(承久二年、北條義時が藤原頼經を迎へて鎌倉の主とした故事) 〇三管領(斯波・細川・畠山)

三年五月、謙信自將攻和田城。未下。遣長尾政景侵武藏。九月、前嗣來館于至德寺。於是、謙信發二萬騎、陣泉福寺。北條氏康大舉禦之。本莊繁長以所部爲先鋒、接戰相模軍卻。諸隊繼進。謙信以麾下自中路進、與氏康戰、大破之。關東豪傑響應、乃報捷。越後、迎憲政、居之厩橋、牙城、而自居其郭。四年正月、關東將士、賀正、厩橋遣兵攻古河、拔關宿、河越、諸城。三月、謙信部七十六將、兵凡十一萬、進入相模。太田三樂小

幡憲重等居前建牙于高麗山下。北條氏遣死士狙擊謙信。謙信覺捕之。縱還遂圍小田原。氏康不敢出。謙信脫胄穿白布幘。騎白馬。執朱柄麈。馳入諸隊。指揮軍事。關東將士竊指目語曰。此公視吾曹如蟲蟻。寧可終戴乎。

三年五月、謙信自ら將として、和田城を攻む。未だ下さず。長尾政景を遣はし、武藏を侵さしむ。九月、前嗣來り至德寺に館す。是に於て、謙信、二萬騎を發し、泉福寺に陣す。北條氏康、大舉して之を禦ぐ。本莊繁長、所部を以て先鋒と爲り、接戰す。相模の軍卻く、諸隊繼ぎ進む。謙信、麾下を以て中路より進み、氏康と戦ひ、大に之を破る。關東の豪傑響應す。乃ち捷を越後に報じ、憲政を迎へ、之を厩橋の牙城に居らしめ、而して自ら其の郭に居る。四年正月、關東の將士、正を厩橋に賀す。兵を遣はし古河を攻め、關宿・河越の諸城を拔く。三月、謙信、七十六將を部し、兵凡そ十一萬、進んで相模に入る。太田三樂・小幡憲重等、前に居り、牙を高麗山の下に建つ。北條氏、死士を遣はし、謙信を狙撃せしむ。謙信覺り、之を捕へ、縦ち還し、遂に小田原を圍む。氏康、敢て出でず。謙信、胄を脱し、白布の幘を穿ち、白馬に騎し、朱柄の麈を執り、馳せて諸隊に入り、軍事を指揮す。關東の將士竊に指目し語つて曰く「此の公、吾が曹を視る蟲蟻の如し。寧に終に戴く可けんや」と。

三年五月、謙信、自ら大將となつて、和田城を攻めた。まだ陥らなかつた。又長尾政景を遣つて、武藏を侵さしめた。九月、前嗣がやつて來て至德寺に宿つて居た。それで謙信は二萬騎を繰り出して、泉福寺に陣取つた。北條氏康は、大舉して之を防いだ。此の時本莊繁長は、その部下の兵をつれて先鋒となり接戰した。相模の軍勢は退却した。謙信の諸隊は繼いで進んだ。謙信は旗下をつれて、真中の路から進んだ。氏康と戰つて、大に之を破つた。そこで關東の豪傑は響が聲に應ずるやうに謙信に従つた。そこで勝利を越後の憲政に報告し、憲政を迎へて、之を厩橋の本丸に入れ、そして、自分は外城に居た。四年正月、關東の將士どもは厩橋に來て、年始の賀を申し述べた。又兵を派遣して、古河を攻め、關宿・河越の諸城を陥れた。三月、謙信は七十六將を手分けして、凡そ十一萬の兵をつれて、進んで相模に入った。太田三樂・小幡憲重等が先手となり、大將の旗をば高麗山下に押し建てた。北條氏は決死の士を遣はして謙信を狙ひ撃ちさせようとした。謙信は之を覺つて捕へたが、放免して還してやり、遂に小田原を取り圍んだ。氏康は決して城から出ようとしなかつた。謙信は胄をぬいで白木綿の頭巾を着け、白い馬に乗つて朱塗の柄の采配を執り、馳せて諸隊中に入り、軍事を指揮した。關東の將士どもも内密指さし見て言ひ合ふのに「この公は我々を視ること蟲蟻のやうで、ちつとも禮遇されぬ。これではいつまでも上に戴くことは出來まい」と。

和(田)信(濃) ○關(宿)下 ○高麗山(相模)

當是時、信玄在輕井澤。飯富兵部説曰。謙信威焰如此。北條氏必亡。則我亦危矣。君宜及小田原未陷、引兵出三増嶺、直當越後中軍。得勝大善。即不勝亦足以伸義。天下。信玄曰。不可。謙信用兵迅速、得之天資。而無老成之計。關東將士、必不能堪。終當歸氏康。汝暫待之。宇佐美定行説謙信曰。城堅。我深入久頓、恐有變。宜及今收兵。從之。新發田治長年少、爲近習。自請爲殿。氏康不敢尾擊。乃入鎌倉、詣鶴岡、祠觀源。

氏北條氏、舊圖、索故物小八葉車、載前嗣、而謙信騎從焉。關東將士擁衛前後、小幡
 憲村操刀從。千葉國胤、小山政朝、門閥最高、爭坐次不決、訴於謙信。謙信判曰、在八
 州之士、千葉氏可爲首、小山氏不可爲尾。二人不能爭、忍城主成田長泰、稱源賴義
 故事、立馬祠前以待。從士曳長泰、下馬拳之。長泰慚恚奔歸。諸將叛歸者相繼、謙信
 還至武藏府。長泰與北條氏兵、尾擊之。謙信令委棄輜重於道。敵爭取之。因蹂躪而
 過、入平井。四月、以憲政歸越後。

訓讀 是の時に當り、信玄、輕井澤に在り。飯富兵部説いて曰く「謙信、威焰此くの如し。北條氏必ず亡べ
 ば、則ち我も亦危し。君宜しく小田原未だ陥らざるに及び、兵を引いて三増嶺に出で、直に越後の中軍に當るべ
 し。勝を得ば大に善し。即し勝たざるも亦以て義を天下に伸ぶるに足らん」と。信玄曰く「不可なり。謙信兵を
 用ふる迅速、之を天資に得。而れども老成の計無し。關東の將士必ず堪ふる能はず。終に當に氏康に歸すべし。
 汝暫く之を待て」と。宇佐美定行、謙信に説いて曰く「城堅し。我れ深く入り久く頓らば、恐らくは變有らん。
 宜しく今に及び兵を收むべし」と。之に従ふ。新發田治長年少く、近習たり。自ら請ひ殿と爲る。氏康、敢て尾
 撃せず。乃ち鎌倉に入り、鶴岡の祠に詣り、源氏・北條氏の舊圖を觀、故物小八葉車を索め、前嗣を載せて謙信
 騎從す。關東の將士、前後を擁衛し、小幡憲村、刀を操りて從ふ。千葉國胤、小山政朝、門閥最も高し。坐次を爭

つて決せず。謙信に訴ふ。謙信判じて曰く「八州之士に在つては、千葉氏、首たるべく、小山氏、尾たるべから
 ず」と。二人爭ふ能はず。忍城主成田長泰、源賴義の故事と稱し、馬を祠前に立て以て待つ。從士長泰を曳き、
 馬より下し、之を拳つ。長泰慚恚し奔り歸る。諸將、叛き歸る者相繼ぐ。謙信還り、武藏府に至る。長泰、北條
 氏の兵と、之を尾撃す。謙信、輜重を道に委棄せしむ。敵争つて之を取る。因つて蹂躪して過ぎ、平井に入る。
 四月、憲政を以て越後に歸る。

通釋 この當時、信玄は輕井澤に居た。飯富兵部が之に説いていふのに「あんなに謙信の威勢は盛んでありま
 す。北條氏は屹度亡びませうが、さすれば此方も危くなります。主公は小田原の陥落しない内に兵を引きつれ、
 三増嶺に出でられ、直に越後の本隊に當られるが宜いと存じます。若し勝利を得れば此の上ないよい事でありま
 す。又もし勝たないにしても北條を救ふといふ信義を廣く天下に見せるに充分であります」と。信玄はいふのに
 「それは可しくない。謙信は兵を動かすことが實に早く、それは生れ付である。併し老練巧妙なる謀はない
 男だ。關東の將士等は必ず彼の部下たるに堪へ切れなくなる。結局、氏康に従ふやうになるであらう。暫く之を待
 つて居れ」と。一方宇佐美定行は謙信に説いて曰ふのに「この小田原城は堅固であります。我が軍が深く敵地に
 浸入して長い間留つて居ると、恐らくは變事が起るかも知れません。今の内に兵を取りまとめて引き揚げた方が
 宜しい」と。謙信は此の言葉に従つた。新發田治長は、年若く近習となつてゐた。自ら願うて殿を勤めた。氏
 康は決して追撃をしなかつた。そこで謙信は鎌倉に入り、鶴岡八幡宮に參詣し、源氏北條氏時代の舊跡を見物し、
 又昔から傳つてゐる小八葉車といふものをさがし求め、前嗣をその車に載せ、謙信は騎馬で從つた。關東の將士
 は前後を取り巻いて護衛し、小幡景村は刀を持つて從つた。千葉國胤と小山政朝の兩人は家柄が一番高かつた。

席順を争つて決まらなかつた。そこで之を謙信に訴へた。謙信は之を取り捌いていふのに「關八州の侍の中で千葉氏は首座であるべく、又小山氏は尻につく譯にも行くまい」と二人はもう争ふことも出来なかつた。忍の城主の成田長泰は源頼義の時の故例だといつて、馬を八幡の社前に立てて待ち受けてゐた。そこで謙信の従士は長泰を引き摺り下ろして拳骨でなぐり据ゑた。長泰は愧ぢ怒つて、走り歸つた。これから諸將の叛いて歸るものが續いで出た。謙信はそれから還つて、武藏の國府に着いた。その時長泰は北條氏の兵と一緒にたつて之を追撃した。謙信は、荷駄を道に棄てさせた。敵は争つて之を取り合つた。そこで踏みにちつて通り過ぎ、やがて、平井に入つた。四月、憲政を連れて越後に歸つた。

三増嶺(信) ○小八葉車(葉は囃の借字、八囃を紋所として、それが飾りとなつてゐる。) ○頼義之故事(長泰の祖は頼義の親族だつたからその頃の故事を用ひたので。) ○平井(野)

六月、關東諸將復附氏康來攻平井。謙信聞報即發潛軍由梭師谷出。比曉擊北條氏軍。待前軍戰半、自以牙兵旁出橫擊中堅、使別將遶出其背。氏康敗走。復白井、麻橋諸城而歸。謙信之攻小田原也、北條氏使使請信玄北侵。越後以牽其勢。信玄乃令高坂昌宣焚掠疆上。謙信大怒。

六月、關東の諸將、復氏康に付き、來り平井を攻む。謙信、報を聞き即ち發し、軍を潛め梭師谷由り出

づ。曉くる比、北條氏の軍を撃つ。前軍の戰半なるを待ち、自ら牙兵を以て、旁より出で、横に中堅を撃ち、別將をして遶つて其の背に出でしむ。氏康敗走す。白井・麻橋の諸城を復して歸る。謙信の小田原を攻むるや、北條氏、使をして信玄に請ひ、北のかた、越後を侵し、以て其の勢を牽せしむ。信玄乃ち高坂昌宣をして疆上を焚掠せしむ。謙信大に怒る。

通釋 六月、關東の諸將はまた氏康に従ひ、平井を攻めに來た。謙信はその報告を聞いて直に出發し、軍勢を忍ばせて梭師谷から撃つて出た。夜あけ方に北條氏の軍勢を撃つた。先陣の合戦の半になるのを待つて、自ら麾下の兵をつれて、傍から出で、北條の中軍を横合から撃ち、別將をしてぐるり其の後に廻らせた。氏康は敗れ走つた。かくて謙信は、白井・麻橋の諸城を取り戻して還つて來た。謙信が小田原を攻めた時、北條氏は使を立て、信玄に請ひ、北の方越後を侵して敵を引きつけるやうにさせた。そこで信玄は貝津の高坂昌宣をして國境近くの民家を焚かせ物を略奪させた。謙信は非常に怒つた。

詰釋 白井(野)

四年八月、復出信濃、壘于西條山。堰水爲池、以備貝津敵。信玄與義信將二萬騎來陣。雨宮渡以絶其歸路。越後將士說曰：「利在速戰。」謙信不肯。居三日、信玄收兵入貝津。以瞰謙信。謙信自若也。信玄謀曰：「謙信蓋待吾變、不動其軍也。吾伏兵河中、而別軍自貝津直往攻西條。則謙信無勝敗、必引兵北歸。而吾承敵慶戰、謙信可擒也。」

越後謀者報曰「甲斐軍出貝津南行矣。」謙信召諸將問計。直江實綱曰「彼國內有變。故乘夜引去耳。當邀擊之。」宇佐美定行齋藤朝信曰「不然。彼蓋爲二軍。欲及吾踰河夾擊之也。」語未畢。謀者又報曰「甲斐軍渡廣瀨上河中陣矣。」謙信謂二人曰「如汝言。吾將出其意外也。」

四年八月、復信濃に出でて、西條山に壘す。水を堰いて池と爲し、以て貝津の敵に備ふ。信玄、義信と二萬騎を將ゐて、來つて雨宮渡に陣し、以て其の歸路を絶つ。越後の將士、説いて曰く「利は速戰に在り」と。謙信肯ぜず。居ること三日、信玄兵を收めて、貝津に入り、以て謙信の歸るを敵ふ。謙信、自若たり。信玄謀りて曰く「謙信、蓋し吾が變を待ち、其の軍を動かさざるなり。吾れ兵を河中に伏せ、而して別軍は貝津より直に往いて西條を攻めば、則ち謙信、勝敗となく、必ず兵を引いて北歸せん。而して吾れ敵を承けて鏖戦せば、謙信擒にす可きなり」と。越後の謀者報じて曰く「甲斐の軍、貝津を出でて南行せり」と。謙信、諸將を召して計を問ふ。直江實綱曰く「彼れ國內に變あり。故に夜に乗じて引き去るのみ。當に之を邀へ撃つべし」と。宇佐美定行・齋藤朝信曰く「然らず。彼れ蓋し二軍と爲り、吾が河を踰ゆるに及んで、之を夾撃せんと欲するなり」と。語未だ畢らざるに、謀者又報じて曰く「甲斐の軍、廣瀨を渡り、河中に上りて陣す」と。謙信、二人に謂つて曰く「汝の言の如し。吾れ將に其の意外に出でんとす」と。

條山に城壘を拵へた。水を堰き止めて池を作り、貝津の敵に備へた。信玄は長男の義信と二萬騎を將ゐて、雨宮渡に陣取り、謙信の歸路を絶ち切つた。越後の大將や侍は説いて曰ふのに「速く戦つた方が當方の利益です」と。併し謙信は承知しなかつた。それから三日経つて、信玄は兵を纏めて貝津に入り、謙信が歸るのを伺ひ待つてゐた所が謙信は一向に顧着せぬ。信玄は謀つて曰ふのに「謙信は思ふに我が軍中に異變の起るのを待つてゐて、それであの様に軍隊を動かさずにあるのだ。此方は兵を河中島に隠して置いて、別動隊が貝津からいきなり西條山へ攻めて行けば、謙信は屹度、勝ち負けに拘らず、兵を引き擧げて北に歸ることだらう。然うして置いて、此方は敵の痛んだ後を承けて必死に戦つたなら、謙信を擒にすることが出来るだらう」と。一方越後の廻し者が謙信に報告して曰ふのに「甲斐の軍が貝津に出て南方へ進軍を始めました」と。謙信は諸將を召し寄せて計略を問ねた。直江實綱が曰ふに「彼れ信玄の方には、屹度國內に異變が起つたのでありませう。だから夜に乗じて退却するのでせう。彼を邀へ撃つたら宜しう御座いませう」と。宇佐美定行・齋藤朝信が曰ふのに「イヤ然うでは無い。思ふに彼れは軍隊を二つにして、吾々を誘き寄せ、吾が軍が河を踰え渡るのを待つて、吾が軍を夾み撃ちにしようといふ算段だらう」と。其の語がまだ終らぬ内に、廻し者が又報告していふに「甲斐の軍が廣瀨を渡つて、河中島に上り、其處に陣取りました」と。謙信は宇佐美・齋藤の兩人に向つて曰ふに「其の方等の申した通ぢや。ヨシ敵に不意を喰はせてやらう」と。

西條山(謙信) ○承敵(潰れた所をう) ○廣瀨(謙信)

乃置疑兵山上、而全軍啣枚縛馬舌、涉雨宮渡。遇武田氏、斥騎十七人、盡斬之。進壓

信玄軍而陣、使本莊繁長・色部長實等將二千騎陣筑摩河岸。甲斐別軍已向西條山。信玄疾報至曉、曉未辨人色。見謙信牙旗在前、將士皆失色。越後軍鼓而進、聲震地。信玄不暇易其陣、以弓銃力拒。謙信常憾向斫信玄而不遂也。欲必決死、自抽牙兵、前逼信玄麾下。麾下潰亂、赴犀川。荒川伊豆逼擊信玄。信玄脫走。謙信追之。義信以二千騎尾謙信、後甘糟景茂等擊走義信。

訓 乃ち疑兵を山上に置き、而して全軍、枚を啣み馬舌を縛し、雨宮渡を渉る。武田氏の斥騎十七人に遇ひ、盡く之を斬る。進んで信玄の軍を壓して陣し、本莊繁長・色部長實等をして、二千騎を將ゐて、筑摩河の岸に陣せしむ。甲斐の別軍、已向西條山に向ふ。信玄、報を疾ちて曉に至る。曉未だ人色を辨せず。謙信の牙旗、前に在るを見て、將士皆色を失ふ。越後の軍、鼓して進み、聲、地を震ふ。信玄其の陣を易ふるに暇あらず、弓銃を以て力め拒ぐ。謙信、常に向に信玄を斫つて遂げざりしを憾み、必ず死を決せんと欲し、自ら牙兵を抽いて、前んで信玄の麾下に逼る。麾下潰亂して、犀川に赴く。荒川伊豆、逼りて信玄を撃つ。信玄脱れ走る。謙信、之を追ふ。義信、二千騎を以て、謙信の後を尾す。甘糟景茂等、撃つて義信を走らす。

通 そこで謙信は疑兵を西條山に置いて、全軍枚を口に啣へ、馬の舌を縛り、靜かに雨宮渡を徒ち渡つた。武田氏の斥候の騎兵十七名に遭遇して、皆斬り殺した。それから進んで信玄の軍にゾツと近寄つて陣取り、本莊

繁長、色部長實等をして二千騎を率ゐて筑摩河の岸に陣取らしめた。甲斐の別働隊は既に西條山に向つた。信玄はその方からの通知を俟つて曉方になつた。まだ夜の引き明け時で人の顔色も充分見分けがつかぬ。ヒョイト見ると、謙信の將旗が早や眼の前にあるではないか、甲斐の將士は皆驚いて色を失つた。越後の軍では太鼓を鳴らして進み、其の聲は地を震ひ動かす程であつた。信玄は陣形を立て替へる暇もなく、弓や鐵砲で懸命に拒いだ。謙信は前に信玄を討ち漏らした事を、常に残念に思つてゐたので、今度こそは勝負を決めようと思ひ、麾下の兵を引きつれ、前出して信玄の旗下へ逼つた。信玄の旗下の兵は潰え亂れて犀川の方へ赴いた。荒川伊豆は信玄に逼り、撃つてかゝつた。信玄は脱れ逃げた。謙信は之を追つかけた。信玄の長子義信は二千騎を引き連れて、謙信の後を尾けた。甘糟景茂等は撃つて義信を走らせた。

抽 (ひきぬき連) 引れること

謙信既克、休止傳餐。義信又以殘兵返襲敗之、斬越後將志田義時以下數十人。謙信執槍親闘。本莊繁長等來援、復擊走義信。或說「貝津敵夜出乘我疲。」宜急收兵。謙信不肯、背犀川陣。次善光寺三日。遣使信玄欲再決戰。甲斐將士又有請焉者。信玄皆弗聽。

訓 謙信既に克ち、休止して餐を傳ふ。義信又殘兵を以て返り襲ひて、之を敗り、越後の將志田義時以下數十人を斬る。謙信槍を執りて親ら闘ふ。本莊繁長等來り援け、復撃つて義信を走らす。或人説く「貝津の敵、夜

出でて我が疲れたるに乗ぜん。宜しく急に兵を收むべし」と。謙信肯せず。犀川を背にして陣し、善光寺に次ずること三日。使を信玄に遣はして、再び決戦せんと欲す。甲斐の將士、又請ふ者あり。信玄皆聽かず。

通釋 謙信は既に勝つたので休息して辨當を使つてゐた。そこへまた義信が殘兵を連れて逆襲し來り、越後の將士志田義時以下數十人を斬つた。謙信は自ら槍を執つて鬪つた。本莊繁長等が援けに來り、また義信を撃つて走らせた。或人が謙信に説いて曰ふのに「貝津の敵が夜出て、此方の疲れた所に附け込んで來ることせう。急に兵を纏めて退却なされた方が宜しいでせう」と。謙信は聽き入れなかつた。犀川を背にして陣取り、かくて善光寺に止宿すること三日に及んだ。そこで使者を信玄に遣はし、もう一度決戦しようと思つた。又甲斐の將士の内にも決戦し度いと請ふ者もあつた。併し信玄は一切聽き入れなかつた。

傳發 辨當をつか

五年三月、北條氏康請信玄、合兵攻松山。松山、太田三樂屬城也。三樂與長尾謙忠、在廐橋。令上杉憲政、庶子憲勝守之。告急於謙信。甲斐卒將甘利氏臣、有米倉丹後者。東竹爲楯、以扞銃丸。諸隊倣之。遂陷松山。降憲勝。而謙信方至廐橋。問三樂曰、「松山何如。」曰、「陷矣。」謙信大怒、瞋目按刀而踞曰、「汝以怯夫守城、使吾不及事。是辱我武也。吾寧與汝死。」三樂懼伏、不知所出。乃上松山糧仗籍、及憲勝質子二人。謙信左手

掉二人髮、而右手斬之。收刀復問曰、「敵軍幾何。」曰、「五萬人。」將帥誰某。曰、「信玄、義信、氏康、氏政。」謙信笑曰、「與吾敵者二人而已。如氏政、義信、吾直以刀背一擊足矣。抑近地有敵城、可攻乎。」曰、「私市城距此十里許。」謙信曰、「可攻也。」即親將赴攻。

通釋 五年三月、北條氏康、信玄に請ひ、兵を合せ松山を攻む。松山は、太田三樂の屬城なり。三樂、長尾謙忠と廐橋に在り。上杉憲政の庶子憲勝をして之を守らしめ、急を謙信に告ぐ。甲斐の卒將甘利氏の臣に米倉丹後といふ者あり。竹を束ねて楯と爲し、以て銃丸を扞ぐ。諸隊、之に倣ふ。遂に松山を陥れ、憲勝を降す。而して謙信、方に廐橋に至り、三樂に問うて曰く「松山は何如」と。曰く「陥る」と。謙信、大に怒り、目を瞋らし刀を按じ、踞いて曰く「汝、怯夫を以て城を守らせ、吾をして事に及ばざらしむ。是れ我が武を辱むるなり。吾れ寧ろ汝と死せん」と。三樂懼伏し、出づる所を知らず。乃ち松山の糧仗籍、及び憲勝の質子二人を上る。謙信、左手に二人の髮を掉んで、右手に之を斬り、刀を收め復問うて曰く「敵軍幾何ぞ」と。曰く「五萬人」と。將帥誰某ぞ」と。曰く「信玄、義信、氏康、氏政」と。謙信笑つて曰く「吾れと敵する者は二人のみ。氏政、義信の如きは、吾れ直に刀背を以て一撃して足れり。抑、近地、敵城の攻む可き有るか」と。曰く「私市城、此を距る十里許り」と。謙信曰く「攻む可きなり」と。即ち親ら將として赴き攻む。

通釋 五年三月、北條氏康は信玄に頼んで兵を合せて松山を攻めた。松山は太田三樂の持城である。三樂は長尾謙忠と廐橋に居つた。上杉憲政の側腹の子の憲勝に、この松山城を守らせてゐたが、攻められてゐると聞いて

急を謙信に告げた。甲斐の大將甘利氏の家來に米倉丹後といふものがあつた。その男が竹を束ねて楯となし、鐵砲の彈丸を拒いだ。諸隊は皆之に見習つた。遂に松山を攻め落し、憲勝を降参させた。謙信は丁度其の時厩橋に來て、三樂に問うて曰ふのに「松山はどうしたか」と。三樂は「落城しました」と答へた。謙信は大に怒り、目をむいて、刀に手をかけ膝をついていふのに「其の方は臆病者に城を守らせた爲めに吾をして戦の間に合はぬ様にして終つた。これは我が武威を汚すことゝなつた。吾は一層のこと其の方共と死なう」と。三樂は恐れ入り、どうしてよいやら分らなかつた。そこで松山城の兵糧武器の控への帳面と憲勝の人質二人とを差し出した。謙信は左の手に人質二人の髪の毛をつかみ、右の手で斬り落し、刀を鞘に收めて、再び問うていふのに「敵の軍勢はどれ位だ」と。「五萬人あります」と答へた。「大將は誰だ」と謙信が問うた。答へていふのに「信玄・義信・氏康・氏政の四人で御座います」と。謙信は笑つていふのに「吾の敵になるものは信玄・氏康の二人だけである。氏政・義信のやうな連中は刀のみねでうちすれば十分だ。それはさて置きこの近所に攻むべき敵の城があるか」と。三樂は答へて曰ふのに「私市城といふ城がこゝから十里ばかりの所にあります」と。謙信がいふのに「それはいゝから攻めよう」と。即座に自ら大將となつて起き攻めた。

糧仗籍(兵糧・武器の) ○私市(武)

三樂從之、綴舟濟刀根川。既濟、毀舟過信玄、氏康軍前。遣使言曰、「二公攻松山、而僕不及援。僕深愧之。不敢徒歸。今往攻私市。」二公幸見要、不答。乃傳城四面齊登、一晝

夜拔之、斬城將小田朝眞、虜三千人。以志田春義代守還。遣使二氏、軍曰、「僕拔城而還。猶可以一戰。二公豈有意乎。」甲斐軍鼓譟、謙信免胄下馬徐行而還。至厩橋、召長尾謙忠曰、「三樂從我。汝何不從。」拔刀斬謙忠、屠其衆二千。使北莊丹後代守。然後歸。氏康謂信玄曰、「公何以不戰。」曰、「吾與公敵一謙信、雖勝可愧也。」信玄從容與氏康語。因問之曰、「河越之戰、公以一軍克兩上杉氏。願得聞其詳。」氏康曰、「公在焉。僕何敢言。」信玄固請曰、「欲使兒聞之。」氏康乃談其戰略。信玄稱善。還至其營、謂馬場信房曰、「氏康手段、吾得之矣。」

訓讀 三樂之に従ひ、舟を綴り刀根川を濟る。既に濟り舟を毀ち、信玄・氏康の軍前を過ぎ、使を遣はし言つて曰く「二公、松山を攻む。而るに僕援くるに及ばず。僕深く之を愧づ。敢て徒に歸らず。今往いて私市を攻む。二公、幸に要せられよ」と。答へず。乃ち城に傳き、四面より齊しく登り、一晝夜にして之を抜き、城將小田朝眞を斬り、三千人を虜にし、志田春義を以て代り守らせ還り、使を二氏の軍に遣はして曰く「僕城を抜いて還る。猶ほ以て一戦す可し。二公豈に意有らんや」と。甲斐の軍鼓譟す。謙信胄を免き馬より下り、徐行して還り、厩橋に至り、長尾謙忠を召して曰く「三樂我に従へり。汝何ぞ従はざる」と。刀を抜き謙忠を斬り、其の衆二千を虜り、北莊丹後をして代り守らしめ、然る後に歸る。氏康、信玄に謂つて曰く「公、何を以て戦はざる」

と。曰く「吾れ公と、一謙信を敵とせば、勝つと雖も、愧づ可きなり」と。信玄、從容として氏康と語る。因つて之に問うて曰く「河越の戦、公、一軍を以て兩上杉氏に克つ。願はくは其の詳を聞くを得ん」と。氏康曰く「公在り、僕、何を敢て言はん」と。信玄固く請うて曰く「兒をして之を聞かしめんと欲す」と。氏康乃ち其の戦略を談る、信玄善しと稱す。還り其の營に至り、馬場信房に謂つて曰く「氏康の手段、吾れ之を得たり」と。

三樂も之に従ひ、舟をつなぎ合せて、刀根川を渡つた。渡り切つて終ふとその舟をこわし（返らぬ決死の意氣込みを示す）信玄・氏康の陣屋の前を過ぎ、使を立て、言はせるのに「御兩所には松山を攻められたるや。拙者は援けるのに間に合はなかつた。深く之を愧ぢてゐる。このまゝオメ／＼歸らうとは思はぬ。今から出かけて私市を攻める。御兩所には何卒遮り撃つて見られよ」と。これに對して返答しなかつた。そこで謙信は城につき四面から一齊に上り、一晝夜で之を攻め落し、城將小田朝眞を斬り、三千人を皆殺にし、志田春義に代つて守らせ、還つてから又もう一度使を、武田・北條の軍に遣つて曰ふのに「拙者は今城を陥れて還る所だ。またもう一合戦は出来る。御兩所如何で御座る」と。甲斐の軍勢は大鼓を鳴らして噪ぎ立てた。（攻める氣勢を見せた）。謙信はわざと背をぬぎ、馬から下り、しづ／＼と落ちついて歩いて還り、厩橋に着き、長尾謙忠を召していふのに「三樂は吾に従つた。其の方はなぜ従はなかつた」と。刀を抜いて謙忠を斬り、その部下の衆二千人を皆殺にし、北莊丹後をして、代り守らせ、それから國に歸つて行つた。氏康は信玄に向つて曰ふのに「貴公は何故合戦しなかつたのですか」と。信玄が對へていふのに「吾と貴公の兩人で、一人の謙信に敵するのだから、勝つても二人が、りでは人前愧づべきことだ」と。この時信玄從容として、氏康と語つた。そこで尋ねていふには「河越の戦で貴公は一軍で兩上杉氏に勝たれた。何卒その詳しい事を承りたい」と。氏康がいふのに「貴公があら

れるのに、何とて御話が出来よう」と。信玄は固く請うていふのに「倅に後學の爲めに聽かせて置きたいと思ふのだ」と。そこで氏康はその戦略を話した。信玄は「立派だ」といつた。還つて陣營に入り、馬場信房に向つていふには「氏康の手段は皆分つた」と。

六年、信玄出兵上野、取蓑輪・松枝諸城。又略飛驒、降其豪族江間常陸。而白谷氏納款於謙信。謙信於是與信玄分領飛驒。謙信自將入越中、拔松倉・小出、獲嘗殺爲景者江波氏、合其族十六人、盡誅之。梟首梅檀野、祭爲景。是歲謙信入上野、取伊勢崎。四月、入下總、攻臼井、與北條氏援軍戰、走之。先是、常陸小田氏治屬謙信。已而歸款北條氏。謙信怒、七年正月朔、冒雪發越後、入常陸、攻陷小田城。二月、攻佐野・昌綱於上野。五月、北條氏康來援、逆擊走之、降昌綱。會足利氏使者來、傳敕旨諭上杉・武田・北條三家講和息兵。

六年、信玄、兵を上野に出だし、蓑輪、松枝の諸城を取る。又飛驒を略し、其の豪族江間常陸を降す。而して白谷氏、款を謙信に納る。謙信、是に於て、信玄と飛驒を分ち領す。謙信自ら將として越中に入り、松倉・小出を抜き、嘗て爲景を殺せし者江波氏を獲、其の族十六人を合せ、盡く之を誅し、首を梅檀野に梟し、爲景

に祭告す。是の歳、謙信、上野に入り、伊勢崎を取る。四月、下總に入り、白井を攻め、北條氏の援軍と戦ひ、之を走らす。是より先き、常陸の小田氏治、謙信に屬す。已にして款を北條氏に歸す。謙信怒り、七年正月朔、雪を冒し越後を發し、常陸に入り、攻めて小田城を陥る。二月、佐野昌綱を上野に攻む。五月、北條氏康來り援く。逆へ撃ち之を走らせ、昌綱を降す。會、足利氏の使者來り、敕旨を傳へ、上杉・武田・北條の三家に諭し、和を講じ兵を息めしむ。

通釋 六年、信玄は兵を上野に出して、養輪・松枝の諸城を攻め取つた。又飛驒を取り、其處の豪傑江間常陸を降した。所が白谷氏は謙信に味方した。そこで謙信は信玄と飛驒を分けて領有することゝつた。謙信は自ら大將となつて越中に入り、松倉・小出を攻め落し、嘗て爲景を殺した江波氏を生擒にし、その一族十六人を合せ全部之を殺し、首を梅檀野で獄門にかけ、お祭をして、爲景に告げた。この年、謙信は上野に入つて、伊勢崎を取つた。四月、下總に入り、白井を攻め北條氏の援軍と戦ひ、之を走らせた。これより以前、常陸の小田氏治は謙信に屬して居た。その内に北條氏に味方した。謙信は怒つて、七年正月元日、雪を冒して越後を出發し、常陸に入り、小田城を攻め落した。二月、佐野昌綱を上野に攻めた。五月、北條氏康が援けに來た、迎へ撃つて之を走らせ、昌綱を降参させた。丁度そこへ足利氏の使者が來て、天皇の詔を傳へ、上杉・武田・北條の三氏に諭して、和睦して戦を止めさせられた。

語釋 養輪(城將は安中景繁) ○松枝(城將は安中春綱)

八月、謙信自巡視信濃、境上。信玄亦出對營。兩家諸將交、說其君曰、君以四郡故、與

強敵構兵十二年。多喪士卒、祇爲四鄰之幸、無爲也。二人然之、乃約各選一力人、使闘、勝者取河中。上杉氏力士闘勝。信玄乃獨取貝津一城、其餘盡屬謙信。謙信乃復村上義清・高梨政頼等、按其故邑。

訓讀 八月、謙信自ら信濃の境上を巡視す。信玄も亦出で營を對す。兩家の諸將、交其の君に説いて曰く、「君、四郡の故を以て、強敵と兵を構ふること十二年。多く士卒を喪ひ、祇、隣の幸となる。爲す無かれ」と。二人、之を然りとし、乃ち各一力人を選び闘はしめ、勝つ者河中を取らんと約す。上杉氏の力士闘ひ勝つ。信玄乃ち獨り貝津一城を取り、其餘は盡く謙信に屬す。謙信乃ち村上義清・高梨政頼等を復して、其の故邑を按ぜしむ。

通釋 八月、謙信は自ら信濃の國境を巡回し視察した。信玄も亦出て來て對陣した。上杉・武田兩家の諸大將は、かはるゝ其の君に説いていふには「君は四ヶ郡の爲めに強敵と兵を結ぶこと十二年にも及ばれました。多くの士卒を失ひ、却つて四方隣國の幸となるだけで無益な事ですからお止しになつた方が宜しい」と。信玄・謙信も之を然うだと思ひそこで各力士一人を選んで闘はしめ、勝つた方が河中島四郡を取ること約束した。上杉方の力士が闘ひ勝つた。そこで信玄は貝津の一城を取つて、その外は皆謙信のものにした。そこで謙信は村上義清・高梨政頼等を元のやうにしてその舊領に據らせた。

語釋 四郡(河中)

謙信築精舍于春日山、號不識庵、盡牌將士殉難者、自弔祭之。先是、謙信使長尾政景守上田、備信玄已而忌之。有告其謀叛者、乃召諸親信密議、誅之。宇佐美定行諫曰、政景叛狀未著、誅之恐招騷擾。上田要害、折入武田氏、君又負殺姊夫之名、謙信不聽。使定行圖之。定行乃歸其邑野尻、招政景觀漁湖中、以漏船迎載、捉政景同溺。宣言私憾相殺、因没入定行邑、而陰祿其子、收養政景子景勝。令鐵安朝代守上田。

訓 謙信、精舍を春日山に築き、不識庵と號し、盡く將士の難に殉ぜし者を牌し、自ら之を弔祭す。是より先き、謙信、長尾政景をして、上田を守り信玄に備へしむ。已にして之を忌む。其の謀叛を告ぐる者あり。乃ち諸の親信を召し、密に之を誅せんと議す。宇佐美定行諫めて曰く「政景の叛狀未が著れず。之を誅せば恐らくは騷擾を招かん。上田の要害、折れて武田氏に入り、君又姉の夫を殺すの名を負はん」と。謙信聽かず。定行をして之を圖らしむ。定行乃ち其の邑の野尻に歸り、政景を招き、漁を湖中に觀、漏船を以て、迎へ載せ、政景を捉へ同じく溺る。私憾もて相殺すと宣言す。因つて定行の邑を没入す。而して陰に其の子に祿し、政景の子景勝を收養す。鐵安朝をして、代り上田を守らしむ。

通釋 謙信は寺を春日山に建立し、不識庵と號し、國家の難に討死した將士の位牌を全部作り、自分で追善供養をした。これより以前に謙信は長尾政景をして上田を守つて信玄に備へしめた。その後政景を忌み嫌ふやうになつた。すると政景が謀叛したと告げる者があつた。そこで諸の腹心の家來を召して、ひそかに之を殺さうと相談した。宇佐美定行は之を諫めていふのに「政景の謀叛の様子もまだしつかりしません。之を殺せば恐らくは騷動を巻き起しませう。上田の要害な所が折れて、武田氏の領分になり、君は其の上に姉婿を殺したといふ惡名を受けられることではありません」と。謙信は聽き入れなかつた。却つて諫めた定行をして、之を殺すやうに謀らしめた。そこで定行はその領分の野尻に歸つて、政景を呼び寄せ、野尻湖で獵を見物し、水の漏れる舟に政景を迎へませ、政景をつかまへて一緒に水に溺れて死んだ。謙信は兩人は何か私の遺恨で相討をしたのであらうと言ひふらした。そこで表向き定行の領地を取り上げた。そして内々其の子に地行を與へ又政景の子の景勝を召し入れて養育した。鐵安朝に、代つて上田を守らせた。

野尻 (信越の境)

河中島之役、謙信爲武田義信所襲、敗。曰「吾乃輸小兒。本莊繁長、長尾藤景、有救援之功。又竊笑之。謙信惡之、誅藤景。繁長自危、叛據其邑。遣兵討之。作距堙圍守、數年而降。義信勇敢善戰、將士歸心。信玄忌之、恐其倣己也。勝賴以庶子、陰有奪嫡之志。乃與飯富兵部之弟昌景謀、使人誣告義信、教兵部就軍陣。圖信玄。昌景證之。信玄囚義信、盡誅其親信。賜兵部死。屬其部兵於昌景。改氏山縣。終令義信自殺。歸義信妻於駿河。今川氏始惡於武田氏。武田氏既不慮上杉氏、而其兵西出矣。

訓讀 河中島の役に、謙信、武田義信の襲ひ取る所と爲る。曰く「吾れ乃ち小兒に輸す」と。本莊繁長・長尾藤景、救援の功あり。又竊に之を笑ふ。謙信、之を惡み、藤景を誅す。繁長自ら危み、叛き、其の邑に據る。兵を遣はし之を討たしむ。距塚を作り圍み守り、數年にして降る。義信、勇敢にして善く戦ひ、將士、心を歸す。信玄、之を忌む。其の己に倣ふを恐るるなり。勝頼、庶子を以て、陰に嫡を奪ふの志あり。乃ち飯富兵部の弟昌景と謀り、人をして、義信、兵部をして軍陣に就き、信玄を圖らしむと誣告せしむ。昌景、之を證す。信玄、義信を囚へ、盡く其の親信を誅し、兵部に死を賜ひ、其の部兵を昌景に屬せしめ、氏を山縣と改む。終に義信をして自殺せしめ、義信の妻を駿河に歸す。今川氏、始めて武田氏に惡し。武田氏既に上杉氏を慮らずして、其の兵、西に出づ。

通釋 川中島の戦で謙信は武田義信に不意に襲ひ破られたことがある。そこで「余は小供に負けて終つた」と言つてゐた。本莊繁長・長尾藤景は、その時救助して手柄を立てた。又内々謙信の負けたのを笑つて居た。謙信、之を惡み、先づ藤景を殺した。繁長も自分で危なく思ひ、その領地に立て籠つて叛いた。そこで兵を遣はして之を討たしめた。謙信方は土手を作つて城を取り巻き、之を守ること數年にして、降参させた。義信は勇氣果敢で、上手に戦ひ、將士も心を歸して居た。信玄は之を忌み憎んでゐた。義信が自分に倣つて父を逐ひ出すのではないかと恐れてゐた。勝頼は側腹の子でありながら家督を奪ひ取る考があつた。そこで飯富兵部の弟昌景と相談し、人をして義信は、兵部に命じて軍中、陣屋の中で信玄を殺させようとしたと無實のことを言ひ立てさせた。昌景はそれを證言した。信玄は義信を囚へ、その腹心の者どもを皆誅し、兵部に切腹をさせ兵部手下の兵は昌景に從屬させ昌景の苗字を山縣と改めさせた。とうとう謙信にも切腹させ義信の妻は駿河の今川氏に送り還した。

今川氏はこれから始めて武田氏と不仲になつた。武田氏は、上杉氏と和睦したので、もう悉かり其の方は心配しないので其の兵を西の方に出すことになつた。

語釋 距塚(城の外へ築いて、敵を攻める) 隈防(をいふ)

初信玄謙信共欲伸武於中原而兵結不解未暇及焉謙信之再入京師也三好長慶權勢方熾家臣松永久秀專政其吏徒途遇謙信不禮謙信命從士斬之因密啓將軍義輝請除長慶久秀義輝雖不能決心倚賴之久秀等聞之頗懼八年義輝密使使召謙信久秀等大懼欲及其未來行大事遂弑義輝義輝弟義昭逃走近江

訓讀 初め信玄・謙信、共に武を中原に伸べんと欲す。而して兵、結んで解けず、未だ及ぶに暇あらず。謙信の再び京師に入るや、三好長慶、權勢、方に熾にして、家臣松永久秀、政を專にす。其の吏徒、途に謙信に遇ひ禮せず。謙信從士に命じて之を斬らしむ。因つて密に將軍義輝に啓し、長慶、久秀を除かんと請ふ。義輝、決する能はずと雖も、心は之に倚賴す。久秀等、之を聞き頗る懼る。八年、義輝、密に使をして謙信を召さしむ。久秀等、大に懼れ、其の未だ來らざるに及び、大事を行はんと欲し、遂に義輝を弑す。義輝の弟義昭、逃れて近江に走る。

通釋 はじめ、信玄も謙信もともに自己の武威を畿内に張らうと思つてゐた。互に戦争し合つて解けなかつたのでそこまで手を出す暇はなかつた。謙信が二度目に京都に入つた時、三好長慶の羽振りが丁度盛んな時で、そ

の家來の松永久秀が政治を専らにしてゐた。松永の下役人どもは途中で謙信に出遇つても禮をしなかつた。謙信は供の士に命じて之を斬殺せしめた。それを機會に内々將軍義輝に申し立て、長慶・久秀の二人を除き度いと請うた。義輝は此の時之を決斷し兼ねたけれども心の中では謙信を頼みに思ふやうになつた。久秀等は之を聞いて隨分と懼れた。八年、義輝は内々使者を出して、謙信を召さしめた。久秀等は非常に懼れ謙信が來ない内に大事を決行しようと思ひ、遂に義輝を弑した。義輝の弟の義昭は逃げて近江に走つた。

九年、以書來、託謙信、以興復議、不輒成。義昭遂依織田信長於美濃。信長擁義昭入京師、遂略定近畿、頓致強大。顧恐謙信、信玄議其後。又自知非二人敵也、乃傾意結信玄、以控謙信、使幣相踵於甲斐。信玄知其意、動輒敗約、欲西其兵。信長患之、乃送其季子勝長爲質、以女妻勝賴。生信勝、及義信死、立信勝爲嫡嗣。而勝賴護之。信勝母死、信長又請爲其子信忠、娶信玄女。信玄與織田氏婚、遂與今川氏絶。

九年、書を以て來り、謙信に託するに、興復を以てす。議輒成らず。義昭、遂に織田信長に美濃に依る。信長、義昭を擁し、京師に入り、遂に近畿を略定し、頓に強大を致す。顧みて、謙信・信玄其の後を議するを恐る。又自ら二人の敵に非ざるを知るや、乃ち意を傾け信玄に結び、以て謙信を控す。使幣、甲斐に相踵ぐ。信玄其の意を知り、動もすれば輒ち約を敗り、其の兵を西せんと欲す。信長、之を患ひ、乃ち其の季子勝長を送り

質と爲し、女を以て勝賴に妻はす。信勝を生む。義信、死するに及び、信勝を立てて嫡嗣と爲す。而して勝賴之を護る。信勝の母死す。信長、又其の子信忠の爲めに信玄の女を娶らんと請ふ。信玄、織田氏と婚し、遂に今川氏と絶つ。

九年、義昭は書面で謙信に將軍家の再興をして貰ひ度いと頼み込んだ。容易に相談が纏らなかつた。義昭は遂に織田信長に美濃にたよつた。信長は義昭を擁して京都に入りそれから近畿を平定し、急に強大となつた。併し顧みて謙信・信玄が其の後を窺ふのを恐れた。且つ自分は、とても二人の者には叶はぬといふことを知つてゐたので、心を傾けて信玄に結びつき、謙信を牽制してゐた。使者や贈物が甲斐に向つて相續いて絶えない程であつた。信玄は信長の心中を知つてゐたので兎角約束を破つて、その兵を西に出さうと思つた。そこで信長は之に困つて、その末の子の勝長を送つて人質となし、又娘を勝賴に妻はせた。その娘は信勝を生んだ。義信が死んでからは信勝を立て、跡目とした。そして勝賴が之を守り立てゝゐた。その内に、信勝の母が死んだ。織田家と縁が薄くなつたので、信長はその子信忠の爲めに信玄の女を娶り度いと申出た。信玄は織田氏と婚姻を結び遂に今川氏と絶交することゝなつた。

先是、今川義元與信長戰敗死。其子氏真暗弱、任嬖臣三浦義鎮。國人不服。我德川公嘗屬今川氏。亦去屬織田氏。兵力日強。是時、信虎猶在流寓、信濃使人言於信玄曰、駿河亂、將爲德川氏所有。汝宜先取之。信玄不答。信玄國不濱海、仰鹽於東海。氏

眞與北條氏康謀、陰閉其鹽。甲斐大困。謙信聞之、寄書信玄曰、「聞氏康氏眞困、君以鹽不勇不義。我與公爭、所爭在弓箭不在米鹽。請自今以往、取鹽於我國。多寡唯命、乃命賈人平價給之。」

訓讀 是より先き、今川義元、信長と戦ひ敗死す。其の子氏眞、暗弱にして、嬖臣三浦義鎮に任ず。國人、服せず。我が徳川公、嘗て今川氏に屬す。亦去つて織田氏に屬し、兵力、日に強し。是の時、信虎猶ほ在りて、信濃に流寓す。人をして信玄に言はしめて曰く、「駿河亂る。將に徳川氏の有する所と爲らんとす。汝宜しく先づ之を取るべし」と。信玄答へず。信玄の國、海に濱せず。鹽を東海に仰ぐ。氏眞、北條氏康と謀り、陰に其の鹽を閉づ。甲斐、大に困む。謙信、之を聞き、書を信玄に寄せて曰く、「聞く、氏康・氏眞、君を困むるに鹽を以てすと。不勇不義なり。我れ公と争へども、争ふ所は弓箭に在つて、米鹽に在らず。請ふ、今より以往、鹽を我が國に取れ。多寡は唯命のま」と。乃ち賈人に命じ、價を平にし之を給せしむ。

通釋 これより以前、今川義元は信長と戦つて敗れて死んだ。その子の氏眞は智暗く、怯弱で、氣に入りの三浦義鎮に萬事を打ち任せてゐた。従つて國人は心服しなかつた。わが徳川公家康は嘗て、今川氏に屬して居た。これも亦去つて織田氏に屬して、兵力は日に日に強くなつて來た。當時、信虎はまだ生存してゐて、信濃に流れ留まつてゐた。人をして、信玄にいはしめていふには「駿河が亂れてゐる。將に徳川氏の所有とならうとして居る。お前は先じて之を取つたら宜からう」と。信玄は返答しなかつた。信玄の國は海に接してゐなかつた。鹽を東海道から供給して貰つて居た。氏眞は北條氏康と相談して内々其の鹽の支給の道を閉ぢて送らせぬ様にした。甲斐では大に困つた。謙信は之を聞いて書面を信玄に送つていふには「聞けば、氏康・氏眞が鹽で君を困しめてゐるさうだ。實に不勇不義である。余は貴公と争つてゐるが、争ふところは、弓箭の上になつて米や鹽ではない。今後は鹽を我が國からお取りなさい。多い少いは、お言ひつけ次第にてどの様にも便宜を計らう」と。そこで商人に命じて、價を公平にして鹽を支給した。

信玄使問者伺駿河、曰、「可取也。陰招國人、約爲内應。十一年十二月、引兵南入駿河、軍八幡坂。氏眞舉兵拒清見寺。軍潰、走歸府中。遂走掛川。信玄欲隨攻之、而慮氏康來救。乃止。軍府中。取諸降附任子、送致甲斐。聞庵原某嘗與山本晴行交、召問要地、可城者。以久能及興津答。乃城之。氏康果以兵來、爭駿河。以復氏眞爲名。信玄留兵守府中、而自軍興津。氏康軍薩陞山、相持未戰。信玄曰、「氏康數與兩上杉戰、用兵遲緩、易與也。因飲將士酒、問曰、「猶寒乎。曰、「寒。信玄曰、「我陣平地、飲酒而猶寒。彼陣山上、寒可知矣。必下在其麓也。令人伺其陣。陣果無人。乃奪其糧、仗返。後數挑戰、不決。至四月、信玄問計諸將。馬場信房曰、「臣嘗見啄木啄蟲、欲出蟲於前、先啄其後。信

玄默然曰「然」夜收軍歸。氏眞遂走相模。三浦義鎮爲德川氏所誅。

訓讀 信玄、間者をして駿河を伺はしめて、曰く「取る可きなり」と。陰に國人を招き、約して内應を爲さしむ。十一年十二月、兵を引き南のかた駿河に入り、八幡坂に軍す。氏眞、兵を擧げ清見寺に拒ぐ。軍潰え、走つて府中に歸り、遂に掛川に走る。信玄隨つて之を攻めんと欲す。而して氏康の來り救はんことを慮り、乃ち軍を府中に止む。諸の降附の任子を取り、甲斐に送致す。庵原某、嘗て山本晴行と交ると聞き、召して要地の城く可きものを問ふ。久能及び興津を以て答ふ。乃ち之に城く。氏康、果して大兵を以て來り、駿河を爭ふ。氏眞を復するを以て名と爲す。信玄、兵を留め府中を守らしめ、而して自ら興津に軍す。氏康、薩陞山に軍す。相持して未だ戰はず。信玄曰く「氏康、數兩上杉と戰ふ。兵を用ふることを遲緩、與し易きなり」と。因つて將士に酒を飲ましめ、問うて曰く「猶ほ寒きか」と。曰く「寒し」と。信玄曰く「我れ平地に陣し、酒を飲むも猶ほ寒し。彼れ山上に陣し、寒きこと知る可し。必ず下り其の麓に在らん」と。人をして其の陣を伺はしむ。陣果して人なし。乃ち其の糧仗を奪つて返る。後數戰を挑めども、決せず。四月に至る。信玄、計を諸將に問ふ。馬場信房曰く「臣嘗て啄木の蟲を啄むを見るに、蟲を前に出たさんと欲すれば、先づ其の後を啄む」と。信玄、默然たり。曰く「然り」と。夜、兵を收めて歸る。氏眞、遂に相模に走る。三浦義鎮、德川氏の誅する所と爲る。

に走つた。信玄はその後をつけて、之を攻めようと思つた。併し氏康が援けに來はせぬかと心配して、そのまゝ軍を府中に止めた。多勢の降参し、從つた者の人質を取つて、甲斐に送り届けた。庵原某は前に山本晴行と交はり、兵學に精しい男と聞いたので呼び出して城を築くべき要害の處を尋ねた。久能と興津とが宜いと答へた。そこで其處に城を築いた。すると案の定氏康は大軍を率ゐて、やつて來て駿河を取らうと争つた。そして氏眞を元々通りにすることを言ひ立てた。信玄、兵を留めて、府中を守らせて置き、そして自分は興津に陣取つた。氏康は薩陞山に陣取つた。睨み合つてまだ戰爭にならなかつた。信玄がいふのに「氏康は、度々兩上杉と戰つた。そのやり方は兵を動かすことが誠に緩やかであつて、相手にし易い」と。そこで將士に酒を飲ませていふには「まだ寒いか」と。すると「まだ寒い」と答へた。信玄がいふのに「我々は平地に陣取つてゐて、酒を飲んでもまだ寒いのだ。彼等は山の上に陣して居るから寒いことは分り切つてゐる。その内にきつと、山から下りて來て麓に陣取るだらう」と。人をやつて北條氏の陣屋を伺はせた。案の定陣中には人はゐなかつた。その兵糧武器を奪つて還つて來た。後度々戰を挑んで見たが、勝負が決まらないで四月になつた。信玄は計略を諸將に尋ねた。馬場信房がいふのに「私は以前啄木鳥が蟲を啄むのを見ましたが、蟲を前へ出さうと思ふと先づ其の後の方をつまみす」と。信玄は默つて暫らく考へて居た。そして、いふには「その通りだ」と。夜、軍を繼めて歸國した。氏眞は遂に相模に走つた。氏眞の嬖臣の三浦義鎮は德川氏に誅せられた。

清見寺(駿河) ○掛川・久能・興津(遠江) ○任子(人質) ○收軍歸(これ即ち啄木の)

十二年六月、信玄出駿河、遂入伊豆、軍鳴島。會大雨、流潦侵陣、引返。於是、氏康兵專

防西面、在小田原者甚寡。信玄謀知、攻之。高坂昌宣諫曰、「彼已懲謙信、講戰守、必悉。君深入之、一有蹉跌、前功悉廢。而謙信將乘其後、不聽。」九月、下兵八王子、攻敵城邑。不下者、過而南、入小田原。縱火城下。十月、引返、遇北條氏二萬兵、三增嶺。召諸將、命內藤昌豐、掌輜重。昌豐辭。信玄曰、「前謙信、唯失輜重、故敗於小田原。是重職也。」設八伏、及兵交、夾擊破之。歸謂昌宣曰、「何如。」昌宣曰、「是僥倖耳。」信玄嘉其忠、相模兵、成駿河者、聞難、棄守返救。信玄瞰之。

訓讀 十二年六月、信玄、駿河に出で、遂に伊豆に入り、鳴島に軍す。會大に雨ふり、流潦、陣を侵し、引き返る。是に於て氏康の兵、専ら西面を防ぎ、小田原に在る者甚だ寡し。信玄、謀知し、之を攻めんと議す。高坂昌宣諫めて曰く、「彼れ已に謙信に懲る。戰守を講ずる必ず悉さん。君深く之に入り、一たび蹉跌するあらば、前功悉く廢せん。而して謙信、將に其の後に乘せんとす」と。聽かず。九月、兵を八王子に下し、敵の城邑の下らざるものを攻め、過ぎて南し、小田原に入り、火を城下に縱つ。十月、引き返し、北條氏二萬の兵に三増嶺に遇ふ。諸將を召し、内藤昌豐に命じ、輜重を掌らしむ。昌豐、辭す。信玄曰く、「前に謙信、唯輜重を失ひ、故に小田原に敗る。是れ重職なり」と。八伏を設け、兵交るに及び、夾み撃つて之を破る。歸り昌宣に謂つて曰く、「何如」と。昌宣曰く、「是れ僥倖のみ」と。信玄、其の忠諫を嘉す。相模の兵の駿河を成るもの、難を聞き守を棄て返り救ふ。信玄、之を瞰ふ。

通釋 十二月、信玄は駿河に出で、遂に伊豆に入り、鳴島に陣取つた。丁度大雨が降つて、雨水が陣中に流れ込んだので、引きかへした。かくて氏康の兵は専ら西の方面ばかり防いでゐて、小田原に居るものは至つて手薄であつた。信玄はそれを忍びの者によつて知り、小田原城を攻めようと相談した。高坂昌宣が諫めていふのに「北條氏はこれまでに謙信に攻められたので懲りてゐます。戰守の策をなすことに於てはきつと出来るだけのことをしてゐるでせう。それを主公が深く入り込まれ、一度失くちるやうなことでありますと、これまでのお手柄は全部駄目になつて終ふでせう。そして謙信は後の方から付け込まうとしてゐますからお止しになつた方が宜しいでせう」と。信玄は聞き入れなかつた。九月、兵を八王子に遣り、北條氏の城邑で降参しない者を攻め、そこを通り越して南して、小田原に攻め込み、城下に火をかけた。十月、引きかへして、北條氏の兵二萬と三増嶺で出遇つた。そこで諸將を召し、内藤昌豐に命じて荷駄の係りを掌らせた。昌豐はそれを辭退した。信玄がいふのに「前に謙信は荷駄を失つたから小田原で敗つたのである。これは重要な役目だ」と。やはり昌豐に命じた。伏兵を八個所に拵へ、合戦になつてから、その伏兵が出て來て、夾み討にして敵を敗つた。國に歸つてから昌宣に向つていふには「お前は勝てないやうに申したが勝つたではないか」と。昌宣がいふのに「これは僥倖で勝つたのです」と。信玄は昌宣の忠義で直言するのをよろこんだ。相模の兵で駿河を守つて居た連中が、小田原の急を聞いて、自分の持ち場を棄て、返り援つた。信玄は之を伺ひ知つた。

語釋 流潦(水のたまつてゐるのが潦。)

十一月、急出駿河、拔九城。獨蒲原不下。信玄宣言赴府中、伏兵城傍山中、而西敵空城追之。伏起、取城、遂陷府中及諸城。與德川氏割大井河爲界。織田信長以書來請曰、「松平家康、僕所最眷顧者、公幸指教之家康、介弟在今川氏。公宜取以爲質。關東北陸諸國、皆使使賀戰捷。於是信玄國傳南海、謙信國傳北海、以橫絕海內。北條氏在其東、織田氏在其西。織田氏求援於信玄、北條氏求援於謙信、而謙信未之肯也。」

訓讀 十一月、急に駿河に出で、九城を抜く。獨り蒲原下らず。信玄、府中に赴くと宣言し、兵を城傍の山中に伏せ西す。敵、城を空しくして之を追ふ。伏起り城を取り、遂に府中及び諸城を陥れ、徳川氏と、大井河を割き界と爲す。織田信長、書を以て來り請うて曰く、「松平家康は、僕の最も眷顧する所の者、公、幸に之を指教せよ。家康の介弟、今川氏に在り。公、宜しく取り以て質と爲すべし」と。關東・北陸の諸國、皆使をして戰捷を賀せしむ。是に於て、信玄の國は南海に傳き、謙信の國は北海に傳き、以て海内を横絶す。北條氏は其の東に在り。織田氏は其の西に在り。織田氏は援を信玄に求め、北條氏は援を謙信に求む。而して謙信は未だ之を肯んぜざるなり。

通釋 十一月、信玄は遂に駿河に出で、九ヶ城を陥れた。たゞ蒲原だけが落ちなかつた。信玄は府中へ向ふのだと言ひふらして置き、兵を城の近くの山の中に匿して置いて西へ向つた。敵は城を空にして之を追つかけた。

すると、伏兵忽ち起つて城を取り、遂に府中及び其の他の城を陥れ、徳川氏と協定して大井川をば領地の界目となした。織田信長が書面で來り請うていふには「松平家康は私が最も目をかけて居るものでありますから、貴公にも何卒よき様に教へてやつて下さい。家康の弟は今川氏に居ります。貴公は、之を取つて人質となされたら宜しいでせう」と。關東北陸の諸國は皆使者をよこして信玄の勝利を賀せしめた。かくて信玄の領地は南海に至り、謙信の領地は北海に至り、この二家で日本を東西に絶ち切つた形となつた。北條氏はその東に居り、織田氏はその西に居た。織田氏は援助を信玄に求め、北條氏は援を謙信に求めた。そして謙信の方はまだ、しつかり之を承諾する所まで行かなかつた。

是歲春、謙信攻陷武藏下野諸城。秋、入越中、攻神保長純。會畠山義則不能治其下、能登亂遣上杉義春治之。立義則子義隆而還。當是時、謙信連略加賀、越中、而時出關東。兵行神速、敵不能測。每懸軍橫行八州。八州諸城聞其來、震懼不敢出。聞其還上三國嶺、然後相告解嚴。如雷雨過者。

訓讀 是の歳の春、謙信、武藏・下野の諸城を攻陥す。秋、越中に入り、神保長純を攻む。會畠山義則、其の下を治むる能はずして、能登亂る。上杉義春を遣はし、之を治めしむ。義則の子義隆を立て、還る。是の時に當り、謙信、連に加賀・越中を略し、而して時に關東に出づ。兵の行くこと神速にして、敵、測ること能はず。毎に軍を懸け八州を橫行す。八州の諸城、其の來るを聞き、震懼して敢て出でず。其の還り三國嶺に上ると聞き、

然る後に相告げて敵を解く。雷雨の過ぐるもの如し。

通釋 この年、春、謙信は武藏下野の諸城を攻め落した。秋、越中に入り、神保長純を攻めた。丁度其の時畠山義則がその手下を治めることが出来ないで、能登が亂れてゐた。謙信は上杉義春を遣はして之を治めしめた。義則の子義隆を立て、還つて来た。この當時謙信はしきりに加賀越中を攻め取り、而して時々關東に打つて出た。その兵の行動は實に迅速で、敵は之を測り知ることが出来なかつた。常に後につづく兵がなくともかまはず遠征して、八州を横行した。八州の諸城は謙信が来たと聞くと身を震はせて恐れ、城から出なかつた。謙信が還つて、三國峠に上つたと聞くと初めてホツとして相告げて備を解くといつた有様であつた。丁度雷雨でも通り過ぎるといつた様なものであつた。

語釋 三國嶺(上野・越後・信濃に跨る。)

元龜元年、佐野昌綱、族據飯盛城、與昌綱鬪。北條氏政以四萬騎助攻之。昌綱告急於謙信。正月、謙信即發晝夜兼行。聞氏政將分其兵當己、而急攻拔城也。謂諸將曰、「饒令我戰勝氏政、而不救城陷無益。吾當獨身入城堅守。汝等推義春爲將繼進。」乃獨與八十騎過氏政陣前而入城。謙信穿黑綿衣、不被鎧。提十字槍騎行。敵軍指目曰、「謙信也。」而大驚、不敢遮擊。諸將尋至北條氏軍潰走。謙信遂屠飯盛、徇下野下總。

入厩橋。北條氏康聞氏政敗、將二萬騎出援。陣河越相持三月、使使請和。質其季子三郎。謙信與諸將議聽之、會見于富田大中寺。携三郎歸、授其故名曰景虎。四月、氏康入駿河、攻深澤。不下。又請謙信出兵上野。信濃間、以糜信玄。信玄自將出拒。交綏而退。

訓讀 元龜元年、佐野昌綱の族、飯盛城に據りて、昌綱と鬪ふ。北條氏政、四萬騎を以て、之を助け攻む。昌綱、急を謙信に告ぐ。正月、謙信即ち發し、晝夜兼行す。氏政、將に其の兵を分ち己に當らしめ、急に攻めて城を抜かんとするを聞くや、諸將に謂つて曰く、「饒令、我れ戰つて氏政に勝つも、而も城の陷るを救はずば益なからん。吾れ當に獨身、城に入り堅く守るべし。汝等、義春を推し將と爲し、繼ぎ進めよ」と。乃ち獨り八十騎と、氏政の陣前を過ぎて城に入る。謙信、黑綿衣を穿ち、鎧を被ず。十字槍を提げ騎行す。敵軍指目して曰く、「謙信なり」と。而して大に驚き、敢て遮り撃たず。諸將尋いで至る。北條氏の軍潰え走る。謙信、遂に飯盛を屠り、下野・下總を徇へ、厩橋に入る。北條氏康、氏政の敗を聞き、二萬騎に將として出で援く。河越に陣し相持す。三月、使をして和を請はしめ、其の季子三郎を質とす。謙信、諸將と議し、之を聽し、富田の大中寺に會見し、三郎を携へ歸り、其の故名を授け景虎と曰ふ。四月、氏康、駿河に入り、深澤を攻む。下らず。又謙信に請ひ、兵を上野・信濃の間に出だし、以て信玄を糜す。信玄自ら將として出で拒ぐ。交綏して退く。

通釋

元龜元年、佐野昌綱の一族の者が、飯盛城に立てこもつて、昌綱と鬪つた。北條氏政は四萬騎を率ゐて

一族の者を助けた。昌綱は急を謙信に告げた。正月、謙信は早速出發し、夜を日に繼いで進軍した。謙信は、氏政が其の兵を分けて自分に當らしめ、そして急に昌綱の城を陥れようとして居ると聞いたので、諸將に向つていふのに「たとひ、余が戰爭して氏政に勝つたとしても、城の陥るのを助けなかつたら何にもならない。余は、一人で城中に入つて、堅く守るであらう。汝等は義春を推して大將となし、後から繼ぎ進めよ」と。そこで獨りで八十騎を率ゐて氏政の陣の前を通過して城中に入り込んだ。その時、謙信は、黒木綿の着物を着て別に鎧を着てゐなかつた。十文字の槍を提げて馬に乗つて行つた。敵軍は指し見ていふのに「あれは謙信だ」と。そして非常に驚いて遮り撃たうとしなかつたのである。やがて諸軍は繼いで到着した。北條氏の軍は潰え走つた。謙信遂に飯盛城を攻め落し、下野・下總を降伏せしめ、厩橋に入つた。北條氏康が氏政の敗れたのを聞いて、二萬騎を率ゐて出で、援けた。河越に陣取り、睨み合つてゐた。三月、使をして和を請はしめ、その末子の三郎を人質として提供した。謙信は諸將と相談して之を許し、富田の大中寺で會見し、三郎をつれて歸り、自分の名を三郎に授け與へて、景虎といつた。四月、氏康は駿河に入つて、深澤を攻めた。陥らなかつた。又謙信に頼んで上野・信濃の間に兵を出して信玄を牽制した。信玄は自ら大將となつて出で、之を拒いだ。その内に相引になつて退いた。

飯盛城(信濃) ○(際(撃)ぐ。)

十一月、徳川氏、質子遁去。於是信玄與徳川氏絶。而織田氏、聘問益厚。時氏康病卒。氏政請和、信玄將士皆說「勿許。乘喪擊之、盡取其地。雖謙信不能支也。」信玄曰「吾夙欲出兵東海、竝海而西、建旗鼓于京師。則吾雖死不憾矣。前有醫人診我脈、謂當罹篤疾。吾經營關東、而中道疾作、志不可成也。信長乘吾輩不西、以家康當我西面、而陰助之。其計可憎。我欲與氏政和、西治信長。十二月、遂納氏政質、使逐氏真。氏真走、倚徳川氏。時信長與義昭相隙、義昭以書諭信玄、謙信來圖之。」

十一月、徳川氏の質子遁れ去る。是に於て、信玄、徳川氏と絶つ。而して織田氏の聘問益厚し。時に氏康病みて卒す。氏政、和を信玄に請ふ。將士皆説く「許す勿れ。喪に乗じて之を撃ち、盡く其の地を取らば、謙信と雖も支ふる能はじ」と。信玄曰く「吾れ夙に兵を東海に出し、海に並びて西し、旗鼓を京師に建てんと欲す。則ち吾れ死すと雖も、憾みず。前に醫人あつて、我が脈を診し、謂へらく、當に篤疾に罹るべしと。吾れ關東を經營して、中道にして疾作らば、志成るべからざるなり。信長、吾が輩の西せざるに乘じ、家康を以て我が西面に當らしめ、陰に之を助く。其の計憎むべし。我れ氏政と和し、西信長を治めんと欲す」と。十二月、遂に氏政の質を納れ、氏真を逐はしむ。氏真走り、徳川氏に倚る。時に信長、義昭と相隙す。義昭、書を以て、信玄・謙信に諭し、來つて之を圖らしむ。

十一月、徳川氏の人質が遁げ去つた。そこで信玄は、徳川氏と絶つた。而して織田氏の音問を通ずることとは以前に増して一層に鄭重であつた。時に氏康は病んで死んだ。氏政は和を信玄に申し入れた。將士は皆説くのに「許してはなりません。喪につけ込んで撃ち、皆その地を取れば謙信とても支へることは出来ませぬ」と。

信玄がいふのに「余は前から兵を東海道に繰り出し、海に沿って西上し、旗鼓を京都に押し建てたいと思つてゐる。それが出来れば余は死んでも残念に思はない。先達て醫者が我が脈を見て、重病に罹るだらうと申した。余が今、關東を經略して途中で病氣でも起つたら、自分の志は成就することは出来ない。信長は、吾が輩が西上しないのに付け込んで、家康を以て我が西方面に當らせ置き、内々之を助けて居る。その計略は随分悪むべきものだ。だから余は氏政と和睦して、西方、信長を始末しようと思ふのだ」と。十二月、遂に氏政の人質を受取り氏真を逐はしめた。氏真は走つて徳川氏に倚つた。時に信長は、義昭と不仲であつた。義昭は書面で信玄・謙信に諭して、京都に来て、信長を圖らせようとした。

義昭(將軍) 利義昭

二年二月、信玄引兵東出、至遠江、攻高天神城。四月、入三河、陷八城。徳川氏出援、觀甲斐陣嚴整、不可犯、不敢接戰。信長聞義昭招謙信、信玄懼、甚乃益媚事信玄、以書謝曰「家康密邇貴國、恐有違失、僕當訓督之。幸勿見尤。」信玄答曰「老夫不知也。」徳川氏發兩使、通好於謙信、載誓書、請夾擊信玄。村上義清、子國清寓越後、力贊成之。三年四月、謙信將萬人出信濃、縱火長沼、以遙爲徳川氏聲援。勝頼在伊奈、聞警、以兵八百赴拒。謙信曰「彼敢以寡兵當我、不愧信玄兒。吾成其勇也。」引兵而還、入

越中、夷、椎名、神保氏。

二年二月、信玄、兵を引きて東に出で、遠江に至り、高天神城を攻む。四月、三河に入り、八城を陥る。徳川氏出で援く。甲斐の陣の嚴整にして犯すべからざるを觀、敢て接戦せず。信長、義昭の、謙信・信玄を招くと聞き、懼るること甚し。乃ち益、信玄に媚事し、書を以て謝して曰く「家康貴國に密邇す。恐らくは遺失あらん。僕當に之を訓督すべし。幸に尤めらる、勿れ」と。信玄答へて曰く「老夫知らざるなり」と。徳川氏兩使を發し、好を謙信に通じ、誓書を載せ、信玄を夾み撃たんと請ふ。村上義清の子國清、越後に寓す。力めて之を贊成す。三年四月、謙信、萬人に將として信濃に出で、火を長沼に縱ち、以て遙に徳川氏の聲援を爲す。勝頼、伊奈に在り、警を聞き、兵八百を以て赴き拒ぐ。謙信曰く「彼れ敢て寡兵を以て我に當る。信玄の兒に愧ぢず。吾れ其の勇を成さしめん」と。兵を引いて還り、越中に入り、椎名・神保氏を夷ぐ。

二年二月、信玄は兵を率ゐて、東に出で、遠江に至り、高天神城を攻めた。四月、三河に入り、八ヶ城を陥れた。徳川氏は出で、援けた。甲州勢の陣形がいかにも嚴重で整つてゐて、到底攻め込むことの出来ないのを見て、接戦しようとしなかつた。信長は、義昭が謙信・信玄を招いてゐると聞いて非常に恐れた。そこで益々信玄の機嫌を取り、書面を以て信玄に謝していふのに「家康は貴國に接近してゐます。恐らくは過失もありましたでせう。私がよく教へ正してやませう。何卒お咎めにならぬようお願ひ致します」と。信玄は返事やつていふのに「拙者は徳川のことなら一切知り申さぬ」と。徳川氏は使者二名を出して、好を謙信に通じ、誓書を差し出し、信玄を夾み討たうと願ひ出た。村上義清の子國清は越後に寄寓して居た。つとめて、之を贊成した。三年四月、謙信は一萬人の大將となつて信濃に出で、火を長沼につけ、はるかに徳川氏の加勢をした。勝頼

は伊奈に居つて、非常の知らせを聞き、兵八百をつれて拒ぎに出かけた。謙信がいふのに「彼は敢て少い兵で以て我に當つて来た。さすがに信玄の子たるに愧ぢない。余は彼の勇名を成し遂げさせてやらう」と。兵を引いて還り、越中に入り、権名・神保の二氏を攻め平げた。

語釋 載誓書(誓書を送る意。載) ○伊奈(謙信)

十月、信玄計謙信阻雪不能出、則復出遠江、拔二股城。信長潛遣兵援德川氏。十二月、信玄進陣三形原、以薄濱松城、縱火城下、挑戰。城兵不出。信玄佯退、城兵大出。上原能登謂小山田昌行曰、「德川氏之陣單、織田氏之旗動、可敗也。」昌行以告信玄。信玄乃返旆。昌行與勝頼及山縣昌景、馬場信房、爲先鋒。昌行、昌景先合而卻。勝頼、信房承之、衝其麾下。信玄乃遣米倉丹後、自間道橫擊、大破之。諸將請遂攻濱松。高坂昌宣曰、「不可。我攻之、二旬不拔、信長必大舉來援。相持數月、而謙信出、信濃則我不得返救。信長則曰、我能卻武田氏矣。是損威名也。」信玄乃退。次刑部。是役、獲織田氏將平手汎秀、送其首於信長。讓而絕之。信長猶分疏不已。

訓讀 十月、信玄、謙信の雪に阻てられ出づる能はざるを計り、則ち復遠江に出で、二股城を抜く。信長、潛

に兵を遣はし、德川氏を援く。十二月、信玄、進んで三形原に陣し、以て濱松城に薄り、火を城下に縱ち、戦を挑む。城兵出でず。信玄佯り退く。城兵、大に出づ。上原能登、小山田昌行に謂つて曰く、「德川氏の陣は單なり。織田氏の旗動く。敗るべきなり」と。昌行以て信玄に告ぐ。信玄乃ち旆を返す。昌行、勝頼及び山縣昌景・馬場信房と先鋒となる。昌行・昌景、先づ合して卻く。勝頼・信房、之を承け、其の麾下を衝く。信玄乃ち米倉丹後を遣はし、間道より横撃せしめ、大に之を破る。諸將、遂に濱松を攻めんと請ふ。高坂昌宣曰く、「不可なり。我れ之を攻むること二旬にして抜けずば、信長必ず大舉して來り援けん。相持すること數月にして、謙信、信濃に出でば、則ち我れ返り救はざるを得じ。信長則ち曰はん、我れ能く武田氏を卻くと。是れ威名を損するなり」と。信玄乃ち退き、刑部に次す。是の役に、織田氏の將平手汎秀を獲、其の首を信長に送り、讓めて之を絶つ。信長猶ほ分疏して已まず。

十月、信玄は謙信が雪に邪魔されて出て來ることが出来ないことを計り知り、再び遠江に出で、二股城を陥れた。信長は内々兵を遣はして、德川氏を助けた。十二月、信玄は、進んで三形原に陣し、濱松城に迫り城下に火をつけ、戦を仕かけた。城兵は出て來なかつた。信玄はわざと退却した。すると城兵はドツと出て來た。上原能登は小山田昌行に向つていふのに「德川氏の陣形は單陣で後詰がない。織田氏の旗は動いてゐて一致して居らぬ。破ることは造作ない」と。昌行はそのことを信玄に告げた。そこで信玄は大將の旗を引き返した。昌行は勝頼及び山縣昌景・馬場信房等と先鋒となつた。昌行・昌景は先づ最初に敵と討ち合つて、退却した。勝頼・信房はそのあとを承けついで敵の旗を衝いた。そこで信玄は米倉丹後を遣はして抜け道から横に撃たせて、大に之を破つた。諸將猶ほ一氣に濱松を攻めようと願ひ出た。高坂昌宣がいふのに「可ない。我々が之を二十日間も

攻めてまだ抜けないとなると、信長は大兵を擧げて援けに來るに定まつてゐる。そして相持すること數ヶ月にもなると、謙信が信濃に打つて出て自然我等は引き返して救はない譯に行かなくなる。すると信長は自分の力で、武田氏の軍を退けたといふだらう。これは我が武田氏の威名を損すること、なる」と。そこで信長は退いて、刑部に止まつた。この戦争で織田氏の大將平手汎秀を討ち取り、その首を信長に送つて信長を大に責めて（内々徳川を助けてゐるから）之と絶交した。信長はそれでもまだ言ひ譯をして止まなかつた。

旗動（人心の動搖する結） ○刑部（江）

天正元年正月、信玄拔野田城。疾作而歸。信長請將軍義昭諭信玄弭兵。信玄辭之。訴信長五罪。二月、使秋山晴近誘降岩村城。城將妻、信長之姑也。晴近奪而納之。京畿將士多來送款者。三月、信玄疾愈復發。曰：此行必入京師也。部兵三萬出美濃。信長以萬人出拒。山縣昌景以八百騎馳之。信長不戰而走。乞和益力。信玄不聽。轉入三河。次平谷。四月、疾復作。自度不起。召諸將處後事。使勝頼攝衆。以埃信勝、長誠之。曰：汝慎勿佳兵以亡我國。吾死天下獨有一謙信而已。汝請援以國託之。彼一受汝託、必不與鄰國合以侵汝也。言畢、昏迷。已而呼山縣昌景曰：明日、樹汝旗于瀨田。乃

卒。年五十三。

天正元年正月、信玄、野田城を拔く。疾作つて歸る。信長、將軍義昭に請ひ、信玄に諭して兵を弭めしむ。信玄、之を辭し、信長の五罪を訴ふ。二月、秋山晴近をして、岩村城を誘ひ降させしむ。城將の妻は、信長の姑なり。晴近奪ひて之を納る。京畿の將士、來り款を送る者多し。三月、信玄、疫愈え、復發す。曰く「此の行必ず京師に入らん」と。兵三萬を部し、美濃に出づ。信長、萬人を以て出で拒ぐ。山縣昌景八百騎を以て之に馳す。信長戰はずして走り、和を乞ふこと益力む。信玄聽さず。轉じて三河に入り、平谷に次す。四月、疾復作る。自ら起たざるを度り、諸將を召し後事を處す。勝頼をして、衆を攝し、以て信勝の長するを俟たしむ。之を誡めて曰く「汝慎んで、兵を佳くし以て我が國を亡す勿れ。吾れ死せば、天下獨り一の謙信あるのみ。汝援を請ひ國を以て之に託せよ。彼れ一たび汝の託を受けば、必ず隣國と合して汝を侵さじ」と。言畢り、昏迷す。已にして山縣昌景を呼んで曰く「明日、汝が旗を瀨田に樹てよ」と。乃ち卒す。年五十三なり。

通釋 天正元年正月、信玄は野田城を陥れた。併し病氣が起つて歸國した。信長は、將軍義昭に頼み、信玄に諭して、兵を止めるようにして貰つた。信玄は之を斷つて、信長の罪科五ヶ條を訴へ出た。二月、秋山晴近をして岩村城を誘ひ降させた。岩村城將の妻は信長の叔母であつた。晴近はそれを奪つて妻とした。京畿の將士も來つて好を信長に通ずる者が多かつた。三月、信玄は病氣が癒つて再び出で行つた。今度の出陣では必ずとも京都市に攻め込まう」といつた。兵三萬を手分けして、美濃に出かけた。信長は一人を引きつれ出で、之を拒いだ。山縣昌景は八百騎で以て信長に馳せ向つた。信長は戦はないで走り、益々熱心に和睦を願ひ出た。併し信玄は許さなかつた。信玄は轉じて三河に入り、平谷に止まつた。四月病氣再發した。自らもう駄目だと思つたの

で諸將を召し寄せて死後の事を處理した。勝頼をして部下の將士をとり治めさせ、繼嗣の信勝が生長するのを待たせることにした。信玄は勝頼を戒めていふのに「お前は憤んで戦争を好んで、我が國を亡ぼしてはならぬぞ。余が死んだら、天下にはたゞ一人の謙信があるばかりだ。お前は彼の援けを請うて國のことを萬事頼めよ。彼れ謙信は一旦、其の方の依頼を受けたら、義理堅い男だから必ず隣國と一緒になつて、お前を侵す様なことはしないだらう」と。さう云ひ畢つて昏睡状態に陥つた。其の内に山縣昌景を呼んでいふのに「明日、お前の旗を瀨田に押し建てよ」と。かくて息絶えて歿した。年は五十三であつた。

野田(美) ○岩村(美) ○攝(衆) ○佳(兵) (老) (子) (出) (づ) (兵) (を) (弄) (す) (る) (こ) (と)

諸將以遺命秘喪、以信玄弟信綱、貌肖信玄、輿載之歸。曰「信玄有疾、歸國、以昏夜延見四方使者。信玄又豫具空頭花押數百紙、以備書問、以故無來犯者。信玄居常略涉書志、嘗以孫子語書其旗、曰「不動如山、侵掠如火、其靜如林、其疾如風、馬場信房問曰「風雖疾哉、非倏起倏止者乎。信玄曰「兵鋒貴疾耳、苟止矣、則吾以麾下繼之。」信房曰「君要第二合之勝也、其君臣講究武事、皆此類也。四鄰頗聞信玄死、北條氏政馳使告之、謙信謙信方食、舍箸而歎曰「失吾好敵手矣。世復有此英雄男子乎。」因潛然流涕者久之。」

諸將遺命を以て喪を秘し、信玄の弟、信綱の貌の信玄に肖たるを以て、輿に之を載せて歸る。曰く「信玄、疾あつて國に歸る」と。昏夜を以て、四方の使者を延見す。信玄、又豫め空頭花押數百紙を具へ、以て書問に備ふ。故を以て來り犯す者なし。信玄、居常、略書志に涉る。嘗て孫子の語を以て、其の旗に書して曰く「動かざること山の如く、侵掠すること火の如く、其の靜なること林の如く、其の疾きこと風の如し」と。馬場信房問うて曰く「風は疾しと雖も、倏ち起り倏ち止むものにあらずや」と。信玄曰く「兵鋒は疾きを貴ぶのみ。苟も止めば、則ち吾れ麾下を以て之に繼がん」と。信房曰く「君は第二合の勝を要するものなり」と。其の君臣、武事を講究する。皆此の類なり。四隣頗る信玄の死を聞く。北條氏政、使を馳せ、之を謙信に告ぐ。謙信、方に食す。箸を捨て歎じて曰く「吾が好敵手を失ふ。世に復此の英雄男子あらんや」と。因つて潛然として、流涕する者之を久しうす。

諸將は遺言により喪をかくし、信玄の弟の信綱が信玄によく似て居るので乗物に載せて歸つた。そして「信玄は病氣で歸國される」といひ立てた。夕方に暗くなつてから四方の使者を延き入れて面會した。信玄は又書き入れの出来る様に書判だけを書いて、前の方が空けてある紙數百枚を、前以て作つて置いて、書面用に準備してあつた。だから隣國の者も信玄の死んだことを知らず、來り犯すものもなかつた。信玄は平素大概書物に通じ、其の疾きこと風の如し、落着いて動かないことは山のやうで、敵國を侵し物を掠め取ることは其の勢、火のやうで、敵に乗ることが出来ないで靜かにしてゐることは林のやうで、敵に乗すべき機を見出したら早きこと風の如くする」といふ語を旗に書きつけたことがある。馬場信房が問うていふのに「風は成程早いものです、が忽

ち起つて忽ち止むものではありませぬか」と。信玄がいふのに「兵法は早いことを貴ぶものである。苟も風が止むやうに味方の兵が忽ち進めなくなつたら、余は自ら旗下を率ゐて直に其の後を引きついで出るから差支はない」と。信房がいふのに「それでは君には第二度目の勝を求められる譯であります」と。その君臣が武事を攻究することは大抵こんな風であつた。信玄の死んだことを匿してゐたが、その内に四隣の國々に信玄の死んだことが可成り知れ渡つた。北條氏政は使を馳せて之を謙信に告げた。その時丁度謙信は食事をして居た。手に持つてゐた箸を捨て、歎息していふには「余が善い相手を手失つて終つた。世に、この様な英雄は又とあらうや」と。そういつて随分長い間さめくと涙を流して居た。

孫子(軍事)

甲斐宿將馬場信房山縣昌景内藤昌豊高坂昌宣四人交説勝頼請和謙信勝頼不聽勝頼性剛復自用長坂調閑跡部勝資自信玄時已被近幸勝頼益寵之勝頼欲出兵美濃四將交言不可調閑勝資勸之出會三河軍圍長篠乃止五月勝頼遣信房援長篠敵設伏而燔柴爲燒營遁以誘我將士欲追之信房曰其烟白非燒營也使騎往踐之果有伏乃退次黑瀨城陷而歸昌景向濱松亦不利歸二年二月勝頼出美濃陷諸砦五月攻陷高天神歸宴將士昌宣昌豊相謂曰武田氏之滅兆於

此宴矣昌宣説曰君狂勝不戰構怨四鄰非長久計宜返地二氏與之連和稍取東國厚集其勢二嬖沮而止已而二嬖勸勝頼出遠江濟天龍河遇敵不戰而返返至伊奈信虎在焉年已八十乃欲載歸視其狂暴如故乃止

訓讀 甲斐の宿將馬場信房、山縣昌景、内藤昌豊、高坂昌宣の四人、交勝頼に説き、和を謙信に請はしむ。勝頼聽かず。勝頼、性剛復にして自ら用ふ。長坂調閑・跡部勝資、信玄の時より、已に近幸せられ、勝頼、益之を寵す。勝頼兵を美濃に出さんと欲す。四將交、不可を云ふ。調閑・勝資之に出たすを勸む。會々三河の軍長篠を圍み乃ち止む。五月、勝頼、信房を遣はし長篠を援けしむ。敵、伏を設け柴を燔き、營を燒き遁る、爲して以て我を誘ふ。將士之を追はんと欲す。信房曰く「其の煙白し。營を燒くに非ざるなり」と、騎をして之を踐ましむ。果して伏あり。乃ち退き黒瀨に次す。城陥つて歸る。昌景、濱松に向ふ。亦利あらずして歸る。二年二月、勝頼、美濃に出で、諸砦を陥る。五月、攻めて高天神を陥れ、歸り、將士を宴す。昌宣・昌豊、相謂つて曰く「武田氏の滅ぶる此の宴に兆す」と。昌宣説いて曰く「君、勝に狂れ戦めず、怨を四隣に構ふは、長久の計に非ず。宜しく地を二氏に返して、之と連和し、稍く東國を取り、厚く其の勢を集むべし」と。二嬖、沮んで止む。已にして二嬖、勝頼に勸めて遠江に出でしむ。天龍河を濟り、敵に遇ひ戦はずして返る。返つて伊奈に至れば、信虎在り。年已に八十。乃ち載せ歸らんと欲す。其の狂暴、故の如きを視て、乃ち止む。

通釋 甲州の古い大將、馬場信房・山縣昌景・内藤昌豊・高坂昌宣の四人はかばるゝ勝頼に向つて、和を謙信に申し込むやうに説き勸めた。勝頼は聞き入れなかつた。勝頼は性來強情で人のいふことは用ひぬ男であつた。

長坂調閑・跡部勝資は信玄在世の時以來勝頼に近づき、寵愛せられて居たが、勝頼は自分の代になつて益々之を寵愛した。勝頼は美濃に兵を出さうとした。前記の四將はかへる／＼その不可なることを申立てた。然るに調閑・勝資は之に出兵を勸説した。丁度その時三河の徳川氏の軍が長篠を圍んだので、出兵することは取り止めた。五月、勝頼は信房を遣はして、長篠を援けさせた、敵は伏兵を設けて置いて柴を焼き、如何にも陣屋を焼いて逃げることがやうな真似をして我が軍をおびき出さうとした。我が將士は之を追はうとした。信房がいふのに「煙の色が白い。あれは陣屋を焼いたのではない」と。騎兵をやつて往つて踏査せしめて見た。案の定、伏兵が設けてあつた。そこで退いて黒瀬に止まつた。長篠城が陥つてから國に歸つた。昌景は濱松に向つた。これも負けて歸國した。二年二月、勝頼は自身美濃に出で、諸々の砦を陥れた。五月、高天神を攻め落し、歸つて來て將士を振まつた。昌宣、昌豊が互に謂つていふのに「武田氏の滅亡は、この宴會に兆してゐる」と。昌宣は勝頼に説いていふのに「貴公は勝に増長して戰爭をお止めになりません。そんな事をして怨を四隣の諸國に結ぶことは決して國家長久の計ではありません。取つた土地を織田・徳川の二氏に還付し、之と和睦をし、段々と關東方面の土地を取つて、兵力を分割せず、厚く一所に集める様になすつたら宜いでせう」と。調閑・勝資の二妻が邪魔したので其の儀に及ばなかつた。其の内に二妻は勝頼に勸めて遠江に兵を出させた。天龍河を渡り、敵に遇つたが、戦はないで返つて來た。歸途、伊奈まで來ると信虎がまだ生存してゐた。年はもう八十にもなつてゐた。そこで輿に載せてつれ歸らうと思つた。併しその亂暴なことは以前のやうであつたので止めにした。

語釋 長篠(河) ○黒瀬(江)

四鄰觀甲斐、兵數不競、知信玄定死、稍窺之。自信玄之死也、信長專意於謙信、卑辭厚禮、事之猶事信玄。以其妹嫁神保長純。長純上杉義春之兄、屬謙信者。信長因陽結謙信、而陰圖之也。又陰以計招上杉氏諸城、歸款於己。謙信書謂其反覆。信長答書陳疏。謙信不聽。會畠山義隆將游佐彈正等、毒弑義隆、以七尾城降信長。七月、謙信將兵三萬西伐、攻長純木船城、拔之。遂入加賀、屠金澤、移兵攻七尾。以義春爲將、努力復取能登。游佐等乞援信長。信長方攻長島、不能來。九月、城陷、誅游佐等。乃休兵二日、屬十三夕。月色明朗。謙信置酒軍中、會諸將士。酒酣、自作詩曰「霜滿軍營、秋氣清。數行過雁、月三更。越山并得能州景、遮莫家鄉憶遠征。令將士善歌詩者皆和之。遂爲政國中而歸。信長遣大兵來援。聞城陷、引去。信長猶使使謝罪於謙信。

訓讀 四隣、甲斐の兵、數はざるを觀、信玄定めて死するを知り、稍く之を窺ふ。信玄の死せしより、信長意を謙信に專にし、辭を卑くし禮を厚くして、之に事ふること、猶ほ信玄に事ふるがごとし。其の妹を以て神保長純に嫁す。長純は上杉義春の兄にして、謙信に屬する者なり。信長因つて陽に謙信に結びて、陰に之を圖る。又陰に計を以て上杉氏の諸城を招き、款を己に歸せしむ。謙信、書して其の反覆を謂む。信長、答書して陳疏す。

謙信、聽かず。會、畠山義隆の將游佐彈正等、義隆を毒弑して、七尾城を以て信長に降る。七月、謙信、兵三萬に將として西伐し、長純を木船城に攻め、之を抜き、遂に加賀に入り、金澤を屠り、兵を移し七尾を攻め、義春を以て將となし、努力して復能登を取る。游佐等援を信長に乞ふ。信長、方に長島を攻め、來ること能はず。九月、城陥り、游佐等を誅す。乃ち兵を休むこと二日、十三夕に屬す。月色明明なり。謙信、軍中に置酒し、諸將士を會す。酒酣にして、自ら詩を作つて曰く「霜は軍營に満ちて秋氣清し。數行の過雁月三更。越山并せ得たり能州の景。遮莫家郷遠征を憶ふを」と。將士の歌詩を善くするものをして、皆之に和せしむ。遂に政を國中に爲して歸る。信長、大兵を遣はして來り援けしむ。城陥ると聞き引き去る。信長、猶ほ使をして罪を謙信に謝せしむ。

四方の隣國は甲斐の軍勢が度々香ばしくない成績であるのを見て、信玄は必定死んだものだとしり、段々と甲斐を伺ふようになって來た。信玄が死んでからは信長は専心謙信に對し言葉や丁寧にし、禮を厚くして、之に事へたが、それは丁度前に信玄に事へたやうにした。信長は自分の妹を神保長純に嫁入らせた。長純は上杉義春の兄で、謙信に屬して居たものである。そこで信長は表面は謙信に結びつき、内々は之を亡さうと圖つた。又こつそり計略を以て、上杉氏の諸城を招いて自分に味方をさせた。謙信は之を知り、書面で信長の表裏のあることを厳しく責めた。信長は返事を出して色々申辯をした。併し、謙信は聞き入れなかつた。丁度其の時、畠山義隆の大將游佐彈正等は義隆を毒殺し、七尾城を率ゐて信長に降参して來た。七月、謙信は兵三萬に將となり、西に向つて征伐し、長純を木船城に攻めて之を陥れ、猶ほ進んで加賀に入り込み、金澤を屠り、兵を轉換して七尾を攻め、義春を大將となし努力して、再び能登を取つた。游佐等は援助を信長に乞うた。信長は丁度其の時

長島を攻めてゐたので、來ることが出来なかつた。九月、城は陥つて、游佐等を誅した。そこで、兵を休めること二日、時は九月十三夜であつた。月色が明かに照つてゐた。謙信は陣中に酒宴を開き諸將士を會合した。酒の最中に自ら詩を作つていふには「霜は軍營に満ちて秋氣清し。數行の過雁月三更。越山并せ得たり能州の景。遮莫れ家郷の遠征を憶ふを」と。(一帯の陣營は、夜來下りた霜で到る所白く、秋の涼氣は染々と身に迫つて來る。その時である、空高く數列の雁が眞夜中の明月の前を飛んで過ぎたのは、あゝ、今は秋である。そして余は今や越後の山々を越えて、この景色のよい能登を全部取つて終つた。故郷では我々の遠征の苦を、随分と心配して呉れてゐることだらうが、そんなことはどうでも宜い。我々はこの戦勝の氣分を味つてゐれば宜いのだ。」と。將士で歌や詩の上手なものをして、皆この詩に和せしめた。遂に能登國中に政治を施して歸國した。信長は大兵を派遣して來り援けた。七尾城が陥つたことを聞いて引き返し去つた。それでもまだ信長は使者を遣はして謙信に謝罪せしめた。

不競(他國と力の釣り) ○七尾(登能) ○木船(中越)

是歲、信長招降參河將奥平信昌、令守長篠、以備甲斐。三年四月、參河計吏大賀某、陰送款、甲斐約爲內應。勝頼往陣、楡城聞大賀謀覺被誅、乃還。五月、勝頼以萬人附昌宣、留拒越後、自以一萬五千圍長篠、軍道虛寺。令叔父信實守鷲巢、德川氏乞援於信長。信長不敢出、使者三反、不許。使者請曰「不援、則納遠江於武田氏、爲之

先驅以取尾張。且信玄已死。公何怖之甚也。信長乃自將來援。兵凡七萬。猶憚甲斐、騎兵衝突。植、柵三層。守以萬銃。勝頼欲戰。信房、昌景、昌豐等皆諫曰：「敵衆新來。其氣銳。不若且避之。不則疾攻城。雖損我兵。猶可拔而歸也。」二嬖曰：「一戰夷兩敵。在於今日。勿聽老怯計。」信房曰：「今日之戰。老怯者必死。若公等乃遁走耳。」

訓讀 是の歳、信長、參河の將奥平信昌を招き降し、長篠を守らしめ、以て甲斐に備ふ。三年四月、參河の計吏、大賀某、陰に款を甲斐に送り、約して内應を爲す。勝頼往いて楡城に陣す。大賀、謀覺れ誅せらるると聞き、乃ち還る。五月、勝頼、萬人を以て昌宣に附し、留りて越後を拒がしめ、自ら一萬五千を以て長篠を圍み、道虚寺に軍す。叔父信實をして、鳶巢の壘を守らしむ。徳川氏、援を信長に乞ふ。信長敢て出でず。使者三反すれども、許さず。使者請うて曰く「援けずば則ち遠江を武田氏に納れ、之が先驅と爲り以て尾張を取らん。且つ信玄已に死せり。公、何ぞ怖るるの甚しき」と。信長乃ち自ら將として來り援く。兵凡そ七萬。猶ほ甲斐の騎兵の衝突するを憚り、柵を植つること三層、守るに萬銃を以てす。勝頼戦はんと欲す。信房・昌景・昌豐等、皆諫めて曰く「敵衆、新に來り、其の氣、銳なり。且く之を避くるに若かず。不らずんば則ち疾く城を攻めよ。我が兵を損すと雖も、猶ほ抜いて歸るべきなり」と。二嬖曰く「一戦して兩敵を夷ぐるは、今日に在り。老怯の計を聽く勿れ」と。信房曰く「今日の戦、老怯の者は必ず死せん。公等の若きは、乃ち、遁走せんのみ」と。

通釋 この年、信長は參河の徳川氏の將奥平信昌を招き降して、長篠を守らしめ、甲斐の武田氏に備へた。三年四月、參河の計吏、大賀某、陰に款を甲斐に送り、約して内應を爲す。勝頼往いて楡城に陣す。大賀、謀覺れ誅せらるると聞き、乃ち還る。五月、勝頼、萬人を以て昌宣に附し、留りて越後を拒がしめ、自ら一萬五千を以て長篠を圍み、道虚寺に軍す。叔父信實をして、鳶巢の壘を守らしむ。徳川氏、援を信長に乞ふ。信長敢て出でず。使者三反すれども、許さず。使者請うて曰く「援けずば則ち遠江を武田氏に納れ、之が先驅と爲り以て尾張を取らん。且つ信玄已に死せり。公、何ぞ怖るるの甚しき」と。信長乃ち自ら將として來り援く。兵凡そ七萬。猶ほ甲斐の騎兵の衝突するを憚り、柵を植つること三層、守るに萬銃を以てす。勝頼戦はんと欲す。信房・昌景・昌豐等、皆諫めて曰く「敵衆、新に來り、其の氣、銳なり。且く之を避くるに若かず。不らずんば則ち疾く城を攻めよ。我が兵を損すと雖も、猶ほ抜いて歸るべきなり」と。二嬖曰く「一戦して兩敵を夷ぐるは、今日に在り。老怯の計を聽く勿れ」と。信房曰く「今日の戦、老怯の者は必ず死せん。公等の若きは、乃ち、遁走せんのみ」と。

年四月、徳川氏の勘定奉行大賀某は内々甲斐に味方して裏切することを約束した。勝頼は楡城に出陣した。大賀の陰謀露顯して殺されたと聞いたので引き返した。五月、勝頼は一萬人を昌宣に與へて留つて上杉氏を拒がしめ、自分は一萬五千をつれて長篠を圍み、道虚寺に陣取つた。叔父の信實をして、鳶巢の壘を守らしめた。徳川氏は援助を信長に乞うた。信長は出陣しようとしなかつた。徳川氏の使者は三回も往復したが許さなかつた。使者は頼んでいふのに「もし援けて下さらないならば、遠江を武田氏に與へ、降参して武田氏の先鋒となつて尾張を攻め取りませう。それに信玄はもう死んで終つてゐます。公はなぜそんなに怖れて居られますか」と。そこで信長は自ら大將となつて援けに行つた。その兵は凡そ七萬騎であつた。それでもまだ甲斐の騎兵の突き當るのを嫌つて柵を三重に立てまはし、之を守るのに一萬挺の鐵砲を以てした。勝頼は戦はうと思つた。信房・昌景・昌豐等が皆諫めていふのに「敵の軍勢は新に來たばかりで、その氣鋒は實に鋭いものです。我が兵を損つても城を陥れて歸國避けた方が宜しいでせう。若しそれが出來ませぬなら急に城を攻めなさい。我が兵を損つても城を陥れて歸國することが出來るだけましです」と。調閑・勝資の二嬖がいふのに「一度の戦で、織田・徳川の兩敵を平定するのは今日に在ります。そんなおいはれ卑怯な計畫をお聞き入れになつてはなりません」と。信房がいふのに「今日の戦争には、そのおいはれ卑怯な者が必ず討死するだらう。併し貴公等の如き者は老怯でないから遁げ出すことだらう」と。

語釋 楡城(河)

勝頼遂留室賀行俊・小山田昌行圍城而自進濟河陣。旦日、敵間道襲鳶巢信實敗

死。我陣顧而動。敵衆挑戰。昌景爲左先鋒。進犯敵棚。中丸死。信房爲右先鋒。與眞田則幸・土屋直村・破棚而進。則幸直村亦中丸死。室賀行俊來請曰「圍可解否」。勝頼曰「可」。言未畢。諸軍大潰。信房使人馳白勝頼曰「君速去。臣請留死之」。與八十騎止戰。盡亡其騎。自登高邱。顧視勝頼已遠矣。乃號於敵曰「我馬場美濃也。宜斬以受重賞」。敵叢刺之。死。二嬖先遁。昌宣豫慮軍敗也。以兵八千迎於境上。以歸。因大諫。請與北條氏婚。以拒二氏。勝頼從之。

訓讀 勝頼遂に室賀行俊、小山田昌行を留めて城を圍ましめ、自ら進んで河を濟つて陣す。且日、敵、間道より齋築を襲ふ。信實敗死す。我が陣、顧みて動く。敵衆、戦を挑む。昌景は左の先鋒となり、進んで敵の柵を犯し丸の中つて死す。信房は右の先鋒となり、眞田則幸・土屋直村と柵を破つて進む。則幸、直村も亦、丸の中に死す。室賀行俊來り請うて曰く「圍解くべきや否や」と。勝頼曰く「可なり」と。言未だ畢らざるに、諸軍大に潰ゆ。信房、人をして馳せて勝頼に白さしめて曰く「君、速に去れ。臣請ふ、留りて之に死せん」と。八十騎と止り戦ひ、盡く其の騎を亡ぶ。自ら高邱に登り、顧みて、勝頼已に遠きを視、乃ち敵に號して曰く「我は馬場美濃なり。宜しく斬りて以て重賞を受くべし」と。敵之を叢刺して、死す。二嬖先づ遁る。昌宣豫め軍の敗るゝを慮るや、兵八千を以て境上に迎へ以て歸る。因つて大に諫め、北條氏と婚し、以て二氏を拒がんと

請ふ。勝頼之に従ふ。

通釋 勝頼は遂に室賀行俊、小山田昌行を留めて長篠城を圍ましめ、そして自分は進んで豊川を渡つて陣取つた。翌日、敵は抜け道から、齋築を襲撃した。信實は敗けて死んだ。我が軍は之を顧みて驚いて動揺した。敵軍は戦をしかけて來た。昌景は左の先鋒となり、進んで敵の柵を攻め、彈丸の中つて討死した。信房は右の先鋒となり、眞田則幸・土屋直村と柵を破つて進んだ。則幸・直村も亦彈丸の中つて討死した。室賀行俊は來つて請うていふのに「城の圍を解いても宜いでしょうか、如何ですか」と。勝頼は「宜しい」といつた。その言葉が未だ畢らぬ内に味方の諸軍は大に潰えた。信房は人をして、馳せて勝頼に曰はせていふのに「貴公は速く御立退なさい。私は留つて討死致します」と。八十騎と留り戦ひ全部其の騎を失つて終つた。自ら高い岡に登つて顧みて勝頼がもう大分遠方まで去つたのを見て、そこで敵に向つて怒號していふには「我は馬場美濃である。この首を斬つて、重い褒美を買つたら宜からう」と。敵は大勢で寄つてたかつて突き刺したので死んで終つた。調閑・勝資の二嬖は眞先きに逃げ出した。高坂昌宣は前々から味方の敗れるのを心配して兵八千をつれて、國境近傍に出てゐたから、勝頼を出迎へ連れて歸つた。そこで昌宣は大に諫め、北條氏と結婚し、織田・徳川の二氏を拒ぐようになませうと願つた。勝頼は之に従つた。

話 北條氏(氏政の妹を娶)

信長既大捷、謂甲斐不足患。所患獨謙信。乃大城安土。移焉以備北道。柴田勝家爲其最驍將。因守越前。居北莊。八月、謙信將兵入加賀。攻松任城。城將蕪木高秀、乞援。

於信長。信長將五萬人來陣。御幸塚。勝家爲先鋒。謙信疾攻拔城。斬高秀齋。其首贈信長。曰「頃攻本城。相公遠來見援。幸甚。然城將已授首。謹此奉贈。公當有一戰以弔之。明早將相見。」信長許諾。而乘夜退軍。設八伏以俟。諸將請追擊。謙信曰「信長豈徒歸者。」亦引還。

訓讀 信長既に大に捷ち、謂へらく、甲斐は患ふるに足らず。患ふる所は獨り謙信のみと。乃ち大に安土に城き、移つて以て北道に備ふ。柴田勝家其の最驍將たり。因つて越前を守り、北莊に居らしむ。八月、謙信、兵に將として加賀に入り、松任城を攻む。城將無木高秀、援を信長に乞ふ。信長、五萬人に將として、來り御幸塚に陣す。勝家先鋒たり。謙信疾く攻めて城を抜き、高秀を斬り、其の首を齎し、信長に贈つて曰く「頃本城を攻む。相公、遠く來り援けらる。幸甚し。然れども城將已に首を授く。謹んで此に奉贈す。公、當に一戰し以て之を弔ふるべし。明早、將に相見んとす」と。信長、許諾し、夜に乗じて軍を退け、八伏を設け以て俟つ。諸將追擊せんと請ふ。謙信曰く「信長豈に徒に歸るものならんや」と。亦引き還る。

通釋 信長既に大に武田氏に捷つたので、武田はもう心配する程のものでない、たゞ問題にすべきは謙信だけだと思つた。そこで大に安土に城を築いて移り、以て北陸道方面に備へた。柴田勝家は信長の第一の勇將であつた。そこで越前を守らせ、北莊に居らしめた。八月謙信は兵に將として、加賀に入り、松任城を攻めた。城主の無木高秀は援助を信長に乞うた。信長は五萬人に大將となつて、來つて御幸塚に陣取つた。勝家がその先鋒とな

つてゐた。謙信は急に攻めて、城を陥れ、高秀を斬り、其の首を持つて信長に贈らせていふには「此の頃此の城を攻めた。内大臣殿には遠方から懇と援けに來られた。まことに有り難き仕合せで御座る。併し城將はもうこの通り首を差し出した。謹んで之を贈呈いたす。何卒貴公も一合戦して之を弔ひなされて然るべきだ。明日、朝早く御目にかゝりませうぞ」と。信長は承諾し、夜に乗じて軍を却けた。そして伏兵を八個所に設けて謙信の追かけて來るのを待つた。上杉氏の諸將は之を追撃しようとして申し出た。謙信がいふのに「信長はどうして、たゞで歸る奴だらうか。追つかけたらそれこそ事だ」と。謙信も亦兵をつれて還つた。

語釋 御幸塚(加) ○相公(信長、時に内)

是歲、勝頼使使請和。謙信欲報織田氏。謙信許之。徵其質子。不肯。會德川氏攻二股。城將依田幸成固守。不下。乃攻陷諷訪原。遂攻小山。勝頼曰「彼謂我不能復出乎。」乃募兵二萬援之。敵解圍去。十二月、幸成死。德川氏復來攻。幸成子信蕃拒之。勝頼命棄城退。岩村又陷。信長手刃其姑。是月、勝頼迎北條氏女成婚。昌宣退。謂人曰「今夕吾始得高枕矣。」四年春、勝頼出兵遠江。與德川氏相持。橫須賀。勝頼欲戰。昌宣諫曰「長篠之役、多失老將。獨有臣存。今又欲殺之乎。」勝頼乃退城。相良而歸。越後將士說謙信曰「甲斐兵新敗。可乘也。」謙信曰「我與信玄數十戰。不能取。及其死、侮弱子。乘

敗取之、何以對天下。

是の歳、勝頼、使をして、和を謙信に請はしめ、織田氏に報せんと欲す。謙信、之を許し、其の質子を徵す。肯ぜず。會、徳川氏、二股を攻む。城將依田幸成、固く守つて下らず。乃ち諏訪原を攻陥し、遂に小山を攻む。勝頼曰く、「彼は我を復出づる能はずと謂ふか」と。乃ち兵二萬を募り、之を援く。敵圍を解いて去る。十二月、幸成、死す。徳川氏、復來り攻む。幸成の子信蕃、之を拒ぐ。勝頼、命じ城を棄て、退かしむ。岩村又陥る。信長手づから其の姑を刃す。是の月、勝頼、北條氏の女を迎へ婚を成す。昌宣、退いて人に謂つて曰く、「今夕、吾れ始めて枕を高くするを得たり」と。四年春、勝頼、兵を遠江に出だし、徳川氏と横須賀に相持す。勝頼、戦はんと欲す。昌宣諫めて曰く、「長篠の役に、多く老将を失ひ、獨り臣の存する有るのみ。今又之を殺さんと欲するか」と。勝頼乃ち、退き、相良に城いて歸る。越後の將士、謙信に説いて曰く、「甲斐の兵、新に敗る。乘すべきなり」と。謙信曰く、「我れ信玄と數十戦し、取る能はず。其の死せるに及び、弱子を侮り、敗に乗じ之を取らば何を以て天下に對せん」と。

この年、勝頼は使者を立てて和睦を謙信に請はしめ織田氏に返報しようと思つた。謙信は之を許し、人質を差し出させた。併し勝頼は承知しなかつた。丁度其の時、徳川氏は二股城を攻めてゐた。城將依田幸成は固く守つて下らなかつた。故に徳川氏は諏訪原を攻め、それから小山を攻めた。勝頼がいふのに「彼れ徳川は我等が再び打つて出ることが出来ぬと思つて居るのだらうか」と。そこで、兵二萬を募つて、小山を援けた。敵は圍を解いて立ち去つた。十二月、幸成は死んだ。徳川氏はまた攻めて來た。幸成の子の信蕃が之を拒いだ。勝頼は命じて城を棄て、退かした。その時岩村城も陥落した。信長は手づから其の叔母を殺した。この月、勝頼は北

條氏の娘を迎へて婚を取り結んだ。昌宣は退いて人に謂つていふのに「今夜こそ拙者は始めて安心して眠られる」と。四年春、勝頼、遠江に兵を出し、徳川氏と横須賀で對陣した。勝頼は戦はうと思つた。併し昌宣が諫めていふのに「長篠の戦で多くの古い大将を討死させ、たゞ私が生き残つて居るばかりであります。今又その私をも殺すお考へですか」と。そこで勝頼は退却し、相良に城を築いて歸國した。越後の將士が謙信に説いていふには「甲斐の兵はこんど敗けたばかりです。(長篠の敗)今がつけ込み時です」と。謙信はいふのに「余は以前、信玄と數十度も戦つたが其の國を取ることが出来なかつた。其の信玄の死に乗じて小倅を侮り、その敗けたのに付け込んで、之を取つたら天下に顔向けがならぬ」と。

二股・諏訪原・小山(江) ○乃其姑(秋山晴近の) ○北條氏女(氏政) ○横須賀(江)

三月、謙信入越中、取蓮沼、獲椎名泰種、殺之、令別將入飛驒、夷江馬氏、遂自入加賀、攻小松。織田氏將前田利家等來援、以先鋒擊破之。使川田長親守越中、柿崎景家守能登、而還。信長患謙信西向、日夜謀所以禦之。柿崎景家遣入市馬、上國。信長喜曰、「可以問也。」乃給直十倍、自書謝。更索佳鷹。景家貪其直、數給鷹。後有告其通款。終被殺。信長陰招能登、人長重連、加賀人松任彦紹、誘一向賊北向。五年、重連聚兵據穴水城。小松安宅、大道山諸城、並起應之。當是時、筒井順慶、松永久秀等、據大和、

遙送款謙信請其西上又西約毛利氏東西夾攻信長

三月、謙信、越中に入り、蓮沼を取り、椎名泰種を獲て、之を殺し、別將をして飛驒に入り、江馬氏を夷げしむ。遂に自ら加賀に入り小松を攻む。織田氏の將前田利家等來り援く。先鋒を以て之を撃ち破る。川田長親をして越中を守り、柿崎景家をして能登を守らしめて還る。信長、謙信の西向するを患へ、日夜、之を禦ぐ所以を謀る。柿崎景家、人をして馬を上國に市らしむ。信長喜んで曰く「以て問すべきなり」と。乃ち直十倍を給し、自ら書して謝す。更に佳鷹を索む。景家、其の直を食り、數鷹を給す。後其の款を通すと告ぐるものあり。終に殺さる。信長、陰に能登の人長重連・加賀の人松任彦紹を招き、一向賊を誘ひ北向せしむ。五年、重連、兵を聚め、穴水城に據る。小松・安宅・大道山の諸城、並び起り之に應ず。是の時に當り、筒井順慶・松永久秀等大和に據り、遙に款を謙信に送り、其の西上を請ひ、又西、毛利氏に約し、東西より信長を夾み攻めんとす。

三月、謙信は越中に入り、蓮沼を取り、椎名泰種を擒にし、之を殺し、別將を飛驒に入らせて江馬氏を平定せしめた。それから自分は加賀に入り、小松を攻めた。織田氏の將前田利家等が援けに來た。先鋒で以て之を撃ち破つた。川田長親に越中を守らせ、柿崎景家に能登を守らしめて還つた。信長は、謙信が西に向つて出るのを心配し、日夜謙信を禦ぐ手だてを考へて居た。すると柿崎景家は人を遣はして、馬を上方に賣らせた。信長は喜んでいふのに「これは君臣の間を離間することが出来るよい機會だ」と。そこで馬の値段の十倍の金をわたし、自分でよい馬を得た禮狀を遣つた。更に善い鷹はないかと索めた。景家その價を食つて、度々鷹を送つて來た。その後、景家が織田氏に内通したと告げるものがあつた。景家は終に殺されて終つた。信長は内々能登の人長重連、加賀の人松任彦紹を招き、一向宗の賊を引き入れて、北越後に向はせた。五年、重連は兵を聚めて穴水

城に立て籠つた。小松・安宅・大道山の諸城も並に起つて、之に味方した。この當時、筒井順慶・松永久秀等は、大和に立て籠り、遠く謙信に内通し、謙信の京都に上らんことを願ひ出で、又西の方毛利氏と約束して、東西から信長を夾み討にしようとした。

九月、謙信自將攻穴水、拔之、斬重連、遂攻小松安宅。信長遣柴田勝家、前田利家等、五將將兵四萬八千來援。而已亦潛來助之。謙信攻拔三城、進至石動橋、距織田氏軍十里而陣。使使約明曉會戰。信長復乘夜而逃。謙信大笑曰「信長巧於走者也。使其猶在、當盡踢墜之水耳。」遂進攻金澤、陷之、入越前、行攻織田氏壘、塞盡驅其守兵、焚掠而進。烟塵蔽天。信長退保北莊、遂退入長濱。

九月、謙信自ら將として、穴水を攻め、之を抜き、重連を斬り、遂に小松・安宅を攻む。信長、柴田勝家・前田利家等の五將を遣はし、兵四萬八千に將として來り援けしむ。而して己も亦、潛に來り之を助く。謙信攻めて三城を抜き、進み石動橋に至り、織田氏の軍を距ること十里にして陣し、使をして明曉の會戰を約せしむ。信長、復夜に乗じて逃る。謙信、大に笑つて曰く「信長は走るに巧なるものなり。其れをして猶ほ在らしめば、當に盡く之を水に踢墜すべきのみ」と。遂に進み金澤を攻め、之を陥れ、越前に入り、行くゆく織田氏の壘塞を攻め、盡く其の守兵を驅り、焚掠して進む。烟塵、天を蔽ふ。信長、退き北莊を保ち、遂に退いて長濱に入る。

九月、謙信は、自ら大將となつて、穴水を攻めて之を陥れ、重連を斬り、それから進んで、小松・安宅を攻めた。信長は柴田勝家・前田利家等の五人の大將を遣はし、兵四萬八千を率ゐて援けに行かせた。そして自分もこつそり来て之を助けた。謙信は、小松・安宅・大道山の三城を陥れ、進んで石動橋に至り織田氏の軍勢を去ること十里の所に陣取り、使をやつて明早朝の會戰を約束させた。信長は又夜に乗じて逃げた。謙信は大に笑つていふのに「信長は逃げるのに巧者な奴だ。まだ彼が留つて居るなら皆之を水の中へ蹴落してやるだけさ」と。遂に進んで金澤を攻め、之を陥れ、越前に入り、途中、織田氏の壘を攻め、全部其の守つてゐる兵士を追ひやり、放火掠奪し乍ら進んだ。烟や塵が天を蔽ふばかりであつた。信長は退いて北莊を持ち固め、遂に退いて長濱に入つた。

○小松・安宅・大道山(賀) ○長濱(江)

謙信以天寒雪下、又聞久秀等已敗死、欲班軍。乃遣書信長曰「信玄既死、公則委四郎於家康、而自居安土、蓋備謙信也。公數與畿内敵樂戰、未觀北人技倆耳。請期明春三月十五日、聊舉八州之卒、西上、與公相見。公勿視謙信同。皮履都人士時、京師人喜穿皮履。故云。使使齋書、因贈越後布二千端。信長延見使者、言曰「爲吾返報越後公。信長何敢與公角。公來將盡脫刀劍、獨挿扇於腰、單騎迎謁、先導以入都。」

公義人也。信長所辛苦經營、必不見奪也。使者復命、謙信晒曰「信長姦雄、甘言以忘我耳。聞長篠之役、渠以柵與銃困甲斐四郎。明年復必以此擬我。我豈墮其計哉。」

謙信、天寒く雪下るを以て、又久秀等已に敗死すと聞き、軍を班さんと欲す。乃ち書を信長に遣りて曰く「信玄既に死す。公則ち四郎を家康に委ねて、自ら安土に居るは、蓋し謙信に備ふるならん。公數、畿内の敵と樂戦し、未だ北人の技倆を觀ざるのみ。請ふ、明春三月十五日を期し、聊か八州の卒を擧げ西上し、公と相見ん。公、謙信を視ること、皮履の都人士と同じくする勿れ」と。時に京師の人、喜んで皮履を穿く。故に云ふ。使を以て書を齎し、因つて越後布二千端を贈らしむ。信長、使者を延見し言つて曰く「吾が爲めに返り越後公に報ぜよ。信長何ぞ敢て公と角せんや。公來らば、將に盡く刀劍を脱し、獨扇を腰に挿み、單騎迎謁し、先導して以て都に入らんとす。公は義人なり。信長の辛苦して經營する所、必ず奪はれじ」と。使者復命す。謙信晒つて曰く「信長は姦雄なり。甘言以て我を怠らすのみ。聞く、長篠の役に、渠、柵と銃とを以て、甲斐の四郎を困しむと。明年、復必ず此を以て我に擬せん。我れ豈に其の計に墮ちんや」と。

謙信は、時候が寒くなつて、雪が降り出して來たし、又松永久秀等も、もう敗れ死んだと聞いたので、軍勢を引き返さうと思つた。そこで書面を信長に送つていふには「信玄は既に死んだ。貴公は勝頼の方面を家康に引き受けさせて置き、而して御自分は安土に居らるゝが、それは思ふに余に備へられる爲めで御座らう。貴公は度々五畿内の敵と氣樂な戰爭をしてゐらるゝから、北國人の手並はまだ觀ないのである。請ふ、明年春三月十五日を限り、いさゝか領分八個國の兵士をつれて西へ上り、貴公と御面會仕らう。貴公は余を皮足袋をはく柔弱

な都人と同一視されては困る」と。當時京都の人は好んで皮足袋をはいたので、そのやうにいつたのである。そこで、使者をしてこの手紙を持たせ、それを機会に越後布二千端を贈らせた。信長は使者を引き入れ、會つていふには「吾が爲めに越後に申し上げて呉れ。拙者はどうして、貴公と争ふことを致しませうや。貴公が來られるならば皆刀劍を脱してたゞ扇子を腰に押し、一騎でお迎へしてお目にかゝり、道案内して京都に入ることに致しませう。一體貴公は義の固い御方であります。だからこれまで私が苦辛して取つて治めてある所はきつと奪ひ取られる様な氣遣ひはありません」と。使者は還つて、其の由を報告した。謙信はあざ笑つていふには「信長は性質の悪い英雄だ。巧いことをぬかして我を怠らせよう算段だ。聞く所によると長篠の戦争で信長は柵と鐵砲とで甲斐の勝頼を苦しめたといふことだ。明年はまた屹度この方法で我に向ふであらう。我はどうして、その計略に陥つて堪らうか」と。

四郎(頼) ○八州(越後・越中・加賀・能登) ○端(禮記の疏には丈八尺が端とある。日本では二丈八尺を端とす。)

十月、歸越後、間日傳檄、大發管内八國兵、期以三月五日。加賀以西、兵沿道附從。京畿大震。信長使使者告之勝頼、請捐前故修舊好。曰「謙信西上、我與家康拒之北道。願公直指越後、事克則其地唯公所取。勝頼不答。六年三月、北陸諸國兵應檄雲集。謙信自臨簡閱、申約束、將發。先發二日、疾作、二日遂卒。年四十九。卒後、信玄五年矣。」

訓讀 十月、越後に歸り、間日、檄を傳へ、大に管内八國の兵を發し、期するに三月五日を以てす。加賀以西の兵は、沿道より附き從はしむ。京畿、大に震ふ。信長、使をして之を勝頼に告げしめ、前故を捐て舊好を修めんと請ふ。曰く「謙信、西上せば、我れ家康と之を北道に拒がん。願はくは公、直に越後を指せ。事克たば、則ち其の地は唯公の取る所のまま」と。勝頼答へず。六年三月、北陸諸國の兵、檄に應じて雲集す。謙信自ら臨み簡閱し、約束を申ね、將に發せんとす。發するに先だつ二日、疾作り、二日にして、遂に卒す。年四十九。卒すること、信玄に後るる五年なり。

通釋 十月、越後に還り、一日おいて觸れを廻はし、大に領分の八個國の兵士を徵發し、三月五日を以て期限とした。加賀より西の兵士は途中で加り從ふことにした。五畿内地方は非常に震ひ怖れた。信長は使者を立て、勝頼に告げしめ、これまでの怨を捨て、古い好を修めようではないかと申し出た。いふのに「謙信が京都に上つたら、余は家康と之を北陸道に拒ぎませう。貴公は何卒直ぐ越後を指して攻め入つて下されよ。この事が成功すれば越後の土地は貴公の取り放題で御座る」と。勝頼は、返事をしなかつた。六年三月、北陸道諸國の兵士は觸れに應じて雲のやうに多勢集つて來た。謙信は自分で其の場に出かけて選り調べ軍令を言ひ渡して將に出發しようとした。出發に先だつ二日、即ち三月三日に、病氣が起つて、二日目に遂に死んだ。その時年は四十九。その死は信玄より五年後であつた。

語釋 修舊好(信玄在世當時の好)を修むるをいふ。

直江兼續・本莊繁長等諸大臣、相共謀曰「三郎非上杉氏胤胤乃景勝。且親姪宜立。」

立三郎北條氏必因以并吞北陸吾輩皆爲之臣僕。於是遣上杉義春、矯命急迎景勝於上田。來入内城、分親信守諸門。景虎在外城。日夜相闘、弓銃交發。織田氏細作在越後者、走歸告信長。信長大喜、撫掌曰：天下大定矣。乃令佐久間信盛入加賀、前田利家入能登、佐佐成政入越中、各自略取之。景勝、景虎兵結不解。以故不能拒。景虎終敗走、歸上杉憲政于北川。戶定城主北莊丹後聞變、馳至、說景勝曰：兩郎君宜各領四州、共拒信長。不則彼乘釁來侵。先公所百戰而取者、一旦附之敵人、豈不可惜。景勝不聽。北莊怒、去助景虎、數破景勝兵。因軍善光寺。景勝母在上田、肩輿來入城、召諸將士、面勗之、保謙信遺業、將士感激力守。

訓讀 直江兼續・本莊繁長等の諸大臣、相共に謀つて曰く「三郎は、上杉氏の胤にあらず。胤は乃ち景勝。且つ親姪なり。宜しく立つべし。三郎を立てれば、北條氏必ず因つて以て北陸を併呑し、吾が輩、皆之が臣僕と爲らん」と。是に於て、上杉義春を遣はし、命を矯め、急に景勝を上田に迎へしむ。來りて内城に入り、親信を分ち諸門を守らしむ。景虎、外城に在り。日夜相闘き弓銃交發す。織田氏の細作の越後に在るもの、走り歸つて信長に告ぐ。信長、大に喜び、掌を撫して曰く「天下、大に定る」と。乃ち佐久間信盛をして加賀に入り、前田利家をして能登に入り、佐佐成政をして越中に入り、各自自ら之を略取せしむ。景勝・景虎、兵、結んで解

けす。故を以て拒ぐこと能はず。景虎、終に敗れ走り上杉憲政に北川に歸す。戶定城主北莊丹後、變を聞き馳せ至り、景勝に説いて曰く「兩郎君、宜しく各四州を領し、共に信長を拒ぐべし。不らずんば則ち彼れ覺に乗じ來り侵さん。先公百戰して取る所のもの、一旦之を敵人に附するは、豈に措む可からずや」と。景勝聽かず。北莊怒り、去つて景虎を助け、數、景勝の兵を破る。因つて善光寺に軍す。景勝の母上田に在り。肩輿にて來り城に入り、諸將士を召し、面のあたり之を勗め、謙信の遺業を保たしむ。將士、感激して力守す。

通釋 直江兼續・本莊繁長などが相共に相談していふのは「三郎景虎殿は上杉家の血筋ではない。血筋の人はつまり景勝殿である。その上謙信公親身の甥である。宜しく繼嗣とすべきである。もし三郎君を立てると北條氏は屹度、それを宜いこととして、北陸道を併呑し、吾々は皆北條の家來となつて終ふのだ」と。そこで上杉義春を遣はし、謙信の命令だと偽つて急に景勝を上田から迎へさせた。來ると本丸に入り、腹心の者どもを分けて諸門を守らせた。景虎は外城に居たが、日夜せり合ひ雙方より、弓や鐵砲を互ひに放つた。織田氏の忍びの者で越後に居た者が走り歸つてこのことを信長に注進した。信長は非常に喜んで手を揉んで曰ふには「天下は立派に平定したぞ」と。そこで佐久間信盛をして加賀に入り、前田利家をして能登に入り、佐佐成政をして越中に入らしめ、銘々に攻め取らせた。景勝・景虎は兵を取り結んで解けなかつた。それ故に信長の軍を拒ぐことは出来なかつた。景虎は、終に敗れて走り、北川なる上杉憲政の處へ逃げ込んだ。戶定城主北莊丹後は變事を聞きつけ、かけてやつて來て、景勝に説いていふには「二人の若殿は各四ヶ國を領分とし、一緒に信長を防がれたら宜いでせう。それが出来なければ信長はわが隙間につけ込んで侵略に來ませう。先殿様が百戰して取られた土地を一朝にして敵に與へることは、如何にも惜まずにはあられません」と。景勝はいふことを聽かなかつた。北莊は怒

つてそこを去つて景虎を助け、度々、景勝の兵を破つた。因つて善光寺に陣取つてゐた。景勝の母親は上田に居た。輻に乗つて来て城内に入り、諸將士を呼び出して、面前で之を激勵し、謙信の残した事業を維持するやうに申付け、將士は感激して力の限り守つた。

細作(忍びの者) ○北川(後越) ○戸定(前越)

七年正月、景勝夜潛、兵襲景虎、軍後大破之。北莊脱走。景勝將荻田主馬識之、追而刺之。於是諸城多歸景勝。景虎走保鮫尾。北條氏政聞之、遣兵萬餘援景虎。又請援於武田氏。勝頼出軍飯山。景勝與戰不利。齋藤朝信說景勝以東上野、略勝頼、先以金萬兩。又厚賂其二嬖。二嬖交說勝頼曰、景虎君之舅也。雖然、援之而克、則北條氏連屬東北、將及於君矣。是與得東上野、金萬兩、孰利。勝頼乃與景勝和、合兵攻景虎。景虎與憲政皆自殺。相模兵引去。氏政大怒、與勝頼絶、與織田氏、德川氏約、夾攻勝頼。

訓讀 七年正月、景勝、夜兵を潛め、景虎の軍後を襲ひ、大に之を敗る。北莊脱し走る。景勝の將荻田主馬、之を識り、追つて之を刺す。是に於て、諸城多く景勝に歸す。景虎走つて鮫尾を保つ。北條氏政、之を聞き、兵萬餘

を遣はし、景虎を援けしめ、又援を武田氏に請ふ。勝頼軍を飯山に出だす。景勝與に戦ひ利あらず。齋藤朝信、景勝に説き、東上野を以て勝頼に略はし、先づ金萬兩を以てせしむ。又厚く其の二嬖に賂ふ。二嬖、交勝頼に説いて曰く、「景虎は、君の舅なり。然りと雖も、之を援けて克たば、則ち北條氏、東北を連屬し、將に君に及ばんとす。是れ東上野、金萬兩を得ると、孰れが利ぞ」と。勝頼乃ち景勝と和し、兵を合せ、景虎を攻む。景虎、憲政と皆自殺す。相模の兵引き去る。氏政、大に怒り、勝頼と絶ち、織田氏、德川氏と約し、勝頼を夾み攻む。

七年正月、景勝は夜、兵を忍ばせて景虎の軍の背後から襲うて大に之を破つた。北莊は身を脱して逃げた。景勝の大將荻田主馬は、それを氣づき追つかけて刺し殺した。これから諸城多くは景勝に歸した。景虎は走つて、鮫尾を固めた。北條氏政は之を聞いて兵萬餘人を遣はして、景虎を援けさせ、又援助を武田氏に乞うた。勝頼は軍勢を飯山に繰り出した。景勝はともに戦つたが負けた。齋藤朝信は景勝に説き、東上野を勝頼に與へて餌となすことにし、その前に先づ黄金一萬金を贈らしめた。又手厚く二嬖に賄賂を送つた。二嬖はかほるゝ勝頼に説いていふには「景虎は公の小舅であられる。けれども之を援けて克てば、北條氏は東海と北陸とを連ね續けるようになり、追々其の勢力が公の領分に及んで來ることになりませう。これは、東上野と黄金一萬兩とを得ると、どちらが利益でせうか。東上野と一萬兩を得た方が餘程利益で御座います」と。そこで勝頼は景勝と和睦し、兵を合せて景虎を攻めた。景虎は憲政と皆自殺した。相模の兵は引き去つた。氏政は非常に怒り、勝頼と絶交し、織田氏、德川氏と約束して勝頼を夾み討にした。

君之舅(景虎は勝頼の妻の兄、妻の兄弟を阿舅と云ふ)

七月、勝頼以其妹妻景勝、撤貝津之戍、移於沼津、數出兵上野及駿河。時高坂昌宣

既死莫復諫者。而二嬖益橫。德川氏世子信康居岡崎。其母關口氏有罪廢居。與甲斐、醫人滅慶通。使滅慶來送款。約為內應。勝頼許之。事覺。母子皆被殺。九月、勝頼次沼津。氏政以兵四萬軍三島。十月、德川氏踰險入駿河。縱火由井。勝頼使別將當氏政而西。二嬖故遲其行。至則去矣。

七月、勝頼、其の妹を以て景勝に妻はし、貝津の成を撤し、沼津に移し、數兵を上野及び駿河に出だす。時に高坂昌宣既に死し、復讐むるものなし。而して二嬖益横なり。德川氏の世子信康、岡崎に居る。其の母關口氏、罪あつて廢居し、甲斐の醫人滅慶と通じ、滅慶をして來り款を送らしめ、約して内應を爲す。勝頼之を許す。事覺れ、母子皆殺さる。九月、勝頼、沼津に次す。氏政、兵四萬を以て三島に軍す。十月、德川氏、險を踰えて駿河に入り、火を由井に縱つ。勝頼、別將をして氏政に當らしめて西す。二嬖、故に其の行を遅くす。至れば則ち去る。

七月、勝頼は、其の妹を景勝に妻はせ、貝津の守備を取りのけて、(貝津は越後に備へた城)之を沼津に移し、度々、上野及び駿河に出兵した。當時既に高坂昌宣は死んで、もう諫めるものはなかつた。そして二嬖は益々増長してゐた。德川氏の繼嗣の信康は岡崎に居た。その母の關口氏は罪があつて本妻をやめられて押し込められてゐたが、甲斐の醫者滅慶と密通し、滅慶を使者として、來つて内通せしめ裏切ることを約束した。勝頼は之を許した。その事が發覺して、信康の母子は皆殺された。九月、勝頼は沼津に宿して居た。氏政は兵四萬を率ゐて、三島に陣取り、之に對抗した。十月、德川氏は險阻を越えて、駿河に入り、火を由井に放つた。勝頼は別將をして、氏政に當らしめて置いて、自分は西方へ出かけた。二嬖はわざと其の行軍を手間取らせた。由井に來て見ると德川氏はもう去つた後であつた。

八年六月、德川氏攻高天神。十月、城且陷。城將岡部與行請援勝頼。裨將横田尹松使言曰、城深在敵地。君不宜來。臣等分當守城。死即得免。走歸亦不難也。將士皆贊其言。勝頼曰、坐不援無以藉口。乃出徇上野。攻膳城。肉薄拔之。九月、二月、與氏政相持于伊豆。氏政將松田憲秀送款勝頼。勝頼欲戰。二嬖止之。三月、高天神陷。與行被獲。尹松力戰脫歸。勝頼欲賞之。曰、脫歸被賞。在君爲僭。在臣爲冒。固辭不受。

八年六月、德川氏、高天神を攻む。十月、城且に陥らんとす。城將岡部與行、援を勝頼に請ふ。裨將横田尹松、言はしめて曰く、「城深く敵地に在り。君宜しく來るべからず。臣等分當に城を守つて死すべし。即し免るるを得ば、走り歸るも亦難からざるなり」と。將士皆其の言を贊す。勝頼曰く、「坐して援けずば、以て口を藉るなし」と。乃ち出で上野を徇へ、膳城を攻め、肉薄して之を拔く。九年二月、氏政と伊豆に相持す。氏政の將松田憲秀、款を勝頼に送る。勝頼戰はんと欲す。二嬖、之を止む。三月、高天神陥り、與行獲らる。尹松、力戰して脱れ歸る。勝頼、之を賞せんと欲す。曰く、「脱れ歸り賞せらるれば、君に在つては僭たり、臣に在つては冒

たり」と。固辭して受けず。

通釋 八年六月、徳川氏は、高天神を攻めた。十月城が落ちかゝつた。城將岡部興行は援助を勝頼に頼んだ。その次將横田尹松は言はしめていふのに「城は深く敵地に在ります。貴公はお出でにならぬ方が宜しいです。私どもは本分として城を守つて討死すべきです。もし免れることが出来ましたら走り歸つてもそれは困難ではありません」と。將士は皆その言を賛成した。勝頼がいふのに「ちつとしてゐて助けなくては申譯が立たぬ」と。そこで、出で、上野を觸れさとし、勝城を攻め、詰め寄せて之を陥れた。九年二月、勝頼は氏政と伊豆で對陣した。氏政の大將松田憲秀は勝頼に内通した。勝頼は戦はうと思つた。併し二嬖が之を止めた。三月、高天神は遂に陥り、興行は生捕られた。尹松は力め戦つて、脱れ歸つた。勝頼は尹松を賞しようとした。尹松がいふのに「脱れ歸つて御褒美を戴くと殿様の方から申せば濫賞であり、私から申せば受けてならぬものを貰つたことになりません」と。固く辭退して貰はなかつた。

語釋 分(臣分)

勝頼疆土日削二嬖勸其請和信長小山田昌辰曰晚矣長其侮耳不聽返織田氏質子請和信長答書辭甚倨穴山信良又說勝頼曰先公威震四鄰故所居不設城池然聞氏康信長通好謙信則築岩殿久能吾妻三城以備之謙信不屑從約以故無事耳今鄰國無復如謙信者安可不備勝頼然之乃城于葦崎號曰新府信

良欲娶勝頼女爲婦武田信豊路二嬖乃適信豊焉信良啣之終通款織田氏諸公族諸將亦多送款者木曾義昌爲勝頼妹婿苦其誅求陰降信長請導其兵有來告之者二嬖斥爲虛言已而事覺十年正月勝頼欲討義昌阿部忠高曰其地險狹不可輒往臣請先往說紓其計而君兵稍從其後可也二嬖沮之遂命信豊將五千人冒雪赴討遇義昌鳥居嶺大敗歸

訓讀 勝頼、疆土、日に削らる。二嬖、其の和を信長に請はんことを勸む。小山田昌辰曰く「晚し。其の侮を長ずるのみ」と。聽かず。織田氏の質子を返し和を請ふ。信長の答書の辭甚だ倨る。穴山信良、又勝頼に説いて曰く「先公の威、四隣に震ふ。故に居る所、城池を設けず。然れども、氏康・信長、好を謙信に通ずと聞けば、則ち岩殿・久能・吾妻の三城を築き以て之に備ふ。謙信、從約を屑しとせず。故を以て事なきのみ。今、隣國に復謙信の如きものなし。安ぞ備へざるべけんや」と。勝頼、之を然りとし、乃ち葦崎に城き、號して新府と曰ふ。信良、勝頼の女を娶り婦と爲さんと欲す。武田信豊、二嬖に賂す。乃ち信豊に適く。信良、之を啣み、終に款を織田氏に通ず。諸の公族・諸將も、亦款を送るもの多し。木曾義昌は、勝頼の妹婿たり。其の誅求に苦しみ、陰に信長に降り、其の兵を導かんと請ふ。來つて之を告ぐるものあり。二嬖斥け虚言と爲す。已にして事覺はる。十年正月、勝頼、義昌を討たんと欲す。阿部忠高曰く「其の地險狹なり。輒く往くべからず。臣請ふ、先づ往き、説いて其の計を紓くし、而して君の兵稍く其の後に從はば、可なり」と。二嬖之を沮む。遂に信豊に

命じ、五千人に將とし、雪を冒し赴き討たしむ。義昌に鳥居嶺に遇ひ、大に敗れて歸る。

勝頼の領土は日に削り取られた。二嬖は、信長と和睦することを勧めた。小山田昌辰がいふのに「もう手遅れです。そんなことをすれば、信長の侮を増すばかりです」と。勝頼は承知しなかつた。織田氏の人質を還して、和睦を願ひ出た。信長の返書の文句が非常に横柄であつた。穴山信良は又勝頼に説いていふのに「先殿様の威勢は四隣を震ひ恐れさせました。だから居られるところに城も堀も作られなかつた。併し、氏康・謙信は北條・織田と連合して當方を攻めることを心よく思はなかつたのです。それ故格別の事件も起らなかつたので御座います。今隣國には謙信のやうな潔い者はあません。いつ何時合従して攻め込むものとも限りませんから、どうして備へずに居られませう」と。勝頼もさうだと思ひ、そこで葦崎に城を築いて新府と名づけた。信良は勝頼の娘を俘の嫁にしたいと思つた。武田信豊は二嬖に賄賂を送つて勝頼の娘を取り持つやうに頼んだ。そこで信豊の方に嫁入させた。信良は之を怨んで終に織田氏に内通した。諸々の公族、諸將にも亦内通するものが多かつた。木曾義昌は勝頼の妹婿であつた。併し軍用金などの取り立てが殿しいので苦しみ、内々信長に降参して、その兵を案内し度いと申し出た。それを勝頼の所へ来て告げたものがあつた。二嬖はしりぞけて虚言たした。その内に事件が愈々發覺した。十年五月、勝頼は、義昌を討たうと思つた。すると阿部忠高がいふのに「木曾は土地險阻で狭く、容易に往くことの出来ない所です。私が往つて義昌に説いて、その備へを緩めるやうに致しませう。そして、君の兵はぼつくとその後からついてお出でになれば宜しいです」と。二嬖は之を邪魔立てした。遂に信豊に命じ五千人に將として雪をもかまはず征伐に行かせた。義昌に鳥居嶺で、出遇ひ、大敗

して歸つて來た。

質子（信長の季子御坊丸） ○紓（謀叛の計畫を） ○鳥居嶺（瀧）

二月、勝頼將兵二萬、出陣諏訪、遣諸將分守要害。而信長已遣長子信忠、引兵十餘萬、自木曾入瀧川、一益川、尻鎮吉等、爲前部。德川氏、北條氏各、大舉應之。下條信氏棄瀧澤、走小笠原信嶺、以松尾降。信忠入至桔梗原。勝頼召諸將于諏訪、聚議不決。城昌茂進而請曰、「方今之勢、不可一日猶豫。臣與尹松得假五千兵、爲先鋒。昌幸、昌辰等、以餘兵繼進、敵不復設。」柵如長篠之役、我必克之。勝頼問之、二嬖曰、「少年者所言、不可用也。」阿部忠高曰、「臣遣間視敵、敵深入客地、離而不整、可襲也。我夜合兵疾進、挫其前部、以破其膽。」二嬖不許。已而信良叛降德川氏。駿河諸城皆解走。獨田中守將依田信蕃不下。先是、德川氏數攻信蕃、不得志。至是、使人說降之。對曰、「吾知守城而已。不知外事。」乃使信良以書諭之。

二月、勝頼、兵二萬に將とし、出で諏訪に陣し、諸將を遣はし、要害を分ち守らしむ。而して信長已に長子信忠を遣はし、兵十餘萬を引き、木曾より入らしむ。瀧川一益川、尻鎮吉等、前部たり。德川氏、北條氏各

大舉して之に應ず。下條信氏、瀧澤を棄てて走る。小笠原信嶺、松尾を以て降る。信忠入り桔梗原に至る。勝頼、諸將を諏訪に召し、聚議すれども決せず。城昌茂、進み請うて曰く「方今の勢、一日も猶豫すべからず。臣、尹松と五千の兵を假るを得て、先鋒と爲り、昌幸、昌辰等、餘兵を以て繼ぎ進まば、敵、復柵を設くること長篠の役の如くならずして、我れ必ず之に克たん」と。勝頼之を二斐に問ふ。二斐曰く「少年者の言ふ所用ふ可からざるなり」と。阿部忠高曰く「臣、間を遣はして敵を覗はしむるに、敵深く客地に入り、離れて整はず。襲ふべきなり。我れ夜、兵を合せ疾く進み其の前部を挫き、以て其の膽を破らん」と。二斐許さず。已にして信良、叛いて、徳川氏に降る。駿河の諸城、皆解走す。獨り田中の守將依田信蕃下らず。是より先き、徳川氏、數信蕃を攻め、志を得ず。是に至り、人をして説いて之を降さしむ。對へて曰く「吾は城を守るを知るのみ。外事を知らず」と。乃ち信良をして、書を以て之を諭さしむ。

二月、勝頼は、兵二萬を引きつれて諏訪に出陣し、諸將を遣はして、要害の所を分ち守らしめた。而して一方信長は既に長子信忠を遣はし、兵十餘萬をつれて、木曾から入らしめた。瀧川一益・川尻鎮吉等は先手となつた。徳川氏・北條氏も各大軍を起して信長に加勢した。下條信氏は瀧澤を棄て、逃げ去つた。小笠原信嶺は松尾城を率ゐて降参した。信忠は入つて桔梗原に着いた。勝頼は諸將を諏訪に呼び寄せて聚り議したが意見はまとまらなかつた。城昌茂は進み出て請うていふのに「今日の形勢では一日たりとも猶豫しては居られません。私は尹松と二人で五千人の兵を拜借させて戴き、先鋒となり、そして、昌幸・昌辰等はその餘の兵を引きつれて繼ぎ進めば敵は長篠の戦争の時のやうに柵を慥へることもならず味方はきつと勝ちます」と。阿部忠高がいふのに「私は忍びの者を遣はして敵の様子を捜らせました。敵は深く他人の國に入り込んで、ちりちりに離れて

陣立も整つておられません。此の際襲ひ討つべきです。我が軍は、夜、兵を合せて急に進み、その先手を打ち破り、敵の荒膽を破りませう」と。二斐は之をも許さなかつた。その内に信良は叛いて、徳川氏に降つた。駿河の諸城は皆守を解いて走つた。たゞ田中の守將依田信蕃だけは降参しなかつた。これより前、徳川氏は度々信蕃を攻めたがうまく行かなかつた。この時使を遣はして信蕃に降参を説き勧めた。信蕃は答へていふのに「余は城を守ることだけを知つてゐる。その外の事は何も知らぬ」と。そこで信良をして書面を以て之を諭させた。

語釋 松尾(驛飛) ○田中(河)

三月、信蕃出歸甲斐。徳川氏招以厚祿。辭曰「吾赴國難。未暇謀家。諏訪軍潰。在者僅三千。勝頼乃走。歸新府。信忠合兵圍高遠。城將仁科信盛與小山田昌辰固守。信忠使辯士入説曰「孤城抗大敵。齏粉可待。苟出降。以爲將增其邑。」昌辰曰「吾報先公。正在今日。若何爲者。敢來誘我乎。執使者。截其耳鼻。放還之。信忠怒。以信嶺爲導。疾攻昌辰。力戰數出。狙擊信忠。不克。城遂陷。與信盛及渡邊某皆死之。」

訓讀 三月、信蕃出で、甲斐に歸る。徳川氏、招くに厚祿を以てす。辭して曰く「吾は國難に赴く。未だ家を謀るに暇あらず」と。諏訪の軍潰え、在る者僅に三千。勝頼乃ち走り、新府に歸る。信忠、兵を合せ高遠を圍む。城將仁科信盛、小山田昌辰と固く守る。信忠、辯士をして入り説かして曰く「孤城、大敵に抗す。齏粉待つべし。苟も出で降らば、以て將と爲し、其の邑を増さん」と。昌辰曰く「吾れ先公に報ずるは、正に今日に在り。」

若、何爲るものぞ、敢て來り我を諷ふか」と。使者を執へ、其の耳鼻を截り、之を放還す。信忠怒り、信嶺を以て導と爲し、疾く攻む。昌辰、力戦し、數出でて信忠を狙撃す。克たす。城遂に陥る。信盛及び渡邊某と、皆之に死す。

三月、信蕃は城から出で、甲斐に歸つた。徳川氏は大祿を以て之を招いた。併し之を辭退していふには「私は國の難儀に赴くのである。一家のことなどを計る暇はない」と。諏訪の軍勢は潰えて残つてゐるものは、わづかに三千人であつた。そこで勝頼は走つて、新府に歸つた。信長の長男信忠は兵を合せて高遠城を取り圍んだ。城將仁科信盛は、小山田昌辰と二人で固く之を守つて居た。信忠は辯舌の上手な者をして城に入つて説かせていふには「孤立無援の城を以て大敵に對抗してゐる。併しいづれば粉微塵にされるのである。もしも出で、降参すれば、大將となして地行を増さうではないか」と。昌辰は答へていふには「余が先殿様に報ゆるのはまさしく今日に在るのである。貴様は何する者だ、來つて余を誘惑するとは」と。使者を捕へ、その耳と鼻を殺いで之を追ひかへした。信忠は怒つて、信嶺を路案内となし、急に攻め立てた。昌辰は力のあらん限り戦つて、度々城から出ては信忠を狙ひ撃つた。併しうまく行かなかつた。城は遂に陥つた。昌辰は信盛及び渡邊某と皆討死した。

於是、敵兵四面來薄、而新府城壁未全。勝頼欲徙避之。嫡子信勝慷慨曰、「事已至此。何之而免乎。當焚旗與無楯、徐自裁而已。」勝頼未答。小山田義國欲誘執勝頼、以市織田氏也。説曰、「臣、邑岩殿、險可保。眞田昌幸曰、「弗若。臣、邑吾妻、險有積粟。請以

死奉君。勝頼乃令昌幸先歸。二嬖曰、「昌幸新義國故。去故就新、奈何。」勝頼遂徙。岩殿令義國先歸待己。於是焚殺諸叛臣、質三百人、召死節者質十人、願與金各百兩、散遣之。收其重器、以殘兵五百赴岩殿。願望二府、君臣相顧泣下。

是に於て、敵兵、四面より來り薄る。而して新府の城壁未だ全からず。勝頼徙り之を避けんと欲す。嫡子信勝、慷慨して曰く「事已に此に至る。何くに之きて免れんや。當に旗と無楯とを焚いて、徐に自裁すべきのみ」と。勝頼未だ答へず。小山田義國、勝頼を誘ひ執へ、以て織田氏に市らんと欲するや、説いて曰く「臣の邑岩殿は險にして保つべし」と。眞田昌幸曰く「臣が邑吾妻の險にして積粟あるに若かず。請ふ、死を以て君に奉ぜん」と。勝頼乃ち昌幸をして先づ歸らしむ。二嬖曰く「昌幸は新なり。義國は故なり。故を去て、新に就く、奈何」と。勝頼、遂に岩殿に徙らんとし、義國をして先づ歸り己を待たしむ。是に於て、諸の叛臣の質三百人を焚殺し、節に死する者の質十人を召し、金各百兩を願與し、之を散遣す。其の重器を收め、殘兵五百を以て岩殿に赴く。二府を願望し、君臣相顧り泣下る。

そこで敵兵は四方から來り攻め寄せた。そして一方新府は城普請がまだ出来上らなかつた。勝頼は他に徙つて敵を避けようと思つた。嫡子の信勝は慨いていふのに「萬事このやうになつて終つたのであります。何處へ往つたつて免れることは出来ませぬ。義家以來の旗と無楯の鎧とを燒いて、心靜に自害なされるばかりで御座います」と。勝頼はそれにはまだ返事をしなかつた。すると小山田義國は勝頼を生捕り、織田氏に渡して褒美に有りつかうと企んでゐたので、勝頼に説き勸めていふには「私の領分の岩殿は險阻で固めるに都合が宜しい」と。

日君の難に赴けば、君の御目鏡違ひを世間に顯はすことになりませう。しかし難に赴かないと、私の義理を缺くことになりませう。私の義理を缺かうよりは、むしろ君のお眼鏡違ひを顯はすまでとす。そこで問ふのに「長坂調閑はどこに居りますか」と。昌恒答へて曰ふに「昨日逃げた」と。跡部勝資はどうかと尋ねると「これも亦逃げた」といつた。小山田將監は如何にと尋ねると「もう逃げてから十日にもなる」といつた。友信はいふのに「あゝ、そんな事になるだらうと、久しい前から思つて居た」といつた。勝頼は面目なくなつたやうつむいて何も言はなかつた。

語釋 天目山・田野(斐)

已而山僧與村民謀導敵索勝頼。勝頼乃使其配北條氏奔相摸。對曰妾何顔見阿兄乎。又使信勝問道奔陸奥。信勝曰大人宜奔耳。兒辱冢嗣。義當死于此。勝頼曰然則吾與女共死。顧女未行。擐甲禮而行。禮而死。乃請秋山光次爲賓。被信勝以無楯。比禮畢。敵兵奄至。衆飢不能起。勝頼以白布約髮。拔刀親戰。信勝以槍。昌恆以弓翼之。卻敵三次。山縣氏卒辻某聚叛人。自後山敵射我兵皆斃。昌恆矢盡。且拔刀敵叢槍擬之。勝頼走救昌恆。爲敵刺喉及腋。死。年三十七。信勝亦死。年十六。昌恆友信光次等皆死之。武田氏滅。

訓讀 已にして山僧、村民と謀り、敵を導き勝頼を索む。勝頼乃ち其の配北條氏をして、相摸に奔らしむ。對へて曰く「妾、何の顔あつて阿兄を見んや」と。又信勝をして、問道より陸奥に奔らしむ。信勝曰く「大人、宜しく奔るべきのみ。兒、冢嗣を辱うす。義當に此に死すべし」と。勝頼曰く「然らば則ち吾れ女と共に死なん。顧ふに、女未だ擐甲の禮を行はず。當に禮を行つて死すべし」と。乃ち秋山光次に請ひ賓と爲し、信勝に被するに無楯を以てす。禮畢る比、敵兵奄ひ至る。衆飢えて起つ能はず。勝頼、白布を以て髮を約し、刀を抜き親ら戦ふ。信勝は槍を以て、昌恆は弓を以て、之を翼け、敵を卻くること三次。山縣氏の卒辻某、叛人を聚め、後山より敵射す。我兵皆斃る。昌恆、矢盡き、且に刀を抜かんす。敵、槍を義めて之に擬す。勝頼走り昌恆を救ひ、敵に喉及び腋を刺され死す。年三十七。信勝も亦死す。年十六。昌恆・友信・光次等皆之に死す。武田氏滅ぶ。

通釋 其の内に天目山の山僧が村民と相談して敵の案内をして勝頼をさがし求めた。そこで勝頼は其の妻の北條氏に相摸に奔り歸るよう勧めた。すると對へていふのに「妾はどんな顔をして兄に遇はれませうや」と。又信勝をして抜け道から陸奥に走らせようとした。すると信勝がいふのに「父君こそ走られたら宜いでせう。私は武田の家督を辱くして居ります。義として、こゝで討死すべき筈で御座います」と。勝頼がいふのに「しからば余はお前と一緒に死なう。しかし思ふにお前はまだ鎧着の儀式を済ませて居らぬ。その儀式を行つてから死ぬべきである」と。そこで秋山光次に頼んで烏帽子親となし、信勝に無楯の鎧を着せた。その儀式の終る頃に敵兵が不意に襲ひ來つた。皆の者は腹が減つて起つことも出来なかつた。勝頼は白い布で鉢巻をなし、刀を抜いて親ら戦つた。信勝は槍で、昌恆は弓で之に付き添ひ、三度も敵を退けた。山縣氏の足輕の辻彌兵衛なる者が叛人共を聚めて山の後から射下ろした。我が兵は皆斃れた。昌恆は矢種がなくなつたので刀を抜かうとした。敵は

槍を集中して突き刺さうとした。勝頼は走つて昌恒を助けようとして却つて敵に喉と脇腹とを刺されて死んだ。年三十七であつた。信勝も亦討死した年は十六であつた。昌恒・友信・光次等も皆討死した。かくて武田氏は滅亡した。

織田氏入甲斐懸令曰氏族將士出降者復邑勝頼祖叔父信就信光叔父信綱信龍弟信貞從弟信豐及二嬖義國等相率出降皆爲所誅獨穴山信良得領甲斐一郡上野諸將非武田氏世臣者盡隸於瀧川一益信濃諸將隸於森長可與柴田勝家等相爲掎角以圖上杉氏。

訓 織田氏、甲斐に入り、令を懸けて曰く「氏族の將士出で降るものは邑を復せん」と。勝頼の祖叔父信就・信光・叔父信綱・信龍・弟信貞・從弟信豐及び二嬖義國等、相率ゐて出で降り、皆誅する所と爲る。獨り穴山信良甲斐の一郡を領するを得たり。上野の諸將、武田氏の世臣に非ざるものは、盡く瀧川一益に隸し、信濃の諸將は、森長可に隸し、柴田勝家等と掎角を相爲し、以て上杉氏を圖る。

通 織田信長は甲斐に入り號令を掲げて曰ふのに「武田氏の一族將士で出で、降參する者にはもとの領分を與へる」と。勝頼の大叔父信就・信光・叔父の信綱・信龍・弟の信貞・從弟の信豐、及び二嬖（長坂調閑・跡部勝資）小山田義國など相率ゐて出で、降參した。併し皆誅せられた。たゞ穴山信良だけは甲斐の一郡を領するこゝが出来た。上野の諸將で武田家譜代の臣でないものは皆瀧川一益につき従ひ、信濃の諸將は森長可につき従

ひ、柴田勝家等と互に助け合つて前後から押し寄せて、上杉氏を滅ぼさうと圖つた。

語釋 祖叔父（祖父の兄弟）○掎角（左傳の字面。鹿の後足をとるを掎といひ、前後から鹿を制する意）

時北陸訛言信長兵大敗於甲斐土寇羣起景勝遣兵助之與勝家等戰于越中勝家憚越後兵拒以塹柵其他諸將侮景勝出柵外戰輒見擊破瀧川一益聞之遣兵入越後五月景勝迎擊一益兵三國嶺大破之自將入越中拔魚津轉入信濃與森長可戰勝家等復取魚津。

訓 時に北陸、訛言す。信長の兵、大に甲斐に敗ると。土寇、群起す。景勝、兵を遣はして之を助けしめ、勝家等と、越中に戰ふ。勝家、越後の兵を憚り、拒ぐに塹柵を以てす。其の他の諸將は、景勝を侮り、柵外に出でて戰ひ、輒ち擊破せらる。瀧川一益、之を聞き、兵を遣はし越後に入らしむ。五月、景勝、一益の兵を三國嶺に迎へ撃ち、大に之を破り、自ら將として越中に入り、魚津を抜き、轉じて信濃に入り、森長可と戰ふ。勝家等復魚津を取る。

通 その時北陸地方で間違つた噂を立てた。信長の兵は甲斐で大負けを食つたと。それがために一揆が諸方に起つた。上杉景勝は兵を遣はして之を助けさせ、勝家等と越中で戰つた。勝家は越後の兵が強いので恐れ憚つて、堀や柵を作つて之を拒いだ。その他の諸將は景勝の若いのを侮つて柵外に出て戰ひ、譯なく撃ち破られた。瀧川一益は、之を聞いて兵を遣はして越後に入らしめた。五月、景勝は一益の兵を三國嶺に迎へ撃つて、大に之

を破り、自ら大將となつて、越中に入り、魚津を陥れ、方向を轉じて信濃に入り、森長可と戦つた。勝家等はまた魚津を取り戻した。

五月、穴山信良與徳川氏俱入京師。六月、信長爲其將明智光秀所弑。信良走歸、途遇盜、被殺。一益長可勝家、聞變皆西走。而武田氏故地大亂。諏訪頼忠、小笠原貞慶、村上國清、皆舉兵欲復先業。景勝自將兵七千助之。七月、景勝入貝津。北條氏、徳川氏各以數萬人來爭。眞田昌幸、高坂源吾、初屬景勝。已而通北條氏。曰、臣爲内應。景勝可獲。景勝覺之、執誅源吾。北條氏不知。以昌幸爲先導。濟筑摩川、以待源吾。報、景勝送源吾首請戰。北條氏懼、引去。已而徳川氏盡取甲斐、信濃。景勝定河中四郡而歸。

五月、穴山信良、徳川氏と俱に京師に入る。六月、信長、其の將明智光秀の弑する所と爲る。信良走り歸り、途に盜に遇つて殺さる。一益、長可、勝家變を聞き皆西に走る。而して武田氏の故地、大に亂る。諏訪頼忠・小笠原貞慶・村上國清、皆兵を擧げ、先業を復せんと欲す。景勝自ら兵七千に將として之を助く。七月、景勝、貝津に入る。北條氏・徳川氏、各數萬人を以て來り争ふ。眞田昌幸、高坂源吾、初め景勝に屬す。已にして北條氏に通す。曰く「臣、内應を爲さば、景勝獲べし」と。景勝之を覺り、執へて源吾を誅す。北條氏知らず。昌幸を以て先導と爲し、筑摩川を濟り、以て源吾の報を待つ。景勝、源吾の首を送り戦はんと請ふ。北條氏

懼れ、引き去る。已にして徳川氏、盡く甲斐、信濃を取る。景勝、河中の四郡を定めて歸る。

五月、穴山信良は徳川氏と共に京都に攻め上つた。六月、信長は其の將明智光秀の爲めに弑せられた。信良は走り歸り、途中で盜賊に出遇つて殺された。一益・長可・勝家は信長の死を聞いて、皆西に走つた。そして武田氏の舊領は大層亂れた。諏訪頼忠・小笠原貞慶・村上國清は皆兵を擧げて祖先の舊領を取り戻さうとした。景勝は、自ら兵七千を率ゐて之を助けた。七月、景勝は貝津に入つた。北條氏・徳川氏は各數萬人を率ゐて來り争つた。眞田昌幸、高坂源吾は以前景勝に屬して居た。その内に兩人共に北條氏に内通した。そして曰ふのに「私が裏切れば景勝などは生捕りに出来る」と。景勝は之を覺つて源吾を執へて殺した。併し北條氏の方ではこの事を知らなかつた。昌幸を路案内となし、筑摩川を渡つて源吾の知らせを待った。景勝は源吾の首を送つて、戦を申込んだ。北條氏は恐れて引き去つた。その内に徳川氏は全部甲斐、信濃を取つた。景勝は河中島の四郡を平定して歸つた。

景勝幼有武幹。心誓報謙信恩以償。政景罪。謙信嘗欲誅深澤九鬼者。景勝時年十四。手斬二人。謙信賞賜。政景舊邑。數從軍有功。謙信卒而三年、克景虎將士盡伏。獨柴田因幡者、據新發田不下。景勝常有内顧。以故不能專營外事。織田氏將筑前守羽柴秀吉、誅明智光秀。畧定京畿。與柴田勝家戰勝而殺之。取加賀能登。十二年遣使來通好。曰、吾欲攻佐佐成政。以取越中。願子勿救。景勝曰、吾素與成政仇。而

越中本吾地。吾欲先取之耳。乃自將兵入越中。十月攻宮崎城。一鼓拔之。謂使者曰。越後男子用武如此。返語筑前守。吾於越中欲取。即取而不取者。以讓子也。

訓讀 景勝、幼より武幹あり。心に謙信の恩を報じ、以て政景の罪を償はんことを誓ふ。謙信、嘗て深澤九鬼といふものを誅せんと欲す。景勝、時に年十四。手づから二人を斬る。謙信、政景の舊邑を賞賜す。數軍に従つて功あり。謙信卒して三年、景虎に克ちて、將士盡く伏す。獨り柴田因幡といふ者、新發田に據り下らず。景勝、常に内顧する所あり。故を以て、専ら外事を營む能はず。織田氏の將筑前守羽柴秀吉、明智光秀を誅し、京畿を略定し、柴田勝家と戦ひ勝ちて之を殺し、加賀、能登を取る。十二年、使を遣はし、來つて好を通じて曰く、「吾れ佐佐成政を攻めて越中を取らんと欲す。願はくは子、救ふ勿れ」と。景勝曰く「吾れ素より成政と仇なり。而して越中は本、吾が地なり。吾れ先づ之を取らんと欲するのみ」と。乃ち自ら兵に將として越中に入る。十月、宮崎城を攻め、一鼓して之を抜き、使者に謂つて曰く「越後男子、武を用ふるに此くの如し。返つて筑前守に語れ。吾れ越中に於て、取らんと欲すれば即ち取る。而して取らざるは、以て子に讓るなり」と。

通釋 景勝は幼少より武勇で大将の器量があつた。彼は自分が謙信に養育された恩に報い、實父政景叛逆の罪を償はうと心中誓つてゐた。謙信は嘗て深澤九鬼といふものを殺さうと思つた。その時景勝は十四歳であつた。手づから、この二人を斬つた。謙信はその勇を賞めて、政景の舊の領地を賜はつた。度々軍に従つて、手柄を立てた。謙信が死んで三年目に景虎に勝つてからは將士も皆服従した。たゞ柴田因幡といふ者が新發田に立て籠つて降参しなかつた。景勝はいつも自分の内輪に心を引かれる所があつた。その爲めに専心國外の事に從事するこ

とが出来なかつた。織田氏の大將の筑前守羽柴秀吉は明智光秀を誅戮して京畿地方を平定し、柴田勝家と戦つて之を殺し、加賀、能登を取つた。十二年、使者を立て好を通じて曰ふには「余は佐佐成政を攻めて越中を取らうと思つて居る。何卒貴公には成政を助けずに置いて貰ひ度い」と。景勝は答へていふには「余は元來成政とは仇である。その上、越中は本、吾が領分である。だから余が先きに之を取らうと思ふ」と。そこで、自ら兵に將として越中に入り込んだ。十月、宮崎城を攻め、一度で之を陥れ、羽柴氏の使者に向つていふには「越後男子の戦の仕方は先づこんなものである。返つて筑前守(羽柴)に話して貰ひ度い。余は越中で取りたいと思ふものはすぐに取つて終ふ。そして取らないものは貴公に讓るのであるから何卒遠慮なく取つて貰ひたい」と。

語釋 政景罪(謙信に反) ○新發田(越) ○宮城(中)

十三年四月、秀吉攻降成政。取越中。五月、秀吉獨率石田三成等三十人來入越後。自稱使者。至薄水城。見城將須賀。告以實欲面見景勝。計事須賀以兵守之。而馳告景勝。請執殺之。景勝不許。曰。彼身司天下權。而踰險入敵國者。蓋恃前約。以吾必不食言也。殺之不義。即日與直江兼續等六十餘人見秀吉。秀吉屏人與語。獨兼續與三成得侍。已而別去。七月、上田城主真田昌幸、畔德川氏。復屬景勝。送質乞援。景勝遣須田某、本莊某等將信濃兵六千赴援。兵少利。景勝欲大舉繼之。

德川氏兵引去。十二月、秀吉又使使厚贈越後君臣、促其入朝。

訓讀 十三年四月、秀吉、成政を攻め降し、越中を取る。五月、秀吉、獨り石田三成等三十人を率ゐ、來つて越後に入り、自ら使者と稱し、薄氷城に至り、城將須賀を見、告ぐるに實を以てし、面のあたり景勝を見て、事を計らんと欲す。須賀、兵を以て之を守り、馳せ景勝に告げ、執へて之を殺さんと請ふ。景勝許さずして曰く「彼れ身、天下の權を司る。而して險を踰え敵國に入るは、蓋し前約を待み、吾れ必ず言を食ますと以へばなり。之を殺すは不義なり」と。即日、直江兼續等六十餘人と、秀吉を見る。秀吉、人を屏げ與に語る。獨り兼續と三成と待するを得たり。己にして別れ去る。七月、上田城主眞田昌幸、徳川氏に畔き、復景勝に屬し質を送り援を乞ふ。景勝、須田某・本莊某等を遣はして、信濃の兵六千に將として赴き援けしむ。兵、利少し。景勝、大舉して之に繼がんと欲す。徳川氏の兵引き去る。十二月、秀吉、又使をして厚く越後の君臣に贈らしめ、其の入朝を促す。

通釋 十三年四月、秀吉は成政を攻め降して、越中を取つた。五月、秀吉はひとり石田三成等三十人をつれて越後に入り、自身使者だと言つて薄氷城に至り、城將須賀某に會つて、實は秀吉だかと眞實をあかし、景勝に面と向つて相談したいと思ふと申し込んだ。須賀は兵士で之を守つて置いて、自分は馳せて、景勝に告げ、秀吉を捕へて殺したいと願ひ出た。景勝は許さないで曰ふのに「彼は今や自ら天下の大權を掌つてゐる。その者が斯うして險阻を越えて、敵國に入つたのは、思ふに、此の前の和睦の約束を信頼し、余が決して、詐を言はない男だと思つてゐればこそである。それを殺すのは不義である」と。その日、すぐ直江兼續等六十餘人と往つて秀吉に會つた。秀吉は、人拂をして共に語つた。たゞ兼續と三成とだけが傍に侍することを許された。それが濟んでは別れ去つた。七月、上田の城主眞田昌幸は徳川氏に叛いてまた景勝に屬き、人質を送つて、援助を乞うた。景勝は須田某・本莊某等を遣はし、信濃の兵六千に將として援けに行かせた。併しあまり香しくなかつた。景勝は大軍を起して繼いで往かうと思つた。所が徳川氏の兵は引き去つて終つた。十二月、秀吉は、又使者を立てて厚く越後の君臣に物を贈らしめ、景勝が京都に入朝するように催促した。

十四年五月、景勝入朝。秀吉供帳路次、爲奏敍正四位上、任參議。七月、歸國。是歲、陷新發田、盡定越後。十五年、定佐渡莊内。十七年、景勝又入京師。進從三位、遷中納言。直江兼續爲四位侍從。藤田泉澤、安田三臣、皆敍四位。兼續自父實綱、常參謀議、爲仇人刺死。無子。謙信命近士樋口與六爲嗣。是爲兼續。多文武材能。事景勝、尤見寵任。十八年、秀吉東伐北條氏。景勝與前田利家、自東山道進、下數十城。北條氏滅。又與利家、徇陸奥、出羽。文祿元年、從秀吉伐朝鮮。陣那古耶。二年、景勝將兵入朝鮮、築釜山城而歸。

訓讀 十四年五月、景勝、入朝す。秀吉、路次に供帳し、爲めに奏して正四位上に敍し、參議に任す。七月、國に歸る。是の歲、新發田を陥れ、盡く越後を定む。十五年、佐渡・莊内を定む。十七年、景勝、又京師に

入る。從三位に進み、中納言に遷る。直江兼續、四位の侍從と爲る。藤田・泉澤・安田の三臣、皆四位に叙せらる。兼續、父實綱より、常に謀議に參し、仇人に刺死せられ、子なし。謙信、近十樋口與六に命じ嗣と爲らしむ。是を兼續と爲す。文武材能多し。景勝に事へ、尤も寵任せらる。十八年、秀吉、東北條氏を伐つ。景勝、前田利家と、東山道より進み、數十城を下す。北條氏滅ぶ。又利家と、陸奥・出羽を徇ふ。文祿元年、秀吉に従ひ朝鮮を伐ち、那古耶に陣す。二年、景勝、兵に將として朝鮮に入り、釜山城を築いて歸る。

十四年五月、景勝は入朝した。秀吉は路筋に色々手當てをして之をもてなし、景勝の爲めに奏請して正四位上に叙し、參議に任じて戴いた。七月、歸國した。この年、新發田を陥れて、全部越後を平定した。十五年、佐渡・莊内をも平定した。十七年、景勝は又京都に入朝した。從三位に進み、中納言に遷つた。直江兼續は四位の侍從にして貰つた。藤田・泉澤・安田の三臣も皆四位に叙せられた。兼續は、父の實綱の時から、常に謀の相談に關係してゐたが、仇の爲めに刺し殺されて子がなかつた。謙信は近侍の樋口與六に命じてその相續者とならしめた。これが兼續である。この兼續は文武の材能の多かつた人である。景勝に事へて中でも最も氣に入つて信任せられてゐた。十八年、秀吉は東、北條氏を伐つた。景勝は、前田利家と東山道から進み、數十城を攻め落した。かくて北條氏は滅亡した。又利家と陸奥、出羽を徇へ下した。文祿元年、景勝は秀吉に従つて、朝鮮を征伐し、那古耶に陣取つた。二年、景勝は、兵に將として朝鮮に入り、釜山城を築いて歸つて來た。

文武材能兼續は左傳、文選等を版 ○文祿後編成天 皇の年號

是時、上杉氏所領、歲入可三百萬石。秀吉心畏惡景勝之能、又度謙信久訓其國

人皆戴景勝、欲徙其封。嘗從容問之曰、「卿國歲入幾何？」景勝恐被削、不以實對。曰、「七八十萬石耳。」秀吉佯驚曰、「何少也。」因徙之會津、食百二十萬石。賜兼續以米澤地三十萬石。賜越後于堀秀治。景勝大悔之。是歲慶長二年也。

是の時、上杉氏領する所の歲入三百萬石可り。秀吉、心に景勝の能を畏惡し、又謙信久しく其の國に訓へ、國人皆景勝を戴くを度り、其の封を徙さんと欲す。嘗て從容として之に問うて曰く、「卿の國の歲入幾何ぞ」と。景勝、削られんことを恐れ、實を以て對へず。曰く「七八十萬石のみ」と。秀吉佯り驚いて曰く「何ぞ少き」と。因つて之を會津に徙し、百二十萬石を食ましむ。兼續に賜ふに米澤の地三十萬石を以てし、越後を堀秀治に賜ふ。景勝、大に之に悔ゆ。是の歲、慶長二年なり。

この時、上杉氏領内の一年の收入は約三百萬石であつた。秀吉は心中景勝の材能を畏れ惡み、又謙信が長い間その國人を訓練し、國人も亦皆景勝を推戴してゐて、中々其の勢の強いことを心配し、何とかして所換をしようと思つて居た。ある時、從容として景勝に問うていふのに、「貴公の國の歲入は幾ら位あるか」と。景勝は削られるのを恐れて實際を答へなかつた。曰ふのに「七八十萬石です」と。秀吉はわざと驚いて曰ふのに「それはまた少いではないか」と。そこで之を會津に徙して百二十萬石を食ましめた。兼續は米澤の地三十萬石を賜ひ、越後を堀秀治に賜はつた。景勝は非常に之を残念に思つた。この歲は慶長二年であつた。

三年、秀吉有疾。嗣子秀頼猶幼。乃以景勝與德川前田毛利浮田氏、竝稱五大老、與

爲盟約。秀吉薨。德川公威權獨熾。四年、石田三成與直江兼續謀、勸景勝舉兵。曰、「群牧共願推公爲諸將、載書示之。因密定議。七月、與佐竹義宣皆就國、城香指原、修壘寨、峙糧餉、誘陸奥出羽土兵、齊起。又使人招越後遺民、遺民競起、應之。堀氏不能制。五年正月、使藤田信吉賀正於大坂。德川公厚賜之。信吉歸、驟諫景勝、兼續欲殺之。三月、信吉挈家奔歸德川氏。德川氏使伊奈圖書來諭景勝、西上、景勝不聽。數德川氏背盟十罪。德川公終決意東伐。令前田、佐竹、伊達、最上氏四面來擊。伊達氏國會津、東境先衆而至。其將伊達成實、片倉景綱將兵來侵。景勝遣兵擊卻之。

三年、秀吉、疾あり。嗣子秀頼、猶ほ幼なり。乃ち景勝と、德川・前田・毛利・浮田氏とを以て、並に五大老と稱し、與に盟約を爲さしむ。秀吉、薨す。德川公、威權獨り熾なり。四年、石田三成、直江兼續と謀り、景勝に勸め兵を擧げしむ。曰く、「群牧共に公を推さんことを願ふ」と。諸將の載書を爲り之を示す。因つて密に議を定む。七月、佐竹義宣と皆國に就き、香指原に城き、壘寨を修め、糧餉を貯て、陸奥・出羽の土兵を誘ひ、齊しく起たしめ、又人をして越後の遺民を招かしむ。遺民競ひ起ち之に應ず。堀氏、制する能はず。五年正月、藤田信吉をして、正を大坂に賀せしむ。德川公厚く之に賜ふ。信吉歸り、驟、景勝を諫む。兼續、之を殺さんと欲す。三月、信吉、家を挈へ、奔つて德川氏に歸す。德川氏、伊奈圖書をして、來り景勝に諭し西上せしむ。景勝

聽かず。德川氏の盟に背ける十罪を數ふ。德川公、終に意を決して東伐す。前田・佐竹・伊達・最上氏をして、四面より來り撃たしむ。伊達氏は會津の東境に國す。衆に先だつて至る。其の將伊達成實・片倉景綱、兵に將として來り侵す。景勝、兵を遣はし撃つて之を卻く。

通釋 慶長三年、秀吉は病氣に罹つた。嗣子の秀頼はまだ幼なかつた。そこで上杉景勝と、德川家康・前田利家・毛利輝元・浮田秀家とを以て並に五大老と稱し、與に秀頼を輔けるように誓をして、約束せしめた。かくて秀吉は薨去した。五大老の内、德川公の威權だけがひとり盛であつた。四年、石田三成は直江兼續と相談し、景勝に勸めて、兵を擧げさせることにした。そして曰ふのに、「諸大名は皆貴公を推して總大將としたいと願つてゐます」と。諸將の連判狀を作つて、景勝に見せた。それから内々に相談を決めた。七月、景勝は佐竹義宣と皆本國にかへり、景勝は、香指原に城を築き、寨を修繕し、兵糧を蓄へ、陸奥、出羽の土兵を引き込み、一齊に起たしめ、又人をやつて越後のものと人民を招かしめた。その遺民等は我もくと起つて之に味方した。新任の國主堀氏は之を取り鎮めることは出来なかつた。五年正月、藤田信吉をして大坂に年賀をする爲めに往かせた。德川公家康は手厚く之に物を賜はつた。信吉は國に歸つてから度々德川に對し兵を起すことに就て景勝を諫めた。兼續は之を殺さうと思つた。三月、信吉は家族をつれて出奔して德川氏に屬した。德川氏は伊奈圖書をよこして景勝に京都に上るよう諭さしめた。景勝は承知しなかつた。それ所かあべこべに德川氏が五大老の盟約に背いてゐる十箇條の罪を數へ立て、責めた。德川公は終に決心して上杉氏を征伐することにした。前田利家・佐竹義宣・伊達政宗・最上義光の諸氏をして四方から夾み撃たせた。伊達氏は會津の東境に領國を有してゐた。その關係で衆に先きだつてやつて來た。その將、伊達成實・片倉景綱は兵に將として侵して來た。景勝は兵を遣つて撃つて

之を退けた。

香指原(陸奥)

七月、徳川公統將帥百餘人、至小山。景勝軍長沼、分兵守險、以待之。石田三成、乃矯秀頼命、與毛利・浮田・島津・小西諸將俱舉兵、至美濃。八月、徳川公使庶長子秀康、以萬人守宇都宮、而自引兵西上。直江兼續請悉兵躡之。景勝弗聽。會秀康來請戰。景勝答曰、「先人用軍、未嘗乘人危。吾不敢違也。且公年少、非我敵。吾待內府返決戰耳。糧仗如缺乏、當相給焉。」乃收歸會津。徳川公之西也、命諸將曰、「景勝勁敵也。慎勿與爭鋒。」是以四鄰環守、不敢來犯。

訓讀 七月、徳川公、將帥百餘人を統べ、小山に至る。景勝、長沼に軍し、兵を分ち險を守り以て之を待つ。石田三成、乃ち秀頼の命を矯め、毛利・浮田・島津・小西の諸將と、俱に兵を擧げて、美濃に至る。八月、徳川公、庶長子秀康をして、萬人を以て宇都宮を守らしめ、而して自ら兵を引いて西上す。直江兼續、兵を悉して之を躡せんと請ふ。景勝聽かず。會秀康來り戰を請ふ。景勝答へて曰く、「先人、軍を用ふるに、未だ嘗て人の危きに乗ぜず。吾れ敢て違はざるなり。且つ公は年少にして、我が敵に非ず。吾れ内府の返るを待ち、決戦せんのみ。糧仗如し缺乏せば、當に相給すべし」と。乃ち收めて會津に歸る。徳川公の西するや、諸將に命じて曰く

「景勝は勁敵なり。慎んで與に鋒を爭ふ勿れ」と。是を以て、四隣環守し、敢て來り犯さず。

通釋 七月、徳川公家康は將帥百餘人を引率して、小山に着いた。景勝は長沼に陣取り、兵を分けて險を守り、徳川の來るのを待った。すると石田三成は詐つて秀頼の命令だといつて、毛利・浮田・島津・小西の諸將と一緒に兵を擧げて美濃に進み出た。八月、徳川公は側腹の長子秀康をして萬人を率ゐて宇都宮を守らせ、そして自分は兵をつれて、西、京都へ上つて行つた。直江兼續は全部の兵を擧げて之を尾撃したいと申し出た。併し景勝は聞き入れなかつた。丁度そこへ秀康が來て、戰を申し込んだ。景勝は答へていふのに「わが父が兵を動かすのには、人の危いところを付け込むやうなことは、一度もしたことがない。余もこの法に背くことは決してしない。それに貴公はまだ年も若くて我輩の相手にはなり申さぬ。余は内大臣殿(家康)の還るのを待つて勝負を決めたいと思ふ。若し兵糧武器に不足があればいつにても支給致すであらう」と。そこで、兵をまとめて會津に還つた。徳川公が西に向ふとき諸將に命じて曰ふのに「景勝は強い敵だ。滅多に之と戰を交へぬ様にせよ」と。そこで四隣の諸侯も遠卷に守つてゐて無暗に來り犯さなかつた。

語釋 先人(信謙) ○内府(家康は當時内)

九月、景勝以兵四萬附兼續、令攻最上義光于山形。義光設二十五砦待之、請援於伊達政宗。政宗發兵二萬赴之。兼續拔二十一砦進攻長谷城、起樓櫓、鑿地道、晝夜攻擊。城將志村高治善拒。景勝又遣中村式部攻上山城、不利。義光、政宗合兵來援。

兼續軍中有傳呼。曰「上國軍敗矣。」已而使者至。自會津傳三成敗聞。命班師。兼續曰「聞變而退怯也。」乃使入城告故。且日鼓衆齊登。陷其外城。而返。義光・政宗與高治・尾擊之。兼續返戰二十餘次。而至米澤。政宗進攻福島。本莊繁長守城。擊卻之。

九月、景勝、兵四萬を以て兼續に附し、最上義光を山形に攻めしむ。義光、二十五砦を設けて之を待ち、援を伊達政宗に請ふ。政宗、兵二萬を發し、之に赴く。兼續二十一砦を抜き、進み長谷城を攻め、樓櫓を起し、地道を鑿ち、晝夜攻撃す。城將志村高治善く拒ぐ。景勝又中村式部を遣はし、上山城を攻めしむ。利あらず。義光・政宗、兵を合せ來り援く。兼續の軍中、傳呼するものあり。曰く「上國の軍敗る」と。已にして使者、會津より至り、三成の敗聞を傳へ、命じて師を班さしむ。兼續曰く「變を聞き退くは、怯なり」と。乃ち人をして城に入り故を告げしめ、且日衆を鼓し齊しく登り、其の外城を陥れて返る。義光・政宗、高治と之を尾撃す。兼續返り戦ふこと二十餘次にして、米澤に至る。政宗進み福島を攻む。本莊繁長、城を守り、擊つて之を卻く。

九月、景勝は兵四萬を率ゐて兼續に與へ、最上義光を山形に攻めさせた。義光は二十五個所に砦を設けて、之を待ち、援助を伊達政宗に請うた。政宗は兵二萬を繰り出して援けに出かけた。兼續は二十一個所の砦を陥れ、進んで、長谷城を攻め、やぐらを作り、穴道を掘つて晝も夜も攻撃した。城將志村高治はよく之を拒いだ。景勝は又中村式部を遣はし、上山城を攻めしめた。併しうまく行かなかつた。義光・政宗は兵を合せて來り援けた。この時、兼續の軍中に傳へ叫ぶ者があつた。曰ふのに「上方の軍勢が敗れた」と。其の内に會津から使者が來て三成が敗れたといふ知らせを傳へ、軍を還すように命じた。兼續がいふのに「變事を聞いて退くのは臆病である」と。そこで使者を城内にやりその譯を話させ、翌日衆を勵まして一齊に攻め登り、その外側の城を陥れて返つた。義光・政宗は高治と一緒に追撃した。兼續は引き返して二十餘回も戦ひ、遂に米澤に歸着した。政宗は進んで福島を攻めた。本莊繁長は城を守り、擊つて之を退けた。

諸將 長谷城、上山城(初)

六年二月、政宗又來侵。繁長又擊卻之。政宗轉濟逢隈河。攻梁川。城將須田大炊、設四伏而與戰。破之。四月、政宗留兵備須田。而反攻本莊。本莊出距松川。侮敵不備。政宗乘曉而濟。擊敗之。本莊走入福島。須田聞之。濟逢隈河。破其兵。遂襲政宗。軍後與本莊夾擊。走之。景勝乃自將而出。政宗驚舍其軍。獨與十餘騎。問道走白石。德川公既克石田氏。天下歸之。景勝因秀康謝罪。德川公使人來促其西上。景勝即治行。將士皆危而止之。景勝曰「吾豈可再負乎。」七月、至伏見。謁見。八月、國除。獨食米澤三十萬石。宥兼續罪。賜五萬石。

六年二月、政宗又來り侵す。繁長又擊つて之を卻く。政宗轉じ逢隈河を濟り、梁川を攻む。城將須田大炊、四伏を設けて與に戦ひ、之を破る。四月、政宗兵を留め須田に備へ、返つて本莊を攻む。本莊出でて松川を距ぎ、敵を侮つて備へず。政宗曉に乗じて濟り、擊ち之を敗る。本莊走つて福島に入る。須田之を聞き、逢隈

河を濟り、其の兵を破り、遂に政宗の軍後を襲ひ、本莊と夾み撃つて之を走らす。景勝、乃ち自ら將として出づ。政宗驚き其の軍を捨てて、獨り十餘騎と、間道より白石に走る。徳川公既に石田氏に克ち、天下、之に歸す。景勝、秀康に因つて罪を謝す。徳川公、人をして來り其の西上を促さしむ。景勝、即ち行を治む。將士皆危みて之を止む。景勝、曰く「吾れ豈に再び負く可けんや」と。七月、伏見に至つて謁見す。八月、國除かれ、獨り米澤三十萬石を食む。兼續の罪を宥して、五萬石を賜ふ。

六年二月、政宗は又來つて福島を攻めた。繁長は又撃つて之を退けた。政宗は轉じて逢隈河を渡つて梁川を攻めた。城將須田大炊は四個所に伏兵を設けて與に戦つて之を敗つた。四月、政宗は兵を残して須田に備へ、そして自分は還つて本莊を攻めた。本莊は出で、松川といふ所で拒いだが、敵を侮つて用意しなかつた。政宗は曉け方につけ込んで河を渡つて撃つて之を敗つた。本莊は走つて福島に入つた。須田は之を聞いて、逢隈河を渡つてその兵を破り、遂に政宗の軍を襲ひ、本莊と夾み討ちにして之を走らせた。そこで景勝は自分で大將となつて出かけた。政宗は、驚いて其の軍を放つて置いて獨りで十餘騎とぬけ道から白石に逃げた。徳川公はその時にもう石田三成に克つて天下は之に歸服してゐた。景勝は秀康を頼んで罪を謝した。徳川公は使者を立てて景勝が上方に來るよう催促させた。景勝は早速旅の支度をした。將士は皆危んで、之を止めた。景勝がいふのに「去年も言ふことに背いたのに又背くことは自分には出來ぬ」と。七月、伏見に來て、徳川公に謁見した。八月、國を取り上げられ、たゞ米澤の三十萬石を領有することとなつた。兼續の罪を宥して、五萬石を賜はつた。

語釋 松川・白石(陸) ○再背(伊奈圖書が來て西上を促し) 時に一度行かなかつた)

慶長十九年十一月、大坂兵起。徳川公率諸將攻之。景勝與佐竹義宣爲先鋒。二十四日、至大坂。景勝將杉原常陸、水干衣於鎧表。衆指而異之曰「彼越後宿將也。是其軍禮乎」。杉原聞笑曰「吾鎧太敵惡。故尙此耳」。景勝陣、鶴野、義宣陣、今福、間日、竝進。破敵柵。景勝命植柵、設塹于大和河南。令隊將鐵某、將銃手五百守之。將士竊言曰「此非戰場。不知何用」。日午、城兵大出。義宣兵不利。銃手齊發。敵兵乃卻。已而城兵七隊出。鶴野、我先鋒須田大炊與戰、敗走。杉原常陸與安田上總、長尾權四郎進擊、斬其三將。

慶長十九年十一月、大坂に兵起る。徳川公、諸將を率ゐて之を攻む。景勝、佐竹義宣と先鋒たり。二十四日、大坂に至る。景勝の將杉原常陸、水干衣鎧の表に向ふ。衆、指し之を異みて曰く「彼は越後の宿將なり。是れ其の軍禮か」と。杉原聞き笑つて曰く「吾が鎧太だ敵惡なり。故に此を尙ふるのみ」と。景勝は鶴野に陣し、義宣は今福に陣し、間日、並び進み、敵の柵を破る。景勝命じて柵を植て、塹を大和河の南に設け、隊將鐵某をして、銃手五百に將として之を守らしむ。將士、竊に言つて曰く「此れ戰場にあらず。知らず、何の用ぞ」と。日午、城兵、大に出で、義宣の兵、利あらず。銃手齊しく發す。敵兵乃ち卻く。已にして城兵七隊、鶴野に出づ。我が先鋒須田大炊、與に戦ひ敗走す。杉原常陸、安田上總、長尾權四郎と、進み撃ち其の三將を斬る。

通 慶長十九年十一月、大坂に戦争が起つた。徳川公家康は、諸將を率ゐて、之を攻めた。景勝は佐竹義宣と共に先鋒となつた。二十四日大坂に着いた。景勝の大將の杉原常陸は水干の衣を鎧の上に着けて居た。皆の者は指して之を怪しんでいふには「彼は越後の古い大將である。あんなものを羽織るのは軍中の禮でもあるのか」と。杉原が聞いて笑つていふのに「余の鎧は随分古くて見苦しい。だから之を上に着たのである」と。景勝は鶴野に陣取り、義宣は今福に陣取り、一日置いて一緒に進み、敵の柵を撃ち破つた。景勝は命じて柵を立て、濠を大和河の南に掘らせ、隊長の鐵某をして、鐵砲組五百人の大將として之を守らしめた。將士はひそかに言つていふのに「こゝは戦場ではない何の用にするのか知らん」と。眞晝頃城兵が多数出て来て、義宣の兵は敗れた。この時鐵砲組は一齊に射撃した。そこで敵兵は堪らず退却した。その内に城兵七隊は鶴野に出た。我が先鋒の須田大炊は城兵と戦つて敗走した。杉原常陸は安田上總・長尾權四郎と一緒に進撃し、敵將三人を斬り殺した。

話釋 水干衣(狩衣)

徳川公聞、鶴野戦急、令堀尾氏・丹羽氏來代景勝。景勝以槍手三百自環爲陣、憑椅不動。使者十餘輩來傳教旨。皆不得入。景勝厲聲曰「吾在戰場。雖有教命、不能退一步。」磨兵益進、遂破城兵。城兵入柵。景勝銃手又驅柵内兵入城、不使復出。須田愧敗、與五騎馳入敵中、人得一首級而返。徳川公軍監小栗又一具狀以聞。退語同僚曰「今日戰既解、猶有宜進擊之機。吾言之、景勝辭以日暮可憾。」徳川公聞之、叱曰「景勝乎。」

勝武事、若曹敢得誹議之。次日巡視諸營、至上杉氏、親慰勞之、遂賜功狀於杉原長尾安田須田鐵島津等。杉原伏謝曰「臣等何力之有焉。先寡君家範猶存。臣等奉以周旋焉耳。」退謂人曰「吾從先公、數與武田氏戰。若今日之戰、乃兒戲耳。何足載功狀乎。」

訓 徳川公、鶴野の戦急なるを聞き、堀尾氏・丹羽氏をして、來り景勝に代らしむ。景勝、槍手三百を以て、自ら環らしめ陣を爲し、椅に憑つて動かさず。使者十餘輩、來つて教旨を傳ふ。皆入るを得ず。景勝、聲を厲して曰く「吾れ戰場に在り。教命ありと雖も、一步を退く能はず」と。兵を磨き益進み、遂に城兵を破る。城兵、柵に入る。景勝の銃手、又柵内の兵を驅り城に入らしめ、復出でしめず。須田、敗を愧ぢ、五騎と馳せて敵中に入り、人ごとに一首級を得て返る。徳川公の軍監小栗又一、狀を具して以て聞す。退いて同僚に語つて曰く「今日、戰既に解くるも、猶ほ宜しく進み撃つべきの機あり。吾れ之を言ふも、景勝辭するに日暮るゝを以てす。憾む可し」と。徳川公、之を聞き、叱して曰く「景勝の武事、若が曹、敢て之を誹議するを得んや」と。次日、諸營を巡視し、上杉氏に至り、親ら之を慰勞し、遂に功狀を杉原・長尾・安田・須田・鐵・島津等に賜ふ。杉原、伏謝して曰く「臣等、何の力か之れ有らん。先寡君の家範猶ほ存す。臣等奉じ以て周旋せしのみ」と。退き人に謂つて曰く「吾れ先公に従ひ、數武田氏と戰ふ。今日の戰の若きは、乃ち兒戲のみ。何ぞ功狀に載するに足らんや」と。

德川公は鶴野の戦争の危いことを聞いて堀尾氏・丹羽氏をやつて、景勝と交代させようとした。所が景勝は槍組三百人にぐるり自分を巻き取らせて陣形を作らせ、自分は椅子に倚りかゝつて動かない。使者は前後十餘人も將軍の命令を傳へにやつて来た。しかし皆その陣中に入ることが出来ない。景勝は聲を勵ましていふのに「吾は戰場にゐるのである。たとひ將軍の命令でも、一步も退くことは出来ない」と、兵を指揮して益進み、遂に城兵を破つた。それで城兵は柵矢來の内に入り込んだ。景勝の鐵砲組は又柵内の兵を追ひ出して城内に入れ込み、もゝ出ることの出来ないやうにした。須田は負けたのを愧ぢて五騎と共に馳せて敵中に入り、銘々一首級を得て返つた。德川公の軍目附小栗又一は様子を逐一申上げた。退いて同僚に語つていふのに「今日戦争はもう濟んだが、それでもまだ進撃するのに宜い機會があつた。余は之を景勝に言つて見たが、景勝はもう日が暮れたからといつて斷つた。惜しいことをした」と。德川公は之を聞いて、又一を叱つていふのに「景勝の戦事の手並は、お前達がどうして、彼れ是れ誹ることが出来やうぞ」と。次の日、諸營を巡視し、上杉氏の營に至り、德川公自身親しく、之を慰勞し、遂に感狀を杉原・長尾・安田・須田・鐵・島津等に賜はつた。杉原は伏して御禮をいつていふのは「私どもに何の手柄がありませうぞ。亡くなりました謙信公の家法がまだ残つて居ります。私どもは之を守つて働いただけで御座います」と。退いて人に向つていふのに「拙者は先殿様に從つて、度々武田氏と戦つた。今日の戦争の如きはそれに比べるとまるで小供の遊び事である。感狀に書き立てる程のことではないさ」と。

元和元年五月、再攻大坂。景勝以特命留守京師、陣八幡。凡兩役所用軍監、選練兵

事者傳命諸營、多甲斐舊臣而眞田昌幸子幸村在城中。戰守最可觀。世以爲出武田氏遺法也。九年三月、景勝病卒。年六十九。子定勝・孫綱勝相繼襲官秩。綱勝天。以外甥吉良義英子綱憲爲嗣、削十五萬石。

元和元年五月、再び大坂を攻む。景勝、特命を以て京師に留守し、八幡に陣す。凡兩役に用ふる所の軍監、兵事を練る者を選び、命を諸營に傳ふるに、甲斐の舊臣多し。而して眞田昌幸の子幸村、城中に在り。戰守最も觀るべし。以て武田氏の遺法に出づと爲す。九年三月、景勝病み卒す。年六十九。子定勝・孫綱勝相繼いで官秩を襲ぐ。綱勝、天す。外甥吉良義英の子綱憲を以て嗣と爲し、十五萬石を削らる。

元和元年五月再び大坂を攻めた。景勝は特別の命令で京都を留守することとなり、八幡に陣取つた。凡そ大坂兩度の戦争に用ひられた軍目付が、指圖を諸營に傳へるのに兵事に熟練した者を選び用ひたが、それには甲斐の舊臣が一番多く選ばれて使はれた。そして眞田昌幸の子の幸村は城中に居たが、その攻防ともに最も手並が勝れてゐた。世間では、武田の家法から出たやり方だと言つてゐた。九年三月、景勝は病氣で死んだ。年は六十九であつた。子の定勝、孫の綱勝が相繼いで官位秩祿を嗣いだ。綱勝は若死をした。それで母方の甥吉良義英の子綱憲を繼嗣とし、十五萬石を削られた。

元和(後水尾天皇の年號) ○吉良義英(大石良雄に刺されし人) ○削十五萬石(養子繼組に不法があつたといふ。或はいふ赤穂浪士の一件にて削封に會ふと)

上杉義春、本畠山氏爲謙信子養、後以爲上條城主、承故上杉定實後、佐景勝、擊景

虎、最有功。德川公命復畠山氏。削髮號入庵。老於京市。大坂冬役召之。二條城問上杉氏行軍法。諸侯伯皆侍焉。義春為人短小而善辯。陳己嘗從謙信所聞見。音辭如流。公稱善。諸將皆織田豐臣以來老兵豪傑。而毋敢出聲者。後病眼盲。使人讀近代史乘聽之。至武田上杉氏事。往往指其謬偽云。

訓讀 上杉義春は、本畠山氏なり。謙信に子として養はれ、後に以て上條城主と爲り、故の上杉定實の後を承け、景勝を佐け、景虎を撃ち、最も功あり。德川公、命じて畠山氏に復す。髮を削り入庵と號し、京市に老す。大坂の冬の役に、之を二條城に召し、上杉氏行軍の法を問ふ。諸侯伯皆侍す。義春、人と爲り短小にして善く辯す。己れ嘗て謙信に従ひ聞見せし所を陳ぶ。音辭流るるが如し。公、善しと稱す。諸將、皆、織田・豊臣以來、兵に老ゆる豪傑にして、敢て聲を出だす者なし。後、眼を病みて盲す。人をして近代の史乘を讀ましめて之を聽き、武田・上杉氏の事に至れば、往々其の謬偽を指せりと云ふ。

通釋 上杉義春は元來畠山氏であつた。謙信に子として養はれ、後に上條の城主となり、もとの上杉定實の後を承けつぎ、景勝を助け、景虎を撃つて最も手柄があつた。德川公は命じてもとの畠山氏に復させた。髮を削り落して、入庵と號し、京都の街中に隱居して居た。大坂冬の陣の時入庵を二條城に呼び出して、上杉氏の戦争の法を問うた。大小名は皆侍坐して聽いて居た。義春はその人柄は丈の低い小男であつたが、辯舌は上手であつた。自分が嘗て謙信に従つて、見たり聞いたりしたことを述べた。その言葉は、水の流れるがやうであつた。德川公

は善しといつて賞めた。侍坐してゐた諸將は皆織田・豊臣以來戦争には慣れ切つた豪傑揃ひであつたが、ちつとも口出しをするものもなかつた。後、眼病で盲目になつた。それからは人を頼んで近代の歴史物語等を讀ませて、之を聞き、武田・上杉氏の事になると度々その間違ひを指摘したといふことである。

語釋 冬役(慶長十九) 〇二條城(京)

宇佐美定行之孤定興、數潛從軍、欲立功自贖。景勝以其父故不許也。流寓諸國。及關原事作、赴難會津。及從封、終隱越後。終身其子勝興仕紀伊。亦於越後事跡有所綜覈。

訓讀 宇佐美定行の孤定興、數潛に軍に従ひ、功を立て自ら贖はんと欲す。景勝、其の父の故を以て許さず。諸國に流寓す。關原の事作るに及び、難に會津に赴く。封を徙さるるに及び、終に越後に隱れて身を終ふ。其の子勝興、紀伊に仕ふ。亦越後の事跡に於て綜覈する所あり。

通釋 宇佐美定行の孤兒定興は度々内所で戦争に出て、功を立て、自ら罪を贖はうと思つた。景勝は其の父定行が自分の親を殺したので許さなかつた。そこで定興は諸國に流浪してゐた。關原の戦争が起つたので會津に駆けつけ舊主の難に赴いた。景勝が米澤に所換へとなつたので遂に越後に隱れて一生を終つた。その子の勝興は紀伊に事へた。この人も亦越後の事に就いてはその事實をまとめて明らかにしたことがあつた。

語釋 其父故(其の父定行が政景と野尻湖に溺れた一件)

初武田・上杉二家、竝務耕戰、以名法治國、政貴嚴刻、而上杉氏作事、率仗信義、是其所以獨存至今也。然世言兵法、竝稱二家云。

訓 初め武田・上杉の二家、竝に耕戰を務め、名法を以て國を治め、政、嚴刻を貴ぶ。而して上杉氏、事を作すに、率ね信義に仗る、是れ其の獨り存して今に至る所以なり。然れども世、兵法を言へば、二家を竝稱すと云ふ。

通釋 はじめ、武田・上杉の二家はどちらも農事と戰鬪とを務め、刑名法術を以て國を治め、その政治はいかにも嚴重苛刻にすることを貴んだ。そして上杉氏のやつたことは大抵信義を重んじた行爲が多かつた。これが上杉氏だけ今日まで亡びないで残つた所以である。しかし世間で兵法のことをいへば、此の二家を同様に賞め稱へるといふことである。

叙說 本論の主意は、我が國では、信玄・謙信の二公が兵家の冠たる者であつて、其の兵法は精を極めたものである。而かも孫吳にも比すべきこの二家が同時に出したことは實に希有に屬することである。其の兵書の如きは往々後人の加筆があるから、その事蹟と照合すれば自然明かとなるといふことである。

外史氏曰、世傳二家兵書有出後人假託者不可盡信、特言兵於我邦、期乎二公者、不可不知其由也。

訓 外史氏曰く世に二家の兵書を傳ふ。後人の假託に出づるものあり。盡くは信す可からず。特だ兵を我が邦に言ふもの、二公に期することは、其の由を知らざる可からざるなり。

通釋 外史氏が曰ふのに世間では甲州流とか越後流とか申して武田・上杉二家の兵書なるものを傳へてゐる。併し中には後の人が二家の名前を借つて、作つたものもある。眞偽が混じてゐるから皆まで信用は出来ない。しかし、我が國で兵法のこと、いふと、たゞ信玄謙信の二公に限られてゐる様に思ふことに就いては、その理由を知つて置かなければならない。

除論 以上第一段、一篇の起手

夫勇悍趨捷、重恥輕死、我國俗所自有、我先王又養之以恩、結之以信、所以撫摩鍊治之、經數百年、闔國之民親其上、死之無二、其長如手足之扞頭目、以能震懾四隣、雖魏唐之強大、不能加焉者、特此俗也。

訓 夫れ勇悍趨捷にして、恥を重んじ死を輕んずるは、我が國俗の自ら有する所、我が先王、又之を養ふに恩を以てし、之を結ぶに信を以てす。之を撫摩、鍊治し、數百年を経て、闔國の民、其の上を親しみ、其の長に死すること、手足の頭目を扞るが如く、以て能く四隣を震懾し、魏唐の強大と雖も、加ふる能はざる所以は此の俗を恃みてなり。

通釋 一體勇氣があつて且つ素早く、恥を重んじ死を輕んずることは、我が日本國の自然に有してゐる所の風の俗を恃みてなり。

俗である。そこへ以て来て我が御歴代の天皇は仁愛を以てこの人民を養はれ、信實を以てこの人民を結びつけられたのである。人民を愛撫せられ鍛練せられて數百年から千年を経つて、全國の人民は君上を親しみ、その長上の爲め一命を捨て、それは恰も手足が頭や目を障へ拒ぐがやうにし、能く四方の隣國を震ひ怖れしめ、支那の強大であつた魏や唐のやうなものを以てしても、決して日本に兵を加へることが出来なかつたが、その所以は全く以上述べたやうな風俗があつたからである。

撫摩(小兒を撫でさする) ○魏唐(曹操の魏、李氏の唐) 共に支那の國名

及至通唐氏、乃舍此學彼、樸爲文、鏗強爲弱。平時奔競、有急遁逃。幾乎舉朝皆婦人矣。而先王遺民、勇而輕死者、皆爲將門所收。以此奪王權、營私利、無所爲而不成。承久建武之事、輒皆爲然。故先王所以自衛、後王所以自累、均此兵也。願用捨何如耳。

唐氏に通ずるに至るに及び、乃ち此を捨てて彼を學び、樸を斬り文と爲し、強を鏗弱と爲す。平時は奔競し、急あれば遁逃す。朝を擧げて皆婦人に幾し。而して先王の遺民、勇にして死を輕んずる者、皆將門の收むる所と爲る。此を以て、王權を奪ひ、私利を營み、爲す所として成らざるはなし。承久・建武の事、輒ち皆然りと爲す。故に先王の自ら衛る所以、後王の自ら累ふ所以、均しく此れ兵なり。用捨如何を願ふのみ。
所が唐と交通するやうになつてからは我が日本固有の良風美俗を棄て、支那の開化に心を奪はれて彼を

學び、質朴な美風を削り去つて、彼の文飾ある風となして終ひ、剛強なる風を刻み減らして柔弱なる風にして終つた。平生は名利を得んために權力ある勢力ある家に奔走して、名利を競ひ、一旦緩急の場合にはサツサと逃げ出して終ふやうになつた。さういふ譯で朝廷の者は全部女であるといつても宜い位、その仕業は男らしくなかつたのである。そして御歴代天皇がお仕込みになつて、お殘しなされた民で、勇敢にして死を輕んずるものは皆源平などといふ武門に取り込まれて終つたのである。そこで彼等武門の連中は、この人民を利用して皇室の權力を横取りし、何をやつても出來上らないものは無いといふ状態であつた。承久の昔に、北條氏が三上皇をお流し申したことの如き、建武の代に足利氏が御醍醐天皇を隱岐にお流し申したことの如き、すなはち皆それでないものはない。だから御歴代天皇の自ら衛となされた者、後世の列聖が自ら累となされた者、これは皆同じ此の兵であつたのである。だからこの兵は用ふればお役に立つが捨てると大變な禍になるので、其の用捨のどちらにするかといふことで禍福が決定されるのである。

以上第二段、國朝の初め、民よく武を尙び、朝廷又よく之を養ひ、中頃將家がそれを奪つて、朝廷で之を用ひられなかつたことが衰微する因をなしたことを述べ。

降至戰國、此兵各爲群雄、所分領、日淬月厲、愈用愈勁。而其撫摩鍊治、教之而後戰者、莫武田上杉過焉。故我邦兵之精、極於此時。而二家又精之精者矣。且源平以還、其兵皆散而自戰、將勇卒銳者勝、非必有東伍結陣坐作進退之法、有之、始於二家。

二家兵法傳爲我邦極則者由此焉爾

降つて戰國に至り、此兵各群雄の分ち領する所と爲り、日に淬き月に厲き、愈用ひて愈勁し。而して其の撫摩鍊治し、之に教へ後戰ふものは、武田・上杉より過ぐるはなし。故に我が邦の兵の精は此時に極る。而して二家は、又精の精なるものなり。且つ源平以還、其の兵皆散じて自ら戰ひ、將勇に、卒銳なるものは勝つ。必ずしも東伍、結陣、坐作、進退の法あるに非ず。之あるは、二家に始る。二家の兵法、傳へて我が邦の極則と爲すは、此に由るのみ。

降つて戰國時代になると、この勇敢なる兵は各群雄の爲めに分ち取る所となり、絶え間のない戰爭で日々月々鍛えられ磨かれ、用ふれば用ふる程それだけ愈強くなつたのであつた。その中でも愛撫し鍊り鍛へ十分に教へ込んで後に戰つた兵といへば、（註）といつても武田、上杉以上に出るものはなかつた。二氏の兵は他に比べると逆も上手に訓練せられてゐた。だから我が國の兵士の精銳であつた事は、この時分が極點といつてもよい。そして武田、上杉の二家は、精中の又精なるものであつた譯である。それに源平より以來その兵は皆散りくになつて、てんでに戰ひ、大將が勇敢で士卒の銳い者が勝つてゐた。個人的の戰。兵士が一團となつて陣形を作り進んだり退いたりする懸け引の法があつた譯ではなかつたのである。さういふ集團的合法的の戰爭をやり出したのは武田、上杉の二家から始まつたのである。二家の兵法が傳へられて、我が日本國第一の法則とされてゐるのはかかる理由に基づいてゐるのである。
（註）東伍（十人組、五人組のや）〇結陣（立）

然源氏・足利氏、每自東國起、其兵習騎戰。而足利氏居京畿、不恤馬政。織田・豐臣・徳川竝起、侯甸、少騎多步。即如二家、雖較多騎、亦以其國險、不便騎、騎率徒取致遠。至戰概舍馬步鬪。故騎戰遂廢。又用火器與長槍、以爲軍鋒。而弓矢之用稍衰。是又我邦兵體變遷、不可不知也。

然れども、源氏・足利氏は、毎に東國より起り、其の兵、騎戰に習ふ。而して足利氏は京畿に居り、馬政を恤へず。織田・豐臣・徳川竝に侯甸に起り、騎少く歩多し。即ち二家の如きは、較騎多しと雖も、亦其の國の險にして騎に便ならざるを以て、騎は率ね徒に遠きを致すに取る。戰に至つては、概ね馬を捨てて步鬪す。故に騎戰遂に廢す。又火器と長槍とを用ひ、以て軍鋒と爲す。而して矢弓の用稍衰ふ。是れ又我が邦兵體の變遷、知らざる可からざるなり。

併し源氏・足利氏は常に東國から起つてゐて、その兵士は馬に乗つて戰ふことに慣れてゐた。そして足利氏は京都に居つて、軍馬に關する法規等に留意しなかつた。織田、豐臣、徳川は皆畿内に近い地方から起つて、騎兵が少く歩兵が多かつた。武田、上杉となると、どつちかといふとや、騎兵の方が多かつたのであるが、これは其の國が險阻で馬に乗るのに具合が悪いからで、馬は大抵唯だ遠方へ行く場合だけに用ひてゐた。さあ戰爭となると、大抵馬を棄て、かち立ちとなつて鬪つたものである。だから騎戰といふことが遂になくなつて來たのである。又鐵砲と長槍とを用ひて先手とするやうになつた。従つて弓矢の使用が漸時衰へて來たのである。これは又

我が邦の軍兵組織の變化であつて、知つて置かねばならぬことである。

〔註〕 侯甸(周禮の侯甸、甸服のこと。畿内より離れたる地)

此時、兵農雖別、往往收漁獵者、爲弓銃手、收盜賊爲間諜、以補隊伍、充斥候。二家皆是。二家之陣、大約弓銃手居前、長槍步卒次之、騎士次之、牙旗鼓螺居中、左右拒夾之、輜重居後、游兵居外。每戰、交發弓銃、長槍從之。士下馬以進、或自卒傍出、或自中跳盪而出、戰酣、或以麾下乘之。雖變化無準、概以此爲常。一時竝同此法、而群雄環視、獨畏二家。幸其噬搏不解、不敢觸犯云。

〔訓〕 此時、兵農別ると雖も、往往、漁獵の者を收め弓銃手と爲し、盜賊を收め間諜と爲し、以て隊伍を補ひ斥候に充つ。二家皆是なり。二家の陣、大約、弓銃手、前に居り、長槍の步卒、之に次ぎ、騎士、之に次ぎ、牙旗・鼓・螺、中に居り、左右の拒之を夾み、輜重、後に居り、游兵、外に居る。戰ふ毎に、交弓銃を發し、長槍之に従ふ。士は馬を下り以て進み、或は卒傍より出で、或は中より跳盪して出づ。戰酣なるとき、或は麾下を以て之に乗す。變化、準なしと雖も、概ね此を以て常と爲す。一時竝に此法を同じくす。而して群雄、環視して、獨り二家を畏る。其の噬搏して解けざるを幸として、敢て觸れ犯さずと云ふ。

盜賊を採用して隱密となし、それを以て隊伍中に編成し、斥候兵に充てがつたりした。これは武田、上杉の二家共皆さうであつたのである。そして二家の陣立は大抵その弓銃手が前に居つて、長槍を持つた步卒がその後から續き、騎兵が之に次ぎ、大將の旗・攻め太鼓・法螺貝の本隊が中央に居り、そして左右兩翼の備が之を夾み、輜重はその後方に居り、游撃の兵は外側に居つた。戰爭が始まると、いつも弓と鐵砲を交互に放ち敵のひるむ所を長槍が續いて出る。騎士は馬から下りて進み、場合によつては步卒の側から進出し、或は中央から跳り出て敵を衝いて出る。戰爭の眞最中になると時には旗下の兵をつれて之につけ込むのである。さういふ次第で兵の動きの變化に一定の準則はなかつたのだけれども、大抵は以上述べたやうな遣り方が常法であつた。一時は誰れでも皆此の法を用ひたものであつた。それであつて群雄は遠くからめぐり眺めて(觸らぬやうに)たゞこの二家を畏れたのである。二家が互に争ひ合つて解けなかつたことを宜い幸として、觸らぬ神に崇なしで觸らぬやうにして居たといふことである。

〔註〕 左右拒(左拒、右拒、左傳に見ゆ)

〔論〕 以上第三段、用兵の法は信玄、謙信に至つて最も精しくなつたことを述べ、集團的戰法、步調、銃槍、合法的配置等、從來見なかつた戰法は二家によつて編み出された。

夫孫武、吳起不同、世而生、饒使同、世生、借人之兵、以施己之法、不能大展其力、確闘決勝敗也。今二公挾孫吳之能、擅趙魏之甲、而比肩接踵於一時、可謂希世之遇矣。後之言兵者、觀二公相與之迹、識其形勢機權之大、然後參之其書、辨別眞僞。

其法可得而詳論余是以合敘二家焉。

訓 夫れ孫武・吳起、世を同じくして生ぜず。饒ひ世を同じくして生ずるも、人の兵を借り、以て己の法を施す。大に其の力を展べ、確闘して勝敗を決する能はざるなり。今二公は、孫吳の能を挾み、趙魏の甲を擅にし、一時に比肩接踵するは、希世の遇と謂ふべし。後の兵を言ふ者、二公相與するの迹を觀、其の形勢機權の大を識り、然る後に之を其の書に參し、眞偽を辨別せば、其の法得て詳論すべし。余、是を以て二家を合叙す。

通 夫れ孫武や吳起は同じ世に生れなかつた。よし同じ世に生れたとしても他人の兵を借り、他人の兵を用ひて自分の兵法を施したのである。有らん限り自分の力を展べ、確つかりと闘つて勝負を決めるといふことは出来なかつたのである。所が今、信玄、謙信の二公は孫武、吳起のやうな才能を持つてゐて、趙や魏の兵のやうな強い兵士を自由に用ひ、而かも同じ時代に肩を並べて跡を交へて出て来たといふことは、實に世に稀な遭遇といふべきであらう。後世の兵事を談する者が二公の取り組んだ跡を觀て、その地理や機略や權變の偉大なることを識り、然る後に二家の兵書と、之を照合して見て、どこ迄が眞で、どこ迄が偽であるかといふことを判定し區別するなら、二家の兵法は、易に詳しく論ずることが出来るだらう。余はさういふ考へからこの二家の傳記を一緒にして叙べた譯なのである。

語釋 孫武(吳王闔閭に事へ) ○吳起(魏の武侯に事へ、其の) ○確闘(酷しく闘ふ) ○趙魏之甲(趙魏は戰國の二大國)

餘論 以上第四段、結尾。二家を合叙した所以を叙べて發端の兵書のことと言及したのである。

昔者、吾父嘗行過甲斐。甲斐民飲食必稱館君。館君信玄也。以信玄之悖逆、而能抗

強敵數十年、而不相下、豈非以其教民有素哉。謙信之事、多世所不傳。余并考畠山氏、宇佐美氏、說。又與米澤人士交游、爲余言如此。

訓 昔者、吾が父嘗て行いて甲斐を過ぐ。甲斐の民、飲食するに必ず館君と稱す。館君とは、信玄なり。信玄の悖逆を以てして、能く強敵に抗すること數十年にして、相下らざる、豈に其の民を教ふるに素あるを以てに非ずや。謙信の事、世に傳はらざる所多し。余、畠山氏・宇佐美氏の說を并せ考ふ。又米澤人士と交游す。余の爲めに言ふこと此の如し。

通釋 昔余の父が旅行して甲州を通過したことがある。その土産話によると甲州の人はいつでも屹度「御屋形様」といつて飲食してゐたといふことである。(これは其の徳を忘れぬといふ意味であるといふことだ) その御屋形様とは信玄のことである。信玄ほどの道に悖つた無道な男が、猶ほよく強敵上杉氏に數十年間も對抗して相下らなかつたといふことは、その人民をよく教化したといふ下地があつたからではないか。(全くその下地があつたればこそ出来たのである) 又謙信の事跡で世間に傳はつてゐない事が随分ある。余は上杉に縁故のある畠山義春、宇佐美勝興の說を併せ參考として此の傳記を書いた。又余は米澤(上杉藩)の人士とも交際してゐる。その人々が余の爲めに話して呉れたことも前記の如く本文に書き込んで置いた。

語釋 吾父(春水先生、名は惟完、字千秋、通稱彌太郎) ○畠山氏(即ち入鹿)

餘論 以上第五段、餘波。二家の遺事を並べ言つて餘波としたのである。

三浦氏死於其難。季光子經光出鎌倉居越後南莊。經光子時親復起爲六波羅評定衆。足利尊氏滅六波羅加賜時親以安藝吉田及河内利田。

毛利氏は、大江廣元より出づ。廣元十一世の祖を本主と曰ふ。姓は土師氏、備中介と爲る。本主、音人を生む。音人、仁明・清和の間に歴仕し、從三位左大辨に至る。姓を大枝氏と賜ふ。後、大江と更む。菅原氏と、竝に學政を掌る。音人、千古を生む。千古の後七世を、匡房と曰ひ、文武の才略有り。源義家に教ふるに陣法を以てす。匡房の曾孫を廣元と爲す。廣元、源賴朝を關東に佐け、之をして天下に覇たらしむ。其の薦を以て安藝介と爲り、因幡守に遷り、正四位下、大膳大夫に至り、陸奥守を兼ねぬ。源氏・北條氏の際、幕府の元老と爲り、數大難を定む。五子有り。長子親廣は、承久の役、官軍に屬し、終る所を知らず。第三子を季光と曰ひ、左近衛將監と爲り、相模の毛利莊を食む。因つて氏とす。三浦氏を娶り、其の難に死す。季光の子經光、鎌倉を出でて、越後の南莊に居る。經光の子時親、復起つて六波羅の評定衆と爲る。足利尊氏、六波羅を滅し、時親に加賜するに、安藝の吉田、及び河内の利田を以てす。

毛利氏は大江廣元から出た。廣元の十一世前の先祖を本主と云つた。姓は土師氏で備中介となつた。本主は音人を生んだ。音人は、仁明から清和に至る三代の君に歴任して、その官は從三位左大辨にまでなつた。姓を大枝氏と賜はつた。後に大江と改めた。菅原氏と並んで學校事務を掌つて居た。音人は千古を生んだ。千古の後七世を匡房といひ、文武の才略があつた。源義家に陣法を教へたことがある人だ。匡房の曾孫が廣元である。廣元は源賴朝を關東で輔佐し遂に賴朝をして天下に覇たらしめた。賴朝の推舉で安藝介と爲り、それから因幡守に遷り、正四位下大膳大夫となり、陸奥守を兼ねてゐた。源氏・北條氏の頃に幕府の元老となつて度々大事件を平定した。廣元には五人の子があつた。長子親廣は承久の役に官軍方に屬したが終に何處で死んだか分らなかつた。第三子は季光といひ、左近衛將監となり、相模の毛利莊を領してゐた。因つて地名を氏とした。三浦氏を妻とし、その爲めに泰村の難で泰村と共に死んだ。季光の子經光は鎌倉を出で、越後の南莊に居た。經光の子時親は復た起つて、六波羅の評定衆となつた。足利尊氏が六波羅を亡ぼしたとき、時親は安藝の吉田及び河内の利田を増封した。

十一世 本主・音人・千古・維時・重光・匡衡 ○仁明(八皇第五) ○清和(八皇第五) ○承久之役(北條義時京師を攻めた亂) ○死於其難(寶治年間泰村は北條氏と戦ひ、季光之を助け敗れて自殺す)

時親生、貞親、貞親生親茂。親茂有三子、師親、匡時、直衡。皆隸新田義顯。義顯爲足利氏將高師泰所滅。貞親以下猶屬官軍。獨師親去屬師泰。師泰之攻石見、敵阻劫川。師親與高橋某、先衆亂流拔三城。以功盡食吉田邑。及師泰敗、屬山名時氏。迎親茂及二弟、共居焉。足利氏令武田氏、吉川氏攻降之。師親生廣房、廣房生光房。光房子熙房、嘉吉之役、攻蟹坂有功。熙房子豐元、應仁之役、與小早川氏、守相國寺有功。

時親、貞親を生み、貞親、親茂を生む。親茂、三子あり、師親・匡時・直衡。皆新田義顯に隸す。義顯

は足利氏の將高師泰の滅す所と爲る。貞親以下猶ほ官軍に屬す。獨り師親去つて師泰に屬す。師泰の石見を攻むるや、敵、劫川を阻む。師親、高橋某と、衆に先だち流を亂り、三城を抜く。功を以て盡く吉田の邑を食む。師泰敗るるに及んで、山名時氏に屬し、親茂及び二弟を迎へて、共に居る。足利氏、武田氏、吉川氏をして、之を攻め降さしむ。師親、廣房を生み、廣房、光房を生む。光房の子熙房は、嘉吉の役に、蟹坂を攻めて、功有り。熙房の子豐元は、應仁の役に、小早川氏と、相國寺を守りて、功有り。

時親は貞親を生み、貞親は親茂を生んだ。親茂には三人の子があつて、師親・匡時・直衡といつた。いづれも皆新田義顯に屬してゐた。義顯は足利氏の將高師泰の爲めに亡された。併し貞親以下は依然として官軍に屬してゐた。たゞ師親だけは去つて師泰に屬した。師泰が石見を攻めた時、敵は劫川で師泰を拒いだ。師親は高橋某と衆に先き立つて、流を渡り、三城を攻めて陥れた。その功で吉田邑を全部貰ふことになつた。師泰が敗れてからは、山名時氏に屬して、親茂及び二人の弟を呼び迎へて一緒に住つた。足利氏は武田氏・吉川氏をして攻めて之を降参させた。師親は廣房を生み、廣房は光房を生んだ。光房の子熙房は嘉吉の役に蟹坂を攻めて手柄を立てた。熙房の子豐元は應仁の役に小早川氏と相國寺を守つて手柄があつた。

劫川(劫川又驚川) ○嘉吉之役(赤松滿祐が將軍) ○應仁之役(山名時義と細川勝元と京師で争ふ)

豐元生弘元。弘元之子曰興元。次曰松壽。松壽幼有器量。其保嘗抱之。濟水而躡溺。保惶懼謝罪。松壽曰「行道而躡常也。庸何傷。比髻鬣、詣嚴島、神祠既歸、問從者曰「汝

輩何祈。曰「祈郎君主。安藝也。松壽曰「汝盍祈吾主。天下夫願主。天下者能主一方。願主一方者能主一國。今願主一國矣。其所成可知。已聞者奇之。興元既爲嫡嗣。松壽出養於丹比氏。永正八年、加首服、名元就。稱少輔次郎。居猿掛城。食邑七十五貫。養士卒三百。會明使者來聘京師。路經吉田。善相者朱良範從焉。元就往見良範。良範曰「公兼漢祖唐宗之相。必宣威於四方。元就心自負焉。元就爲人隆準肉角。音吐甚洪。在麾下號令士卒。聲聞於諸隊。

豐元、弘元を生む。弘元の子を興元と曰ひ、次を松壽と曰ふ。松壽、幼より器量有り。其の保嘗て之を抱き、水を濟りて躡き溺る。保、惶懼して罪を謝す。松壽曰く「道を行いて躡くは、常なり。庸何ぞ傷まん」と。髻鬣の比、嚴島の神祠に詣で、既に歸り從者に問うて曰く「汝が輩、何をか祈る」と。曰く「郎君の安藝に主たらんことを祈る」と。松壽曰く「汝盍ぞ、吾が天下に主たらんことを祈らざる。夫れ天下に主たらんことを願ふ者は、能く一方に主たり。一方に主たらんことを願ふものは能く一國に主たり。今一國に主たらんことを願ふ。其の成る所知る可きのみ」と。聞く者、之を奇とす。興元既に嫡嗣となり、松壽出でて丹比氏に養はる。永正八年、首服を加へ、元就と名づけ、少輔次郎と稱し、猿掛城に居り、邑七十五貫を食み、士卒三百を養ふ。會明の使者、京師に來聘して、路に吉田を經たり。善く相する者朱良範從ふ。元就往いて良範を見る。良範曰く「公

は漢祖・唐宗の相を兼ね。必ず威を四方に宣べんと。元就、心に自負す。元就、人と爲り隆準肉角、音吐甚だ洪なり。麾下に在つて、士卒に號令するに、聲諸隊に聞ゆ。

豊元は弘元を生んだ。弘元の子を興元といひ、次男を松壽といつた。松壽は幼時より器局度量があつた。そのお守役が或る時之を抱いて川を渡るとき躓いて溺れようとした。お守役は慌て恐れてその罪を詫びた。松壽は曰ふのに「道を歩いて躓くのはよくある事である。そんな心配せんでも宜い」と。七八歳の頃に嚴島神社に參詣し、濟んでから歸ると、その供の者に問うて曰ふには「お前方は何を祈つたか」と。供の者は「若様が安藝の領主になられるように祈りました」といつた。すると松壽が曰ふのに「お前方は何ぞ余が天下に主となることを祈らなかつた。一體天下に主となることを願つてせいよく一方に主となるを願つてやつと一國に主となれるのだ。今一國に主となるを願つた。それでは成就するところは知れたものだ」と。聞く者は非常に偉いと思つた。興元が既に繼嗣となつて、松壽は出で、丹比氏に養はれる身となつた。永正八年、元服して元就と名づけ、少輔次郎と稱し、猿掛城に居り、七十五貫の土地を領し、士卒三百人を召抱へた。丁度明國の使者が京都に來聘するので、途中吉田を通過した。人相見の名人朱良範といふものが使者に從つてゐた。元就は往つて良範に遇つた。良範は元就の人相を見て曰ふには「貴公は漢の高祖と唐の太宗の人相を兩方共備へて居られる。屹度將來威を四方に伸べられるであらう」と。元就は心中自負する所があつた。元就の人物は鼻高く額の骨が隆起してゐて、音聲は非常に大きかつた。旗下に在つて士卒に號令すると、その聲は諸隊に響く程であつた。

一方(一方山崎とか山崎とかいふ) ○永正(後柏原天皇) ○猿掛城(備) ○隆準(鼻の高) ○肉角(額の骨の隆起)

十四年、安藝、守護武田元繁、據佐東銀山、矯將軍命、攻略國內。十月、攻有田城。城屬吉川經基。經基與元善。是時皆在京師。元繁柵于中、偃使熊谷元直守焉。別遣千騎焚猿掛城。下元就以二百人出戰。不利。吉田兵聞急來援。元就乃分兵五百備元繁。援路而以千人疾攻元直。破而斬之。元繁遣兵來援。不及。乃留一將當有田。自將四千騎來戰。元就令吉田將志道廣好濟兵出敵背。夾擊破之。元繁挺前濟水。我兵射洞其胸。其兵皆潰走。乃報捷京師。大内義興爲足利氏管領。爲請褒賞。元就遂并領武田氏。邑八千餘貫。經基妻以其孫女。元繁子光和猶據銀山不下。

十四年、安藝の守護武田元繁、佐東銀山に據り、將軍の命を矯めて國內を攻略す。十月、有田城を攻む。城は吉川經基に屬す。經基、興元と善し。是の時、皆京師に在り。元繁、中環に柵し、熊谷元直をして守らしめ、別に千騎を遣はして、猿掛の城下を焚かしむ。元就二百人を以て出で戰ふ。利あらず。吉田の兵、急を聞いて來り援く。元就、乃ち兵五百を分ち、元繁の援路に備へ、千人を以て疾く元直を攻め、破つて之を斬る。元繁、兵を遣はし來り援けしむ。及ばず。乃ち一將を留めて有田に當らせ、自ら四千騎に將として來り戰ふ。元就、吉田の將志道廣好をして、兵を潛め、敵背に出でしめ、夾撃して之を破る。元繁挺前して水を濟る。我が兵射て其の胸を洞く。其の兵皆潰え走る。乃ち捷を京師に報す。大内義興、足利氏の管領となり、爲めに請うて元就を褒賞

元就、遂に武田氏の邑八千餘貫を并せ領す。經基、妻はすに其の孫女を以てす。元繁の子光和、猶ほ銀山に據つて下らず。

十四年安藝の守護武田元繁は佐東・銀山に立て籠り將軍の命令だと詐つて國內を攻め取つた。十月、有田城を攻めた。城は吉川經基に屬して居た。經基は興元と仲が善かつた。當時二人ともに京都に居た。元繁は中堰に柵を拵へ、熊谷元直をして其處を守らせ、別に千騎の兵を遣はして、猿掛の城下に火をつけさせた。元就は二百人をつれて出で戦つた。併し負けた。吉田の兵は危いと聞いて援けに來た。そこで元就は兵五百人を分けて、元繁が援けに來る路に備へて置き、そして千人をつれてどん／＼元直を攻め、遂に破つて之を斬り殺した。元繁は兵を遣はして、援けに來させた。併し間に合はなかつた。そこで、一人の大將を留めて、有田に向はせ、自分は四千騎の將となり、來て戦つた。元就は吉田の將志道廣好をして、兵をかくして敵の背後に出でさせ、夾み討にして之を破つた。元繁は身を挺んで進み、獨り川を渡つて來た。我が兵はそれを射つて其の胸を射ち貫いた。元繁の兵は皆潰え走つた。そこで勝利を京都に報告した。大内義興は當時足利氏の管領となつてゐたが、爲めに願ひ出で元就を褒賞して貰つた。元就は遂に武田氏の領地八千餘貫を并せ持つことになつた。經基は孫娘を妻にやつた。元繁の子の光和は依然として銀山に立て籠つて降参しなかつた。

佐東・銀山(安) ○將軍(足利) ○有田城・中堰(安)

十七年、興元卒、子幸松嗣。外祖父高橋久光、與元就並輔之。大永三年、久光父子、與三吉某、戰而死。元就赴援、撫其遺臣、并其邑萬餘貫。六月、出雲、國主尼子經久、

攻大内氏、將藏田信房于鏡山。元就奉幸松爲先鋒、陰誘信房、叔父某、某斬信房、出降、被誅。經久本六角氏、其祖父持久、爲伯父高詮、幹國事。至於經久、滅鹽冶某、取富田城、轉略山陰、諸國、南出兵、侵大内氏。大内氏世居周防山口、爲太宰大貳、雄長關西。是時、大内義興在京師、聞變馳歸。自是連年攻戰。石見安藝、豪族、介立其間、嚮背無常。獨毛利吉川武田氏、常附經久。

十七年、興元、卒し、子幸松嗣ぐ。外祖父高橋久光、元就と並びに之を輔く。大永三年、久光父子、備後の三吉某と戦つて死す。元就赴き援け、其の遺臣を撫し、其の邑萬餘貫を并す。六月、出雲の國主尼子經久、大内氏の將藏田信房を鏡山に攻む。元就、幸松を奉じて先鋒となり、陰に信房の叔父某を誘ふ。某、信房を斬り出で降り、誅せらる。經久は、本と六角氏、其の祖父持久、伯父高詮の爲めに國事を幹す。經久に至りて、鹽冶某を滅し、富田城を取り轉じて山陰の諸國を略し、南に兵を出して、大内氏を侵す。大内氏は、世周防の山口に居り、太宰大貳と爲り、關西に雄長たり。是の時、大内義興、京師に在り、變を聞きて馳せ歸る。是れより連年、攻戦す。石見・安藝の豪族、其の間に介立し、嚮背常無し。獨り毛利・吉川・武田氏、常に經久に附く。

十七年、興元は死んで子の幸松が相續した。母方の祖父高橋久光は元就と並んで之を輔佐した。大永三年久光父子は備後の三吉某と戦つて討死した。元就は援けに行つて、その残つてゐる家來を慰撫して其の領地一萬

餘貫を併せ領した。六月、出雲の國主尼子經久が大内氏の大将藏田信房を鏡山に攻めた。元就は幸松を擁して、先鋒となり、陰に信房の叔父某を引き込んだ。某は信房を斬つて城を出て降参したが、これも誅せられた。經久は元來六角氏で、その祖父持久は伯父高詮の爲めに國の政治を切り盛りして居た。經久の時になつて鹽冶某を滅し、富田城を取り、方向を轉じて山陰の諸國を攻め取り、それから南方に兵を出して、大内氏を侵した。大内氏は代々周防の山口に居て、太宰大貳の職に任ぜられ、關西では一番の頭となつて居た。當時、大内義興は京都に居た。變を聞きつけて馳せ歸つた。これから毎年攻め戰つた。石見・安藝の豪族は其の間に夾まつてゐて、ついたり、叛いたり定まりはなかつた。たゞ毛利・吉川・武田の三氏は常に經久に附いて居た。

鏡山(安) ○富田城(出)

七月、幸松病卒、無嗣。家臣聚議、選於群叔、以元就爲嗣。八月、元就入吉田。元就弟就勝、與坂某渡邊某謀殺元就。元就覺之、襲殺就勝及坂渡邊。坂者桂廣澄兄、志道廣好弟也。乃使人諭廣澄、廣好曰「吾不以坂故疑汝也」。廣好拜謝。廣澄弗信、自殺。其子元澄聚族據城。元就單騎往諭降之。四年五月、大内義興使其子義隆與其將陶持長將二萬人攻安藝諸城、屬尼子氏者。七月、尼子經久遣兵援之、敗績。八月、元就以部兵四千、夜斫大内氏營、破之。持長解去。七年、元就入京師。任右馬頭、爲幕府相伴。

衆。

訓 七月、幸松病んで卒し、嗣無し。家臣聚り議し、群叔を選び、元就を以て嗣と爲す。八月、元就、吉田に入る。元就の弟、就勝、坂某・渡邊某と、元就を殺さんと謀る。元就、之を覺り、襲うて就勝、及び坂・渡邊を殺す。坂は、桂廣澄の兄、志道廣好の弟なり。乃ち人をして、廣澄・廣好を諭さしめて曰く「吾れ坂の故を以て汝を疑はざるなり」と。廣好、拜謝す。廣澄は信ぜずして、自殺す。其の子元澄、族を聚め城に據る。元就、單騎往き諭して、之を降す。四年五月、大内義興、其の子義隆をして、其の將陶持長と、二萬人に將として、安藝の諸城の尼子氏に屬する者を攻めしむ。七月、尼子經久、兵を遣はし之を援けしめ、敗績す。八月、元就、部兵四千を以て、夜、大内氏の營を斫りて、之を破る。持長解き去る。七年、元就京師に入る。右馬頭に任ぜられ、幕府の相伴衆と爲る。

通 七月、幸松が病死して繼嗣がない。家臣は集つて評議し多くの叔父の中から選んで、元就を繼嗣とした。八月、元就は吉田に入った。元就の弟の就勝は坂某・渡邊某と元就を殺さうと謀つた。元就は之を覺つて、不意に撃つて就勝と坂・渡邊を殺した。坂は、桂廣澄の兄で志道廣好の弟に當る。そこで人をやつて廣澄・廣好に諭さしめて曰ふには「余は坂があんな事をしたからとて、そなたを疑ふものではない」と。廣好は拜して禮をいつた。廣澄は之を信用しないで自殺した。その子の元澄は一族を聚めて城に立て籠つた。元就は一騎で行つて諭して之を降参させた。四年五月、大内義興は其の子義隆をして、其の將陶持長と二萬人を率ゐて安藝の諸城で尼子氏に屬してゐるものを攻めさせた。七月、尼子經久は兵を遣はして之を援けさせ、敗けて終つた。八月、元就は

部下の兵四千をつれて、夜、大内氏の陣營に斬り込んで之を破つた。持長は兵を解いて立ち去つた。七年、元就は京都に入朝した。右馬頭に任ぜられ幕府の相伴衆となつた。

語釋 相伴衆(將軍が諸侯の家で養はれる、時に相伴する役)

享祿二年、熊谷信直以事怨武田光和、以高松城來歸元就。光和怒攻之、不利。憂憤死。香川光景亦以八木城屬元就。將攻銀山。銀山餘衆終奔若狹。天文四年、元就率光景、信直等二千騎、東略備後、攻高野城。城將乞援於播磨赤松晴政。未至。元就急攻、拔之、并其兵、又徇下數城。

訓讀 享祿二年、熊谷信直、事を以て武田光和を怨み、高松城を以て元就に來り歸す。光和怒つて、之を攻め、利あらず。憂憤して死す。香川光景も亦、八木城を以て元就に屬し、將に銀山を攻めんとす。銀山の餘衆、終に若狹に奔る。天文四年、元就、光景、信直等二千騎を率ゐて、東備後を略し、高野城を攻む。城將、援を播磨の赤松晴政に乞ふ。未だ至らず。元就、急に攻めて之を抜き、其の兵を并せ、又數城を徇へ下す。

譯語 享祿二年、熊谷信直は或る事から武田光和を怨み、高松城を擧げて來つて元就に屬した。光和は怒つて之を攻めたが負けた。それで憂ひ憤つて死んで終つた。香川光景も、亦八木城を擧げて元就に屬し、銀山を攻めようとした。銀山に残つてゐた者は終に若狹に奔出した。天文四年、元就は光景、信直等二千騎を率ゐて東方備後を攻め取り、高野城を攻めた。城將は援を播磨の赤松晴政に乞うた。併しまだ援兵はやつて來ない。その間に

元就は急いで攻めて、之を陥れ、其處の兵を合併し、又數城を脅かして下した。

註 享祿(後奈良天皇の年號) ○高松城(關) ○八木城(藝安)

先是、尼子經久逐子興久、殺之、立孫晴久。晴久遇元就亡狀、大内義興病卒於享祿元年。遺言義隆曰、「元就與晴久有卻宜。以是時奪爲我、援慎勿失其驩心。吾嘗德彼、豈不記之。陶持長奉遺命、百方通好。元就終應之、攻下國內諸城、屬晴久者、晴久大怒、欲親來討之。經久曰、「元就材武、善用兵。未可以力取也。不若先定備後、石見、以形勝制之。」經久弟義勝亦諫止之。晴久皆弗聽。吉田城、東北有胄山。元就患敵陣山上、以瞰城也。會出雲間來入。元就覺之、乃議曰、「敵陣胄山、吾與宍戶隆家夾擊之。陣三猪口、則非我利也。」隆家元就女婿、守五龍城者也。間者走報晴久。

訓讀 是より先き、尼子經久、子興久を逐うて、之を殺し、孫晴久を立つ。晴久、元就を遇する亡狀なり。大内義興、病んで享祿元年に卒す。義隆に遺言して曰く、「元就、晴久と卻有り。宜しく是の時を以て奪つて我が援となすべし。慎んで其の驩心を失ふ勿れ。吾れ嘗て彼に徳す。彼れ豈に之を記せざらんや」と。陶持長、遺命を奉じて、百方、好を通す。元就、終に之に應じ、國內の諸城の晴久に屬する者を攻め下す。晴久、大に怒り、親

ら來り、之を討たんと欲す。經久曰く「元就、材武にして、善く兵を用ふ。未だ力を以て取る可からざるなり。先づ備後・石見を定め、形勝を以て之を制するに若かず」と。經久の弟・義勝も亦、諫めて之を止む。晴久皆聽かず。吉田城の東北に青山有り。元就、敵の山上に陣し以て城を瞰ふを患ふ。會出雲の間來り入る。元就、之を覺り、乃ち議して曰く「敵、青山に陣すれば、吾れ宍戸隆家と之を夾撃せん。三猪口に陣すれば、則ち我が利に非ざるなり」と。隆家は、元就の女婿にして、五龍城を守る者なり。間者走り、晴久に報す。

これより前、尼子經久は子興久を逐うて之を殺し、孫の晴久を立てた。晴久は元就を遇すること誠に無禮であつた。大内義興は享祿元年に病氣で死んだ。其の子義隆に遺言して曰ふには「元就は晴久と不仲である。この際に、元就を取り込んで此方の援とするが宜い。慎んでその機嫌を損はぬやうにせよ。余は以前、元就の爲めに褒賞を貰つてやつて、彼には善いことをして居る。彼は眞逆之を憶えて居らぬことはあるまい」と。陶持長は義興の遺命を大切にして、色々手を盡して好を通じた。元就は終に大内氏に應じて國內の諸城で晴久に屬して居るものを片端しから攻め降した。晴久は非常に怒つて自ら來て討たうと思つた。經久が曰ふのに「元就は才能武略があつて、兵を用ふることが上手である。カづくではまた取ることは出来ない。それよりは先づ備後・石見を平定し、地形の勝れた處から敵を制御したら宜い」と。經久の弟の義勝も亦諫めて之を止めた。晴久は皆聞き入れなかつた。吉田城の東北に青山といふ山がある。元就は敵がこの山上に陣取つて、城内を見下ろしはせぬかと氣遣つた。丁度其の時出雲(尼子氏)の廻し者がやつて來た。元就は之を知つたので、わざと相談して曰ふには「敵が青山に陣取ればもう占めたもので、此方は宍戸隆家と之を夾み討にしてやる。三猪口に陣取られると、どうもこちらの都合が悪くなる」と。隆家といふのは元就の娘婿で五龍城を守つて居た者である。廻し者は走つてそ

の事を晴久に報じた。

三猪口(安) ○五龍城(備)

九月、晴久將騎卒五萬來陣于三猪口、助武田氏餘黨復銀山。四近將帥怖晴久兵威、不敢援我。獨宍戸・竹原・小早川諸族遣兵數百入城。城兵凡三千人。北軍焚掠。城兵輒出擊走之。晴久叔父國久、部屬精勁稱新宮黨。忿北兵數衄、以萬騎來挑戰。元就設二伏而出戰。敵觀我寡單、縱兵而進。路狹不得齊進。伏兵夾擊破之。晴久乃作三柵于宮崎、以逼城。大内義隆遣陶隆房等將兵來援。陣天神山。十年正月、元就請隆房備晴久、而自與長子隆元攻宮崎。元就進破二柵。隆房與尼子義勝戰于三猪坂。義勝死。晴久夜遁。城兵尾擊多斬獲。銀山兵聞之亦遁。

九月、晴久、騎卒五萬に將とし、來つて三猪口に陣し、武田氏の餘黨を助けて、銀山を復す。四近の將帥、晴久の兵威を怖れ、敢て我を援けず。獨り宍戸・竹原・小早川の諸族、兵數百を遣はして城に入らしむ。城兵凡そ三千人。北軍、焚掠す。城兵輒ち出で撃ちて、之を走らす。晴久の叔父國久、部屬精勁にして新宮黨と稱す。北兵の數衄るゝを忿り、萬騎を以て來り戰を挑む。元就、二伏を設けて出で戰ふ。敵、我の寡單なるを

觀、兵を繼つて進む。路狭くして、齊しく進むを得ず。伏兵夾撃し、之を破る。晴久、乃ち三柵を宮崎に作り以て城に逼る。大内義隆、陶隆房等を遣はし、兵に將として來り援けしめ、天神山に陣す。十年正月、元就、隆房に請うて晴久に備へ、而して自ら長子隆元と宮崎を攻む。元就進んで二柵を破る。隆房、尼子義勝と三猪坂に戦ふ。義勝死す。晴久、夜遁る。城兵、尾撃し、斬獲多し。銀山の兵、之を聞いて亦遁る。

九月、晴久は騎兵歩兵五萬を率ゐて來つて三猪口に陣取り、武田光和の殘黨を助けて、銀山を取り戻した。四方近所の大將は晴久の兵威が盛なのを恐れて、誰もこちらを援けようといふものがない。たゞ、穴戸・竹原・小早川の諸族は兵數百人を遣はして、吉田城に入らしめた。城兵は皆で三千人であつた。北軍は火をつけて掠奪した。城兵はすぐに出て行つて之を撃ち走らせた。晴久の叔父の國久は部下がすぐれて強く、新宮黨といはれてゐた。北兵が度々敗けるのを怒つて一萬騎をつれて來て戦争を挑んだ。元就は二個所に伏兵を拵へて置いて、出て戦つた。敵は我が兵の少くて且つ續く力がないと見て兵を自由に縱つて進んで來た。併し路が狭くて一時に進むことは出来ない。それを狙つて伏兵が出て來て夾み討にして之を破つた。そこで晴久は三柵を宮崎に作つて城に逼つた。大内義隆は陶隆房等を遣はし、兵を率ゐて來り援けさせ、天神山に陣取つた。十年正月、元就は隆房に晴久の方を頼んで晴久に備へて貰ひ、自分は長子隆元と宮崎を攻めた。元就は進んで二柵を破つた。隆房は尼子義勝と三猪坂で戦つた。義勝は討死した。晴久は夜の間に逃げた。城兵追つかけて撃つて、斬つたり生擒にした者が随分あつた。銀山の兵も亦之を聞いて逃げて終つた。

北軍(尼子) ○新宮(出) ○宮崎(安)

十二年正月、義隆大舉攻富田。元就以兵二千從、與周防將秋山某、夾川陣。四月、河水大漲。城兵急攻秋山。元就曰「吾祖騎渡劫川。況此一衣帶水乎。」亂流援擊走之。七月、義隆敗走。元就整隊、徐退南還。是役也、吉川興經、與北軍將十餘人、叛晴久、導周防兵、已而復附之。義隆以故敗。

十二年正月、義隆、大舉して富田を攻む。元就、兵二千を以て從ひ、周防の將秋山某と、川を夾んで陣す。四月、河水、大に漲る。城兵、急に秋山を攻む。元就曰く「吾が祖、劫川を騎渡す。況や此の一衣帶水をや」と。流を亂り援け撃ちて、之を走らす。七月、義隆、敗走す。元就、隊を整へ、徐に退き南に還る。是の役に、吉川興經、北軍の將十餘人と、晴久に叛き、周防の兵を導く。已にして復之に附く。義隆、故を以て敗る。

十二年正月、義隆は大兵をつれて一度に尼子の本城富田を攻めた。元就は兵二千人を連れて從ひ、周防の將秋山某(大内方)と川を夾んで陣取つた。四月、河の水が大に増し漲つた。城兵は急に秋山を攻めた。元就が曰ふのに「吾が先祖は劫川を騎馬で渡られた。ましてこの帯の様な川を渡らないでなるものか」と。流を横切つて渡り、秋山を援け、敵を撃つて之を走らせた。七月、義隆は敗れ走つた。元就は隊伍を整へて徐々と退却し、南に歸つた。この戦争で吉川興經は北軍の將十餘人と共に晴久に叛いて周防の兵を案内した。其の内にまた元々通り尼子氏に附いた。それがために義隆は敗北したのである。

富田(出) ○夾川(田川) ○吾祖(親師)

吉川氏出於駿河、人吉川友兼、友兼誅梶原景時、子孫以功食安藝、大朝後十二世、爲興經、興經嬖大鹽某、其下皆怨、殺大鹽、廢興經、議曰「毛利右馬、與先公婚、其子皆先公外孫、可養以爲嗣、乃請元就、次子元春、入新莊城、奉以爲主、元春弟隆景、亦出爲小早川氏後。」

訓 吉川氏は、駿河の人吉川友兼より出づ。友兼、梶原景時を誅す。子孫、功を以て安藝の大朝を食む。後十二世を、興經と爲す。興經、大鹽某を嬖す。其の下皆怨んで、大鹽を殺し、興經を廢す。議して曰く「毛利右馬、先公と婚す。其の子は皆先公の外孫なり。養ひて以て嗣と爲す可し」と。乃ち元就の次子元春を請うて、新莊城に入れ、奉じて以て主と爲す。元春の弟、隆景も亦、出でて小早川氏の後と爲る。

通釋 吉川氏は駿河の人吉川友兼から出た。友兼は梶原景時を誅殺したのである。子孫は其の功で安藝の大朝を拜領した。それから十二代目が興經である。興經は大鹽某といふ者を寵愛した。其の臣下は皆怨んで、大鹽を殺し興經を廢した。相談して曰ふには「毛利右馬頭元就は先君經基と縁組されたのである。だから元就のお子は皆先君の外孫に當る。養つて繼嗣とすべきである」と。そこで元就の次男元春を請ひ受けて、新莊城に入れ奉じて主君とした。元春の弟の隆景も亦出で、小早川氏の繼嗣となつた。

新莊(安)

小早川氏之先出於伊豆、人土肥實平、實平仕源氏、食安藝、豐田、後十六世曰正平。正平子繁平、幼失明、其族黨議請養隆景、妻以正平女、居沼田城。於是吉川小早川、竝爲毛利氏、羽翼。人呼曰兩川。元春稱治部少輔、豪爽、善用兵、隆景稱左衛門佐、美姿儀、沈斷、有謀慮、皆類元就。元就以元春、未有伉儷、使兒玉就忠密問其意、所嚮。元春曰「吾欲得熊谷信直女、就忠曰「郎君得無謬聞其美乎。彼女醜惡無匹。君必悔之。」元春晒曰「然。吾素知其醜也。抑古名將多以女色失其勇、所以人不取而吾取之。人不取而吾取之、信直必感喜爲吾出死力。此間將卒、孰出信直右者。吾與之聯鋒、以爲家君之先、所向無不摧破耳。」就忠慚服、告元就娶之。信直果大喜。毛利氏、兵鋒益銳。

訓 小早川氏の先は、伊豆の人士土肥實平より出づ。實平、源氏に仕へ、安藝の豐田を食む。後十六世を、正平と曰ふ。正平の子繁平、幼にして明を失ふ。其の族黨、議し、請うて隆景を養ひ、妻は正平の女を以てし、沼田城に居る。是に於て、吉川・小早川、並に毛利氏の羽翼と爲る。人呼んで兩川と曰ふ。元春は治部少輔と稱し、豪爽にして善く兵を用ふ。隆景は左衛門佐と稱し、姿儀美しく、沈斷にして謀慮有り。皆元就に類す。元就、

元春の未だ伉儷有らざるを以て、兒玉就忠をして、密に其の意の嚮ふ所を問はしむ。元春曰く「吾れ熊谷信直の女を得んと欲す」と。就忠曰く「郎君、其の美を謬り聞くこと無きを得んや。彼の女醜惡、匹無し。君必ず之を悔いん」と。元春晒つて曰く「然り。吾れ素より其の醜を知る。抑古の名將、女色を以て其の勇を失ふもの多し。人取らずして吾れ之を取る所以なり。人取らずして吾れ之を取れば、信直必ず感喜し、吾が爲めに死力を出さん。此の間の將卒、孰れか信直の右に出づる者ぞ。吾れ之と鋒を聯ね、以て家君の先と爲らば、向ふ所摧破せざるなきのみ」と。就忠、慚服し、元就に告げて之を娶らしむ。信直、果して大に喜ぶ。毛利氏の兵鋒益々鋭し。

小早川氏の先祖は伊豆の人士肥實平から出た。實平は源氏に仕へて、安藝の豊田を領してゐた。後十六代目を正平といつた。正平の子繁平は幼い時失明した。そこで一族郎黨の者は相談して請うて隆景を養ひ、正平の娘を妻はせて、沼田城に居らしめた。かくて吉川・小早川は共に毛利氏の羽翼となつた。人は之を呼んで兩川といつた。元春は治部少輔と稱し、氣象剛く、さつぱりとして、兵を用ふことが上手であつた。隆景は左衛門佐といつて、風采が美しく、落ち着いて果斷で、謀略思慮があつた。どちらも元就に似てゐた。元春が曰ふに「余は妻を貰つてゐないから、兒玉就忠に言ひつけて、内々これと思ふ意中の女を問はしめた。元春が曰ふに「余は熊谷信直の娘を貰ひたいと思ふ」と。就忠がいふのに「若様は美しいとお聞き違ひなされたのでは御座いませんか。あの娘は容色の悪いことは無類で御座います。あんな者をお貰ひなさると屹度後悔なさいませぬ」と。元春は笑つて曰ふには「さうだ。余はもとよりその醜いことを知つて居る。一體昔の名將で女色の爲めにその勇氣を失つたものは随分多い。だから人は醜女を娶らなくとも余だけは娶り度いと思ふ譯なのである。又人が娶らない者を余が取つて妻とすれば、信直は屹度有難がつて喜び、余の爲めに死力を出して働いて呉れるであらう。この頃

頃の將卒の中で信直の右に出る者が何處にある。余は信直と鋒先をならべて父君の先鋒となるなら、向ふところ碎け破れないものはないだらう」と。就忠は尤もだと慚ぢ入り、元就に告げて、之を娶らせた。信直は非常に喜んだ。これから毛利氏の兵鋒は益々強くなつた。

沼田城(安)

十七年、元就携隆元、元春隆景、赴山口。義隆養内藤興盛、女妻於隆元、使陶隆房與元春約爲兄弟。義隆性文弱。山口多廷臣避亂者、而明人常互市焉。義隆耽詠歌、學梵譯、不復問武事。陶持長嘗憂之。持長子義清、幼聰敏、常誹義隆曰「是墮落沙門、流竄公卿耳。持長視其有不臣之志、藥殺之、更養妹婿問田某子。是爲隆房。隆房悍厲、頗得士心。持長既死、隆房與義隆、嬖臣相良、武任、有卻、結杉重政、青景、隆時、内藤興盛、謀殺武任。武任怖而遁逃。冷泉隆豐勸義隆速誅隆房。不聽。隆房伴乞骸骨、歸其邑。若山日謀反、逆家臣深野康澄、宮川房勝、引持長遺囑、大諫弗聽。二臣交刺死。

十七年、元就、隆元、元春、隆景を携へ、山口に赴く。義隆、内藤興盛の女を養ひて、隆元に妻はし、陶隆房をして、元春と約して兄弟たらしむ。義隆、性文弱なり。山口には廷臣の亂を避くる者多く、而して明人